ダンジョンでスタイリッシュさを求めるのは間違っているだろうか

宇佐木時麻

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただ一言――バージル鬼いちゃんってカッコいいよね

目次

剣姫と剣鬼 ―― 1
悪魔の引鉄 ―― 10
英雄譚の起源 ―― 23
ステイタス ―― 31
専属契約者 ―― 40
邂逅 ―― 50
番外編：思春期な狼人と迷える剣姫 ―― 62
番外編２：小さな英雄の産声 ―― 76
番外編３：強者の壁 ―１― 86
番外編３：強者の壁 ―２― 95
番外編３：強者の壁 ―３― 104
番外編３：強者の壁 ―４― 112
番外編３：強者の壁 ―５― 127

剣姫と剣鬼

激しい剣戟と己を鼓舞する咆哮が大気を轟かす。
武器を振るい魔法を駆使して戦うのは人型の種族。ヒューマンと亜人で構成されたその集団は戦気を体躯から漲らせて戦闘を繰り広げる。
対峙するのは、正しく異形と呼ぶに相応しい怪物達。山羊のような角の顔は馬そのもので朱い眼を蠢かせながら巨躯に相応しい巨大な鈍器を振るう。
人型が受けようものならば一撃で体躯を粉砕されるだろうその一撃を、前衛である筋骨隆々な体格の戦士達が歯を食い縛り何十もの盾で受け止め前衛を維持する。
その隙間を潜るように現れたのはアマゾネスの姉妹。彼女等は疾走し目前の怪物共を一太刀で斬り裂き蹴散らす。
その姿はまさしく嵐そのもの。決して止まること無く目に写る全ての怪物を斬り捨てながら突進する。
だが、それでも怪物達の猛攻は収まらない。一を殺せば三生まれ、十殺しても三十生まれている。いくらアマゾネスの少女達が敵を蹴散らしているとはいえ、それでは時間が掛かり過ぎていずれ前衛は崩壊し後衛陣まで怪物達が押し寄せてくるだろう。
だからこそ、一発逆転の詠唱が響き渡る。
「【――間もなく、焔は放たれる】」
聞こえてくるのは凛とした美声。戦場で有りながらその声音は場にいた全員の耳に入っていた。紡ぐのは絶世の美貌を持つエルフ。足元に展開された魔法陣は彼女の詠唱に反応し眩い翡翠の輝きを放ち流明する。
「【忍び寄る戦火、免れぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む】」
そしてその詠唱が聞こえていたのは冒険者だけではない。
魂に刻まれた過去の記憶か、本能がそれを悟ったのか。怪物達は眼の色を変えて前衛を粉砕し後衛に流れ込もうと猛攻する。

「【至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火】」
『――オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオウッッ！』
怪物――『フォモール』は一際大きく咆哮を轟かせ前衛に下段振りの鈍器を振り回す。
その膂力から放たれた一撃は盾越しに衝撃を伝われせ前衛を維持していた戦士を周囲ごと巻き込みながら吹き飛ばした。
「――ベート！」
「解ってるっての！」
前衛が崩れればモンスター等は後衛に流れ込み戦線は一気に崩壊する。
それを食い止めんと団長である小人族のフィンが指揮し、フォローに回らんと狼人のベートが防衛戦に急行するが距離が在り過ぎた為、数匹に侵入を許してしまう。
後衛の冒険者は魔法を駆使して援護するのが基本だ。ゆえに接近戦には長けておらず、尚且つそこに居たのはまだこの階層では一人では戦えない未熟な魔法使いだった。
怪物の咆哮と共に鈍器が上段から振り落とされ目前だったエルフの少女が吹き飛ぶ。僅かに狙いがそれ鈍器は地面を粉砕し衝撃波で小柄な少女の身体がまるで全身を殴りつけられたように呼吸が出来ない。
地面に叩きつけられ喉に固まっていた酸素を吐き出すが急な衝撃のためまともに受け身が取れず現時点自分がどこにいるのか把握できていない為、白に点滅する視界を頭を抑えながら観察する。
「――レフィーヤ!?」
「えっ？」
自分の名前を慌ただしく呼ばれる声に顔を上げ、同時に視界が暗くなる。そして同時に戦慄した。視界が暗くなった原因、先ほど前衛を突破して後衛に流れ込んできたモンスターの一体がレフィーヤの目前で鈍器を振りかぶっていたからだ。
もう間に合わない。それが本能的に理解できてしまい、どこか遠い

出来事のように振り下ろされる鈍器を眺め――直後、モンスターの首が宙を舞った。
「――――」
現れたのは黄金の剣姫。金色の髪を靡かせて、白銀の剣に付いた血を振るい削ぎ落とす。その幻想的な光景にレフィーヤは戦場でも関わらずその光景に見惚れていた。
金色の少女は背後のレフィーヤの安全を確認するため一瞬だけ意識を向けた瞬間、まるでそのタイミングを見計らったようにモンスターが投げた鈍器が少女の顔面目掛けて発射されていた。
「アイズ!?」
「――ッ!」
モンスターの渾身の膂力が込められたその投擲に僅かに反応が遅れた為、アイズと呼ばれた少女は咄嗟に剣を構え盾となるしかなかった。もう少し時間が在れば魔法を発動させるか、背後に誰も居なければ躱す事が出来たが現状レフィーヤがいるため己の身で防ぐ以外方法が無かった。
幾らアイズが第一級冒険者とはいえ彼女の戦い方は速度重視のアタッカーだ。だからこそ盾には不向きである。衝撃に耐えようとアイズ歯を食い縛り、
「――邪魔だ」
背後から聴こえてきた重苦しい声と共に、魔力で形成された無数の蒼の剣が鈍器を弾き、投擲したモンスターの眼球、喉に深々と突き刺さる。
誰が放ったなどこの団体の中で疑問に思う者など誰もいない。それを証明するかのうよに音も無く空間を斬り裂いたように蒼の剣が刺さり絶叫の雄叫びをあげるモンスターの前に蒼い男が居合の構えで佇んでいた。
「死ね」
振り抜かれるのは神速の抜刀。無拍子で放たれた斬撃は第一級冒険者であろうと白銀の軌道しか見えない。まさしく神速と呼ぶに相応しい抜刀に鯉口が鍔と重なる音が鳴ると同時に怪物の頭部が血飛

沫を降らしながら胴体から離れ地に落下した。
降り注いだ血で濡れた白色の髪を掻き上げ蒼い外套を翻す。脚には獣の爪のように尖った具足を纏ったその姿は鋭い双眸から戦鬼そのもの。
その姿を見て、一部始終を見ていたアマゾネスの少女が歓呼した。
「ナイスフォロー、バージル！」
バージルと呼ばれた青年は答えない。返答しなくても問題ないと思っているのか、彼は一瞬振り返ると直ぐに腰の刀を手に敵陣へと疾走する。
そして、一瞬だけ視線が合ったアイズには何となく彼が何と言ったか理解出来た気がした。
――邪魔になるならば引っ込んでいろ、と。
「――ッ！」
また借りが出来てしまった罪悪感とこのまま虚仮にされたくない敵愾心が混ざり合いアイズの胸に戦気を奮い立たせる。
剣を構えると、アイズも眼前の敵陣に進撃するバージルに負けないよう同じく敵陣に突入する。
「ちょ、アイズ、それにバージルも、待って!?」
制止の言葉を振り切り先に進軍していたバージルが大地を踏み砕く勢いで跳躍しフォモールの大軍の中心に頭上から落下する。地面に着地する寸前、彼は胸のうちで呟いた。
「……跪け」
幻影剣二式――円陣幻影剣。
着地した直後、彼の周囲のフォモール達が一瞬で胴体を切り刻まれる。切り刻んだのは彼の周囲を円となって回転する八刀の蒼い幻影剣。バージルの魔力によって練成されたその剣は変幻自在。
フォモール達が突如頭上から現れた乱入者に驚愕しているうちに、バージルは疾走を開始する。自身の周囲を展開する幻影剣は前後左右関係なく斬り裂き、眼前のモンスターを神速の居合で真空の刃を生み出し切り裂いていく。遠くへ逃げようものなら幻影剣を発射して捉えるまで。

その姿はまさに無双。蒼と朱に彩られた剣舞は敵味方関係なく魅了するほど。
そしてその剣舞に黄金の剣姫が参戦する。
「――これで、貸し借りなし」
バージルの背後、恐らく味方の屍を盾にして接近していたのであろうフォモールが鈍器を上段に構えたまま頭部と胴体が別れを告げる。それを行ったのはアイズだった。
これでさっき助けられた借りは返した、そう目で告げるアイズにバージルは冷たい双眸を一度向けると、
「フン、ならば――次は精々周囲を警戒しておけ」
無拍子で幻影剣がアイズの顔を擦れ擦れで横切った。続く悲鳴音。振り返ればそこには他の死体に紛れてフォモールが横になったまま鈍器を振り抜こうとして頭部に幻影剣が突き刺さって絶命している姿があった。
得意気な顔をしている所への失態にアイズの頬が僅かに紅潮するが、バージルは意にも介さず更に敵を殲滅に掛かる。負けじとアイズも剣を振るう。
蒼い外套と金色の長髪が翻り鮮血に染める。斬撃と剣戟が重なり合い前衛に襲い掛かる怪物を物言わぬ屍へと変えていく。
「【汝は業火の化身なり】」
「【ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを】」
剣舞が続く中、後衛より膨大な魔力が膨れ上がる。それは即ち詠唱の完成に他ならない。
「アイズ、バージルも、戻りなさい！」
己の名を呼ぶ声にアイズが後退し、バージルもバックステップで跳躍する。味方が誰もいなくなり収縮していた敵陣に空中で反転しながら彼は右手を前へ突き出しつつ振り下ろす。
「沈め……！」
幻影剣三式――――五月雨幻影剣。
バージルの呟きに反応するようにフォモール達の頭上、そこからまるで雨の如く幻影剣が斬撃の雨を降り注いだ。怒りに狂っていたモ

ンスター達はそれに反応できず容赦なく突き刺さる。
バージルの幻影剣のお陰で数瞬時間稼ぎできたが、少々アイズ達を巻き込まないように戻らせるのが早すぎた。設定された魔法陣から出てしまう勢いでフォモール達が突進してくる。
――故に。
だからこそ、彼は剣を抜いた。
それは魔法ではなく剣戟の極致。彼が長年の鍛錬の末に辿り着いた居合の絶技。
距離など関係ない。その斬撃は次元さえも斬り裂き空間を歪ませる神速の抜刀術。
「――消えろ」
魔剣技、次元斬――
前衛のフォモール達が跡形もなく斬り裂かれ、同時に魔法が完成する。
「【焼き尽くせ、スルトの剣――我が名はアールヴ】！」
瞬間魔法陣は広がり全てのフォモール達を包み込む。その魔法は範囲殲滅魔法。白銀の杖を翳し、エルフの魔道士であるリヴェリアは高らかに魔法の名を口にした。
「【レア・ラーヴァティン】!!」
それは正しく天へと昇る業火だった。阿鼻叫喚するモンスター達の悲鳴すらも飲み込んで炎の蛇は螺旋を描きながら魔法陣の内側に存在する全てを燃やし尽くす。五十ものモンスターの大軍は、僅か一瞬で塵も残さず灰と化した。

◇◇◇

戦闘が終わり、他の皆が休憩（レスト）に向けて武器の整備やテントの張り、肉果実や木の実の食料を調達している中、アイズは一人落ち着ける場所を探していた。
進めば進むほど後方から騒ぐ声が遠くなり静寂さが包んでいく。
別に騒がしいのが嫌いなのではない。仲間と一緒にいるのは楽し

い。だがあまり話すのが得意ではない彼女はこうして静かな場所で一息吐きたかった。
そして、そんな自分と同じように一人が好ましい人物を彼女は知っている。
「……いた」
案の定、予想通りの人物がいた。灰色の樹林に囲まれた景色が見える最端、作成された野営地である広大な一枚岩の端に蒼い外套がぽつりと見える。ふと近づくと声も掛けていないのにも関わらず十五Mもの距離越しに男は肩越しに一瞥してきた。
「何のようだ、アイズ」
逆立てている白髪は風のせいか垂れ落ち、鋭い双眸が髪の隙間から覗かせている。その少し新鮮な髪型にアイズは若干見惚れるが、答えなければすぐバージルの機嫌が悪くなるため返答した。
「別に。ただ来ただけ」
「……そうか」
それだけ告げるとバージルは正面に向き直り振り返ることは無かった。
アイズもそれ以上口を開くこと無くバージルの隣に膝を丸めた状態で座り込む。
静寂が彼らを包み込む。その重苦しい雰囲気にほとんどの者ならば耐え切れなくなるが、アイズはこの雰囲気が好きだった。
アイズは元々話すことが得意ではなく、バージルも自分から会話を切り出すような真似はしないため基本的に無言となる。
しかしそれは決して拒絶の沈黙ではなく、自然体の沈黙だった。そしてその静寂とバージルの背中はどこか昔の出来事を思い出させる。
そう、それは嘗て見ていた、父の背中を思い出して――
「……」
どこか安心する雰囲気にふと睡魔が訪れ、アイズはそれに抗うことなくゆっくりと意識を沈めていくのだった。

◇◇◇

――気が付いたら俺は転生していた。
元大人になる年齢だったのにも関わらず、気がつけば幼少時代に戻っており尚且つ名前と顔が別人になってた。
しかも聞いたこと無い異国の土地だし、正直言葉が日本語変換されてなかったら詰んでた自信があるね俺は、悪い意味で。
何故自分がここにいるとか、そもそも俺は本当に死んだのかとか色々悩んではみたが、幾ら考えたところで解るはずもなく結果としてとりあえずこの世界を生きてみることにした。
幸い祖父と弟と俺の三人家族で不自由なく過ごせたし、祖父がよくこの世界について語ってくれたため知識はついた。
ふむふむ、この世界にはダンジョンという地下迷宮があって、そこはオラリオと呼ばれていて、神様の恩恵を授かることで【神の眷属】となって力をもらいダンジョンを探求してハーレムを作れと。なるほどなるほど。
……それってダンまちじゃね？
前世の記憶とも呼ぶべきか、あまりに聞き覚えのある単語の数々にふと冷や汗が流れる。いや、確かに弟の名前がベル・クラネルって聞いてどっかで聞いた事あるなーとは思ってたんだよ。でも普通自分のいる世界はフィクションとは思わないじゃん!?
最初の頃は世界の真実に絶望していた俺だが、ふとある日脳裏を掠めた。
目には目を、歯には歯を。つまりここがフィクションならば――同じくフィクションで対抗できるのではないかと。
つまり感謝の素振り一万回とか十分間息をすいつづけて十分間はきつづけるようにするとか、そういう無茶な特訓も可能なんじゃないだろうか！　中二病がなんぼのもんじゃい！　最後まで貫けばそれは本物だって正義の味方が言ってたもの！
やるからには一つを極める。そして俺が選んだのは悪魔の鬼兄ちゃんだった。だって名前がバージル・クラネルだし。もうこれは神様が俺にバージルロールプレイをしろと言っているのも当然！　次

元斬とかまじブッパしたいですはい。
そして。そんなかんやでベル君十歳、俺十四歳の時に「俺の魂が言っている……もっと力をと！」みたいなその場のノリに合わせて家を飛び出して一人でオラリオに到着。え？　どうしてベルと一緒に行かなかっただと？　そんなことしてみろ、あのヤンデレ美の女神様が邪魔な存在として絶対消しにくる。もしくは試練に巻き込まれる。それは勘弁して下さい割りとマジで。
そしてなんやかんやあってロキ・ファミリアに入隊し四年の月日が流れて今に至ると。
そして俺は現在、過去現在において最大のピンチに襲われていた。
「スゥ……スゥ……」
勘弁して下さい死んでしまいます（俺が）。
気が付いたらアイズが見事なフォームでそのまま俺の膝元に倒れこんできた。余りにも迷いなくそのまま膝枕の体勢になってしまったためどう反応すればいいか解らず硬直してしまった。
寝顔はまさに天使――なんて言ってる場合じゃねえ。アカン、余りに想定外過ぎてこんな時どんな反応すればいいのか解かんねえ！
バージル鬼兄ちゃんならどうする？　首斬りですね解りたくありません。
「……全く」
外面では呆れたように嘆息、内面では滅茶パニクりながら救世主となる第三者の介入か、アイズが目覚めるのをひたすら願った。
ロキ・ファミリア所属、Ｌｖ．６、二つ名【剣（スパーダ）】、バージル・クラネルは今日も元気です。

悪魔の引鉄

５０階層に降り立った【ロキ・ファミリア】の各々は短い休憩を行っていた。そんな中、団長であるフィンが【ディアンケト・ファミリア】の５１階層にある『カドモスの泉』より要求量の泉水を採取する冒険者依頼を引き受けた事からそれを採取するために小数精鋭の隊員を送る事となった。

少数精鋭に選ばれたアイズ達だが、その階層には強竜（カドモス）――特定の階層にしか現れない『迷宮の孤王（モンスターレックス）』を警戒していた。

Ｌｖ．６相応級のモンスターとの敵対に緊張が奔る彼女達だったが、強竜（カドモス）の住処に訪れればそこには討伐対象であった強竜（カドモス）が無残な屍となって朽ち果てていた。

冒険者ではない、何かの仕業――直感的に悟ったアイズ達が直ぐに『カドモスの泉』を回収するともう一つの精鋭である団長達のグループと合流しようとするが、そこで新種のモンスターと遭遇する。

形状は芋虫の形。全長が四Ｍものある天井と激突するほどの巨体であり、そして何よりも恐ろしいのが第一級冒険者達が使用する一級品装備すらも触れれば一瞬で溶解する腐食液を体内に保持しているということ。

その異形の集団に襲われ、何とかレフィーヤとアイズの魔法でその場を乗り越えるが、その未知の怪物達は【ロキ・ファミリア】の休憩所まで進軍していたのだった。

本陣と合流し各々が決死の覚悟でモンスター達の殲滅に取り掛かる。ある者は魔法で、ある者は武器を溶解させてでも、ある者は赫怒に身を任せ素手で怪物を鏖殺する者もいた。

多くの武器と資源を失い、それでも全滅させ難を逃れたかのように思えたが、その喜びを嘲笑うようにその絶望は樹々を粉砕しながら彼らの前に顕現した。

芋虫を連想させる下半身、扇のような厚みのない二対四枚の腕、人型の形をしているがその姿は醜悪で、六Ｍをも超える巨体にはその身に相応しい夥しい量の腐食液が貯めこまれているのが一目で理解出

来た。
誰もがその姿に呆然としている中、女性型のモンスターが一人動く。
四枚の腕に付着していた鱗粉が虹色の光沢を放たれ周囲に展開し、刹那、大地をも抉る光爆が連続する。
その威力、その相性。それらを一言で表すならば、絶望。
圧倒的不利な状況を前に団長であるフィンはある決断をする――

◇◇◇

「総員、撤退だ」
粉塵が視界を覆う中、フィンは冷静にその場にいる団員に告げる。
「速やかにキャンプを破棄、最小限の物資を持ってこの場から離脱する。リヴェリア達にも伝えろ」
「待てよ、フィン。それじゃああいつはどうすんだよ!?」
「あんなの放って置いたらとんでもない事になるかもしれないんだよ!?」
いち早くベートとティオナが噛み付くが、それはその場に居た皆の代弁でもあった。
彼らは迷宮都市最大派閥（ロキ・ファミリア）としての誇りと責任がある。そのゆえに目前のモンスターを放置すればやがて階層を昇り多くの被害を齎すことを黙って見過ごせるはずがなかった。
そしてそれは、発言した【ロキ・ファミリア】団長とて同じ。
「僕も大いに不本意だ。でもあのモンスターを必要最低限の被害で始末するにはこれしかない。月並みの言葉で悪いけどね」
そう告げて、フィンは一度周りの団員を見渡した。
誰もが５０階層に来る前とは違い消耗している。武器を失い、魔力を消費し、そして何より気力が削がれてしまっている。
だが。その中で唯一全く様子の変わらない者がいる。一目見れば何も変わっていないように見えるアイズでさえ良く見れば腐食液が

身体に飛び散っているというのに、そいつだけは全く変化していない。
　それはその者が何もしていなかったからではない。むしろその逆、ここに居る皆が誰よりも敵を葬っていたところを目撃している。
　それはつまり――――
「バージル、やれるか」
「誰にものを言っている」
　鯉口から未だ鈍らぬ銀光を煌めかせる刀を手に、バージルはさも当然のように団員達の前に立っていた。
「待って。私も残る。私の『魔法』なら腐食液(あれ)にも対抗できる」
　それにいち早く反論したのはアイズだった。確かにアイズの魔法【エアリエル】ならば風を刀身に纏わせることで刀身に腐食液が付き溶解するのを防ぐことが出来る。
　だがその提案をバージルは振り返る事もなく切り捨てた。
「いらん。足手纏いになるだけだ」
「――――」
　それは拒絶。意に物を言わさぬ完全な拒絶にアイズは思わず硬直してしまう。そして直ぐ俯いて固まってしまった。
　――――Ｌｖ(アイズ)．５ではＬｖ(バージル)．６の足手纏いになる。それが彼らの関係の全てを物語っているようで、アイズは何もいえなくなってしまった。
　そんなアイズの様子にベートがカッと目を開き犬歯を剥き出しにバージルに胸蔵を掴みに掛かるが、
「バージル、テメェ――――ッ！」
「ベートォ!!」
　だがそれはフィンの怒号によって止められてしまう。
「時間がないんだ。急げ」
「ッ……クソッ！」
　振りかざした拳を抑え、怒りを発散するように地面を蹴りつける。歯を食いしばり唸るようにバージルを睨みつければ、彼は何の反応も返さずただ目前のモンスターと対峙していた。

その在り方が。弱者（ベート）に構わずただ己であり続ける強者（バージル）に見えて――己が目指す強者の在り方そのもので、更に苛立った。

苛立ちを隠さず舌打ちをしながらベートは撤退の準備を行うために離れ、アマゾネス姉妹とレフィーヤも心配しながらそれに続く。一瞬、フィンはバージルに後悔を宿した眼で見て、

「すまない、バージル」

「何度も言わせるな、要らん世話だ」

「ああ、そうだったね。行くよ、アイズ」

「……」

フィンに連れられ、アイズは最後にもう一度振り返った。

蒼い外套に包まれたその背中。それがどこまでも――遠くに感じた。

そして、撤退する団員達を見ていた女体型のモンスターはそれを追撃するように爆粉が大量に付着している四枚の腕を振りかざし、

「何処を見ている」

刹那、飛来した四本の蒼き魔力の剣がそれらの腕を一瞬で貫いた。

『――――！』

声にもならない悲鳴を上げるモンスター。それを無視するように、コツコツを地面を叩く具足の音が響く。

背中にはまるで装填されたように複数の蒼き剣――幻影剣を携え、バージルは冷酷に告げる。

「貴様の相手は、俺だ」

同時に跳躍、地面を蹴り上げ疾走する。その速度は微かな残像が写るほどに。

接近に感づいたのか、モンスターは甲高い絶叫を鳴らすと無貌だった顔面部が縦に裂け、一直線上に鉄砲水の如き速度で人間一人を丸々飲み込む量の腐食液が放出される。

大量に地面に撒き散った腐食液は、バージルが立っていた場所が跡形もなく溶解するほどの威力。だがそれは、

「――――遅い」

鯉口と鍔が重なる音がモンスターの背後より響く。

瞬間、無数の斬撃がモンスターの体躯に切り刻まれる――――その時ようやく、モンスターは自身が斬られていた事を理解した。
疾走からの居合。斬られた事すらも気づかせぬほどの神速こそがバージルが腐食液に触れても刀が溶けぬ理由だった。
アイズが風を纏って刀身を保護しているというならば、バージルは神速の抜刀によって真空を生み出し、〝剣圧〟で腐食液から刀身を守っていた。
『――――!』
斬られた激痛にモンスターは赫怒を顕に雄叫びを上げ、四本の腕を振るい背後にいるバージルを吹き飛ばさんと振り向き際に爆粉を背後全体に撒き散らす。
喰らえばその爆発はひとたまりもないだろう。だがその動作はあまりに無駄で、その隙を付かないほどバージルは愚か者ではなかった。
「やる気があるのか?」
『!』
心底侮蔑するような呟きと共に、まるで流れ星の様な飛び膝蹴りが振り返ったモンスターの腹部に直撃しくの字に身体が曲がる。
【ヘファイストス・ファミリア】製、特殊武装(スペリオルズ)《ベオウルフ》。
光の力を宿す嘗て倒した階層主から創られたその魔具は持ち主に呼応するように更なる光を放ちモンスターを内側から滅ぼしていく。
突き刺さる左脚を腹部に固定し、動きが停止したモンスターの頭上に自由な右脚を振り上げ、そのまま月輪の如き踵落としを背中に叩き込む。
くの字は逆向きに変わりモンスターの身体は慣性によって前に吹き飛ばされ――――直後、爆粉は主であるモンスターを飲み込んで自身すらも燃料に尋常ではない爆撃音を轟かせた。
「ほう、存外丈夫のようだな」
爆撃地。そこには未だ原型を保っていた女体型のモンスターの姿があった。疾風居合で断ち切ったはずの四本の腕にある切り傷も浅く、ベオウルフで蹴りつけた感触もまるで壁を蹴り付けたような重量

感だった。
「ならば――次で終わらせる」
腰を僅かに下げ居合の構えを取る。左手の親指を鍔に掛け神速の居合を解き放つ。それは物質を斬るのではなく、次元を斬る技。喩え敵が如何に頑丈であろうとも関係ない。
その首を断ってやろう――バージルが鍔を親指で弾こうと力み、直後、背後から爆発が襲いかかってきた。
「――チィ！」
それは今まで経験してきた本能か、バージルは思考する間もなく無意識に背後から迫る熱を感じ真横に跳んだ。直後、鼓膜が破れるほどの爆音と共に爆発し無様に吹き飛ばされ、地面を転がるように着地する。
突然の爆発に動揺してしまったが、確かにあの爆発は目前の女体型のモンスターが放ったものではなかった。それはつまり、
『――』
『――』
同じ姿をした女体型のモンスターがもう一人、まるで影のようにそこに佇んでいた。
新種のモンスターが二体。しかもそれは腐食液と爆粉の量が二倍になったということだ。ただでさえ一体でも厄介だというのにそれが二体。しかも下手をすれば片方を相手しているうちにもう片方が敵味方諸共腐食液や爆粉に巻き込んでくるかもしれない。
その光景は並大抵ならば絶望に打ちひしがれるかもしれない。だが、
「手間を掛けさせる」
それだけ告げると、背後に複数の幻影剣を作り出しモンスター達と対峙する。
本来ならば戦気を失ってもおかしくない絶望差をバージルは手間だと言って切り捨てる。
『！』
『！』

殲滅するつもりなのか、二体のモンスターは合計八本の腕を広げ見たことのない量の爆粉をバージルに向かって解放する。それを、爆発させるまえに仕留めようと爆粉を突き抜ける覚悟で居合の構えを取り、

「――【目覚め(テンペスト)よ】」

聴こえてきたのは、風の妖精の音色。

瞬間、迫り来る爆粉が風に流され押し返され中間地点で激しい大爆発が引き起こされる。あまりの衝撃に大地が削れ、地震の如く地が揺れる。

粉塵に視界が覆われる中、一人の人影がバージルの前に立っていた。やがて煙が晴れていきその姿が露となる。それは黄金の髪を靡かせた剣士。

アイズ・ヴァレンシュタインがそこに居た。

「なぜ貴様がここにいる、アイズ」

「……もう一体あのモンスターが見えたから」

「だから手助けに来ただと？　言ったはずだ、貴様が来た所で足手纏いにしかならんと。解ったならばとっとと失せろ」

アイズの様子を一切見ずバージルは前方にいるアイズを追い越して怪物達と対峙しようとする。

だがそれは、喉元に突き立てられたアイズの《デスペレート》によって防がれた。

「……何の真似だ」

「……ならない」

一度目は小さく、だが熱を帯びてアイズはバージルの双眸を直視する。その目に宿るのは譲れない信念。アイズは一度小さく息を吸うと、今度こそはっきりと己の思いを口にした。

「足手纏いには、ならない」

――アイズ・ヴァレンシュタインにとって、バージル・クラネルは特別な存在だ。

初めて顔を合わせたのは彼女が冒険者となって数年後、二級冒険者となってしばらくたった頃だった。
最初に思ったのは随分と無茶をする人だと思った。本来ダンジョンに潜るときはメンバーを組んで挑むのが基本だ。アイズとて始まりはそうだったが、バージルは初めから頑なにソロで挑んでいた。
その上ダンジョンから帰還するたびに酷い怪我を負っていた。『冒険者は冒険してはならない』という教えを破り、貪欲に餓狼のように力に飢え、バージルは誰の手助けも受けず強さを求めていた。
そして、守る存在は気が付けば背中を預ける存在にまで成長し、自分の半分も満たない四年の期間でバージルはいつの間にか背中を追い掛ける存在にまでなったいた。
その姿に暗い嫉妬をしなかったといえば嘘になる。だがそれ以上にアイズはバージルに羨望し――英雄だった。
だからこそ、アイズは思うのだ。
足手纏い（守られる存在）ではなく、肩を並べる（共に戦う）存在になりたいのだと――
「……フン」
その瞳から何かを感じ取ったのか、或いはただ呆れただけなのか。バージルはアイズから視線を外すと怪物達を見据えたまま、
「今回だけお前に付き合ってやる」
「――――」
前に出るのではなく、肩を並べるようにアイズの隣に立ち静かに告げた。
その言葉にアイズの口元が僅かに吊り上がる。それは気紛れなのかもしれない。それでもバージルが隣に立つことを許してくれた。それが何より嬉しくてニヤけそうになる頬の筋肉を必死に押さえつけていた。
「貴様は左をやれ。手助けは期待するな」
「助けてと言ったら、助けるよ？」
「それだけ軽口を叩けるならば重畳だ」
バージルは普段通り仏頂面で《閻魔刀》を手に、アイズは《デスペレート》を手に少しだけ笑っていた。

ああ、この二人で――――負ける気などするはずがない。
「行くぞ」
「うん」
合図は一瞬、両者はまるで爆発したような勢いで跳躍し、己が戦う敵と激突した。

◇◇◇

バージルが向かったのは右のモンスター、四枚の腕には切り傷が奔り身体には自身の爆発によって深い火傷を負った先ほどから戦闘している女体型のモンスターだった。
モンスターはバージルが接近してくるのを悟ったや否や、まるで怨敵の如く金切り声を上げながら対峙する。顔面部に口がないというのにどこから声を出しているのかは定かではないが、確実に個人に対して明確な敵意を示しているのは明白だった。
背中にあった無数の蔦が変幻自在に動き、その先端に付いていた蕾から大量の腐食液が周囲に撒き散らされる。その量と予測困難な軌道は接近を困難にさせ、更に接近は赦さないとばかりに怪物は爆粉がこびり着いた四本の腕を振るい周囲を無差別に爆発させる。
それは確かに厄介な戦法だった。特殊武装を一瞬で溶かすほどの強力な腐食液、一瞬で広範囲を爆発できる爆粉。並みの冒険者ならば束になっても全滅は防げないだろう。
だが、それを凌駕してでこそ――――第一級冒険者。
無差別に爆発させる、それは確かにバージルの接近を妨害するだろう。だがそれは、怪物が明確にバージルの接近を忌避しているという答えに他ならない。
そしてそのような大技を連発すれば対処法など初見でも思いつく。
「フ――――！」
爆粉が爆発するまでのラグはおよそ三秒。それこそが怪物自身を爆発に巻き込まないために爆粉が離れる距離。だがそれは逆に言えば、一度爆発すればそれだけのタイムロスが必要となること。

バージルは爆粉によって罅が奔った地面に渾身の踵落としを叩き込み三Mもの岩石がめくれ上がる。それを目前に蹴り上げると、怪物目掛けて押し潰す勢いで渾身の回し蹴りで岩石を吹き飛ばした。
飛来する岩石。それを感づいたのは何度も屈辱を舐め合わされて理解したモンスターの学習能力ゆえだった。腕を振るい自爆覚悟で直ぐ様爆発させて――――無貌の顔を引き裂いて腐食液の入り口を開いた。
直後、岩石は跡形もなく粉砕する。粉塵が舞い視界を覆い――――蒼い外套が翻ったのが見えた。
『――――!』
皮肉にもバージルの攻防のせいでモンスターの知性が上昇していた。恐らく岩石を盾に接近し斬りつけようとしていたのだろう。それを予測し、空中に跳躍していた蒼い外套に目掛けてモンスターはこれまで見せた事のない速度と量の腐食液を一気に放出し、それは直撃した。
溶けていく蒼い外套。それを前にモンスターは勝利を確信し――――
「なるほど、どうやら少しは考える能があったらしい」
それを否定する冷酷な呟きが怪物の背後から聞こえた。
『――――』
その時モンスターが感じたのは驚愕が、或いは真実から目を逸らす為の現実逃避か。
バージルはモンスターが学習しているのを理解していた。自身を近づかせない為の爆発と腐食液の連発。端から見れば駄々をこねるように暴走しているようにも見えるが、あれは己を接近させないための〝術〟なのだと予測できた。
だからこそバージルは罠を張った。岩石を蹴りつけ視界を覆い蒼い外套を投げつけ自身は背後に回った。もしモンスターに知性があるならば乗ってくるだろうと予測して。
皮肉にもモンスターが〝理性〟ではなく〝本能〟で、怪物の如く蹂躙し、勝利を確信して心に隙が出来るような真似をしなければ或いは

この結末は違っていたかもしれない。
だが、それはもしもの話。ここの勝者はバージルだった。
振り返る隙など与えない。構えられた必殺の居合は今度こそ怪物を一刀両断する。
「――――終わりだ」
「――――リル・ラファーガ」
聴こえてきた声と告げる声が同時に響く。
神速の居合がモンスターと重なるように球体を生み出し、それは空間を歪曲したかのように無数の斬撃が奔り怪物を肉片に分割する。体内に詰まった腐食液は空間の歪みに巻き込まれたように固定され、それは周囲に飛び散ることなく地面に落下した。
同時に爆発。爆発した方向を見ればそこには跡形もなく、少し離れた場所にアイズが佇んでいた。先ほどの爆発はアイズがモンスターを倒した際に発生したものなのだろう。
アイズは振り返るとバージルの元へ向かう。
「……私の方が早かった」
「ふん。そんな軽口を叩くならば――――」
そう告げて、アイズの口にポーションを無理やりねじ込んだ。突然の事にアイズは反応できず素直にポーションを飲み干す。
「あの程度の相手に怪我を負わないようにするんだな」
「……バージルだって、服やられた癖に」
ポーションを口に加えたまま恨めしそうに僅かに眉を潜めながらアイズが無言の抗議をするが、バージルは意にも介さず他の団員達と合流すべく振り返る。
直後。
「……え？」
ポロリと、アイズの口から空のポーションが地面に落ちて割れる。だが、そんなものはアイズの視界には入っていなかった。それがどうでもいいと思えるほど、圧倒的絶望が訪れていた。
『――――！』
『――――！』

『――――!』

目に見えるだけでも三十は超える芋虫のモンスターの大軍。それを引き連れるように先ほど倒した女体型のモンスターの同種族が四体も同時に天井の裂け目より降ってきた。

『怪物(モンスター)の宴(パーティー)』。

それが最悪のタイミングで、最悪の相手を呼び出してしまった。

「……!」

心が折れそうになる光景を前にそれでもアイズは剣を構えた。されど先の激戦の影響か刀身は僅かにブレ、重心も普段より下がっている。一体でさえこの始末だというのにそれが四体、更に周囲に芋虫のモンスターがあれほど複数いれば死闘は免れないだろう。

もしかすれば、これを乗り越えればより高みに到れるかもしれない。

だが、そんなアイズの葛藤を無視するようにバージルは静かに呟いた。

「……仕方ない、か」

その声音には諦めも失望もなく、在るのはただ確認するような機械的な声。それらを前にしてもバージルは変わること無く刀を手にアイズに告げる。

「伏せていろ、二度は言わん」

「え……?」

バージルの言葉に驚きつつも素直に従うアイズ。彼は一歩踏み出すと自分達を囲っているモンスター達に向けて冷酷に宣言した。

「貴様らにこれを見せるのは億劫だが、一瞬で終わらせてやる」

バージル・クラネルが使える魔法は一つしかない。

幻影剣は正確に言うならばあれはただ魔力を剣の形に変えてそれを放出しているスキル【魔力放出(ダークスレイヤー)】の応用に過ぎない。次元斬もあれはバージルが極めた居合の技だ。

ゆえにバージルの魔法はただ一つ。それは彼が思い描く最強の姿。深淵に眠る渇望の姿を顕現させる変身魔法。

その詠唱は――――

「――【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】」

刹那、バージルを中心に空間が悲鳴を上げた。

その姿はまさに古き書物に乗る悪魔そのもの。顔面部は異形の者となりて身体も人とはかけ離れている。直視できるほどの蒼いオーラを身に纏いそれはその場に顕現していた。

その威圧、その雰囲気に背後から見ていたアイズも他のモンスター同様息を飲んだ。目前の存在がバージルだということは気配で解る。だがその質が普段とは桁外れに跳ね上がっている。

バージルは刀の鍔に指を当て、

直後――空気が死んだ。

この場にいる全員が球体型の空間の歪みに呑まれ、悪魔の姿が分身するように掻き消える。そこまでがアイズの見えた光景だった。まるで一瞬が永遠にでもなったような体感速度のあと、アイズの目前に立っていたのは普段見慣れた人の姿のバージル。

彼は刀を前に、ゆっくりと刀身を鞘に収めていく。そして鯉口と唾が重なった瞬間、別れを告げた。

「――死の覚悟は出来たか？」

魔剣技奥義――次元斬・絶。

カチンッと、鍔の鳴る音――瞬間、周囲にいたモンスターの身体に無数の斬撃が切り刻まれて肉片と化した。

「――」

言葉が出ない。刀を収めるその姿、それにアイズはただ見惚れてしまっていた――

英雄譚の起源

いやー、新種のモンスターは強敵でしたね！

現在俺達はトラブルも在った為かダンジョンの『遠征』を中止して地上への帰還すべく階層を昇っていた。ティオナが不満そうに口を尖らせて文句を言っていたが、正直俺としては大変ありがたかったです。

何故ならと言いますと、

「アイズ？　どうして僕の命令を無視して勝手に行ったのかな？怒ってないから正直に言ってごらん？」

「……そ、それは、その……」

――滅茶苦茶フィン団長が怖いんです、はい。

表情はにこやかに笑っているが目はピクリとも笑みを浮かべていない。過去の経験であれは本気で怒っている時のフィンが浮かべるものだと知っていた。何処かで笑顔の起源は威嚇だと聞いた覚えがあるが正にその通りだった。

「……！」

ふと、助けを求めるようにアイズが小動物を連想させるような上目遣いでこちらを見てくる。アイズが援護に来てくれたのは嬉しかったが、やった事は命令違反だ。ちなみに俺はちゃんと命令を守ったから何も怒られず悠々と歩いている。

正直、アイズには助けられた恩があるから何とかして助けて上げたいという気持ちはある。だが、

「……」（スッ）

「！」（ガァーン！）

それを無視する形で目を逸らした。アイズが背景に雷が奔って見えるほどショックを受けているようだが今回は勘弁して下さい。ぶっちゃけ今のフィンには近づきたくないんです、何だか飛び火しそうな勢いなので。

「バージル」

「なん――――」

声を掛けられた方に振り向くと、そこにはロキ・ファミリアのオカンであるリヴェリアに太くて硬い大きな棒を口に押し付けられた。
我々の業界ではご褒美です！　と言っても与えられたのは精神回復薬（マジック・ポーション）なんですけどねー。それを一息で飲み込むと空のポーションを吐き出しリヴェリアに問いかける。
「……何の真似だ」
「【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】を使ったな？　普段のお前ならば簡単に避けられたはずだというのに、何の反応も出来なかったのがその証拠だ。ほぼ精神疲弊（マインドダウン）の状態でよくそこまで動ける。左半身もほとんど感覚がないのだろう？」
「え――――？」
リヴェリアの嘆息混じりの言葉に聞こえた者達が驚愕した表情でこちらを見る。俺はその視線に気恥ずかしくなりそっと視線を逸らした。
リヴェリアの言った事は間違いでなはない。先ほど使った変身魔法【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】が俺が望む最強の姿に変身することが出来る。この魔法が無ければあの必殺技『次元斬・絶』の再現も不可能だっただろう。
だがこの魔法、かなりの欠点が存在した。
この魔法、【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】は――――ものすっっっっっごく！　疲れるのである。
身体そのものを変身させているので常時よりも強力且つ高速に移動する事が出来るが、代わりに魔力を尋常ではない勢いで消費する。どうやら時間と運動量によって消費量が増大するらしく、途中で解除することも出来るが強制解除された場合はほぼ魔力が尽きたと思って良い。
ぶっちゃけあの数のモンスターを倒すなら『次元斬・絶』を一発放つより『次元斬』を十発放つ方が断然効率が良い。その方が後でも楽々魔力が残っていただろうし。まああの場合はアイズがいたから速攻で終わらせる必要があったのでそっちを選んだ訳なのだが。
実際先ほどから眠気と怠さと疲労感が限界突破して正直このまま

ぶっ倒れたい所存だし、左半身に至っては感覚が無くてほとんど機械的に動かしているのも当然だった。だが、それでも倒れる訳にはいかなかった。何故なら、

――――バージル鬼いちゃんのそんな情けない姿見せれるはずがないだろう！

それはもはや見栄。ここまでバージルロールプレイを続けてきた身としてはそんな情けない理由でやめる訳にはいかなかったのだ。だからこそ気合いと根性だけでここまで何ともない顔で歩いてきたのだ。

しかし、長年続けてきた俺のバージルポーカーフェイスを見破るとは……流石はリヴェリア、ロキ・ファミリアのオカンだぜ！

『ヴヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!』

そんな事を考えているとミノタウロスの群れが集団で行く手を阻むように現れた。本来ならば下の団員に【経験値】を稼がせる為に第一級冒険者達は戦わないのが基本だが、今回は数が非常に多く俺達第一級冒険者も参戦することになった。

やせいの　ミノタウロスたちが　とびだしてきた！

アイズたちの　こうげき！　ミノタウロスたちの　7わりが　ぜつめつした！

やせいの　ミノタウロスたちは　にげだした！

『なにいいいいいいいいいいいいいいいいイイ――――!?』

まさかの事態に驚嘆の声を上げる冒険者一同。モンスターから逃亡する冒険者は居れど、逆の冒険者からモンスターが逃亡するとは夢にも思っていなかった。俺も声には出さなかったが驚きのあまり目を見開いていたし。

「マズい、あのまま逃げられたら中層で尋常ではない被害が出る！追え、お前達！」

「クソッたれがァッ！」

「遠征の帰りだっていうのにさぁ……っ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!?」

「あ、あの私白兵戦は苦手なんですけど……っ!?」

「杖で殴れば問題ない」
（あれ？　これひょっとして俺もそれに含まれてる？　俺、精神疲弊（マインドダウン）状態なんですけど!?）
　各々がそれぞれ心から文句を告げながら逃亡したミノタウロスを追うべく上層部への階段に目掛けて疾走を開始する。
　ここに冒険者達とミノタウロス達との命を掛けた追いかけっこが勃発した。

◇◇◇

　――――ベート・ローガにとってバージル・クラネルは気に食わない存在だった。
　初めて会ったのは四年前、ベートが第二級冒険者となって風格を持ち始めた頃にその男はロキ・ファミリア（ロキ・ファミリア）への入団を希望してきた。
　所属不明、無名の新人（ルーキー）。そういった輩は数多く、迷宮都市最大派閥に入りたいという者は多いので基本何か特別なモノが無ければ門前払いされるのが当たり前だった。
　だが、その時は何かがロキの心を動かしたのか、その男に対しある条件を出した。
『ほなそこにおるベートに一発でも当てれたら考えてもええで？』
　それは明らかな無理難題だった。
　当時のベートはＬｖ．３で、ただでさえＬｖ．３とＬｖ．１との間には画然とした差があるという言うのに、恩恵無しで戦うなど自殺行為に等しい。
　面倒事に巻き込まれたと当時のベートは愉快そうに笑うロキに舌打ちしながら初めてその入団希望者を直視した。
　初めに思った印象は、力に飢えた餓狼だった。
　普通冒険者を目指す者は瞳に強い希望や夢を宿しているモノだ。物語に出てくる英雄のように、神の恩恵を受けられれば自分もその一人になれると勘違いした愚か者の眼。だがその男の眼は違った。
　鋭く睨み付けてくる眼光は獣そのもの。この男は初めから英雄（そんなもの）な

ど憧れも目指してもいない。ただこの男は力を求め、そのために『神の恩恵（ファルナ）』を受けに来ただけだ。強くなるためには強いファミリアに入団した方が良いぐらいにしか思っていないだろう。

対峙して構えてはいるが、その瞳は正確にはベートと捉えてはいない。その眼はどこまでも自分を強くする事にしか関心がない飢えた獣の眼光だ。

――気に入らねえ。

それがベートの感想であり、故に一刻も早く終わらせるべく初撃で決めんと蹴撃を男の胸板を蹴り抜いた。

殺すつもりはなかった。だがＬｖ．１なら骨に罅が奔るほど、恩恵無しならば数本骨が折れる威力だった。良くて気絶、悪ければ激痛に気を失う事も出来ず悶え苦しむであろう攻撃を放ってベートは終わりを確信しその場を後にせんと振り返った。

その返答が、背後から迫る拳だった。

『――』

背後から迫る風を感じベートが咄嗟に躱すと、そこには口端から垂れる血を拭いながらなお顕然とこちらを睨む男の姿があった。

決して手加減をしたのではない。確かに肋骨を数本折った感触がそれを告げている。だというのに、男は未だやる気だった。先の動きから両者には隔絶とした差があると理解したのにも関わらず。

その態度が、雑魚の分際で――ベートの堪に深く触った。

そこから先はリンチと呼べるほど悲惨な戦いとは到底呼べない代物だった。

より強く、より深くベートの蹴撃が男に突き刺さる。崩れなければ更なる強撃を、倒れなければ更なる攻撃を。最後の方では周りの制止すら聞こえず本気の蹴撃をぶつけていた。

だが、それでもその男は倒れなかった。腕が折れたならば鞭のように振るいリーチを伸ばし、脚が折れようものなら筋肉でそれを強引に突き動かし反撃する。どれほど攻撃を受けようと呻き声一つ零さず鋭い眼光は未だ顕然であった。

その姿が、雑魚のくせにどこまでの抗うその姿に――

『……あ、当たった……』

見ていた観客の誰かが呟いたように、既に意識を失いそれでも立ち、触れた程度の威力しかない弱々しい拳がベートの胸板に置かれていた。

避けようと思えば避けれたはずの拳をベートは避けれなかった。いや、そんなものは所詮言い訳でしかない。

ベート・ローガ自身がその男――バージル・クラネルに心の何処かで敗北を認めてしまっていたからだ。

それがベートとバージルの最初の邂逅。以来ベートはバージルに突っ掛かるようになった。だというのにバージルはベートに見向きもしない。どこまでもひたすら真っ直ぐに、ただ己が強くなるために何もかも置き去りにして突き進む。

その歩みは早く、雑魚だと見下していた男は気付けば隣に立つようになりいつの間にかその背中を追い掛ける立場（Lv.6）となっていた。

それは今も変わらず――

「チィ――――！」

苛立ちを隠さずベートは舌打ちをしながら疾走する。その舌打ちは誰かに向けられたモノではなく、自分自身に向けられたモノだった。

ミノタウロスを追いかけて上部階層へと昇っていく。既にほとんどの団員達は各々散らばった各層のミノタウロスを討伐せんと別れており、現在ここにはベートとアイズ、そしてバージルしかいない。

だからこそ、ベートを苛立たせている原因はただ一つ。自分の目前にいる男だった。

「ハァッ！」

まるで流星の如き軌道を描きながらバージルの飛び膝蹴りが前方に逃げていたミノタウロスの背中に突き刺さりそのまま貫き速度を落とさず更に前へと疾走する。その速度に、狼人（ウェアウルフ）である己が追いつけないことに奥歯を噛み締める。

（遠い……っっ！）

距離の話ではなく、その実力が。

最初バージルは刀を振るって殲滅していたが、何か問題でも起こったのか顰めっ面になると刀を仕舞い、以降蹴撃のみでミノタウロスを撃破している。つまり戦闘スタイルはベートと同じである。

だというのに、追い付けない。ステイタスが違うからと言い訳すればそれまでだが、現在バージルは精神疲労（マインドダウン）の状態だとリヴェリアから聞いている。

精神疲労（マインドダウン）――

それは即ち精神力の限界を表している。ベートは魔法が使えないのでその状態を経験した事がないが、それは極度の眠気と倦怠感、疲労感に襲われ酷い時には感覚麻痺に近い状態だと聞く。冒険者で例えるならば限りなく集中力の切れた限界状態で動けと言っているようなものだ。

普通ならば無理だ。だというのに、この男は一切そんな苦痛を顔に出さず前へ前へとひたすら突き進んでいる。足捌きに重心移動のタイミング、緩急の付け方など幾ら疲労しているとはいえ目前の男と比べればほぼ完全の状態であるのにも関わらず、自分以上の技術。

――足りない。

何もかも足りなさ過ぎる。実力も技術も、そして何より――覚悟が。ベート・ローガがバージル・クラネルより劣っている。

「クソがァッ！」

激情のままに迫っていたミノタウロスの内の一体を蹴り殺して前進する。その間にも既にバージルは二体目を葬っている。その背中に、一瞬、ほんの僅かに――憧憬の念を抱いた自分を心底憎悪する。

認めない。認めてなるものか。一度でも認めてしまったら――俺は、二度とアイツに追い付けなくなっちまう。

憧憬は理解から最もかけ離れた感情だ。だからこそ認めない。飢えた餓狼の如く、今度は己が噛み付く番だ。

湧き上がってくる感情を力に変えて、ベートは後ろを振り向かずただ前へ突き進む背中を追い掛ける。

その感情は男ならば誰しもが持つ物。しかし女には到底理解できない衝動。

（コイツだけには……負けたくねえっ!!）
それは男の意地という、信念だった。

◇◇◇

そして、バージルはその光景を見た。
最後のミノタウロスがアイズの剣によって断ち切られ、肝危機一髪間に合った冒険者の身体に鮮血が降り注ぐ。白髪だった髪は血によって赤く染まり、もはや元の色が判別できまい。
「……大丈夫ですか？」
その少年に対し、アイズはスッと手を差し伸べた。少年はその手に目もくれずただ時が止まったようにアイズの顔を見つめていた。
その光景を目の当たりにして――理解した。
（ああ、そうなのか――）
これが始まりなのだ。彼の英雄譚の起源。この出会いを境に彼の物語の幕が上がる。その始まりをこうして見ているのだと。
「だぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!?」
少年――ベル・クラネルは兄であるバージルの姿に気づくこともなく全速力で雄叫びを上げながら逃亡した。
その後ろ姿。今はまだ頼りない新米冒険者だが、いずれ多くの試練を乗り越えて成長していくのを知っている。だからこそ彼は誰にも聞こえぬよう心で祝福する。
（頑張れよ、ベル）
その口端は、僅かにつり上がっていた。

……ちなみに。
（バージルにも、笑われた……！）
その光景を見ていた腹抱えて呼吸困難になるほど爆笑している狼人の隣で僅かに笑う青年の表情に勘違いしていた金髪の剣姫がいたとか。

ステイタス

アイズ・ヴァレンシュタイン
Ｌｖ．５
力：Ｄ５４９→５５５
耐久：Ｄ５４０→５４７
器用：Ａ８２３→８２５
敏捷：Ａ８２１→８２２
魔力：Ａ８９９
狩人：Ｇ
耐異常：Ｇ
剣士：Ｉ

（全然、上がってない……）

『遠征』を終え彼らの拠点である黄昏の館に帰ってきたロキ・ファミリア達は長旅の疲れを癒す中、ただ一人アイズだけは直ぐに【ステイタス】の更新を行う為にロキ・ファミリアの主神であるロキの部屋に訪れていた。

【ステイタス】の更新が終了し羊皮紙に書き写された自分のアビリティの向上率を見て、アイズは眉を潜めながら独りごちる。

もうＬｖ．５になってから三年が経過している。だというのにここ最近明らかにステイタスの上昇が微々たるものとなっている。それはつまり、アイズの現段階に置ける限界値だということを示していた。

ここが限界――――

その事実が彼女の身体を震わせ、羊皮紙が僅かに皺が寄る。

今のままでは駄目だ。ならば次の段階に昇るしかない。

――Ｌｖ．アップ。器の昇華。より強くなるにはもはやそれしかない。

普段の人形のような表情は鳴りを潜め強き意志の込められた瞳がゆらりと揺れる。

「……アイズ」
その瞳の危うさに気づいたのか、ロキがアイズに話しかけようとして――しかしそれは扉をノックする音によって遮られた。
突然の来訪者に自然と視線が扉に向かう。丁寧にノックが三回鳴ると、「邪魔をするぞ」と男の声と共に扉が開き来訪者の姿が顕となる。
普段逆立った白髪の前髪は風呂上がりのせいか僅かに湿って前に垂れ下がっており、室内に居るためか蒼い外套は着ておらず脱ぎやすいシンプルな黒いシャツを着込んでいる。その新鮮な姿にロキはともかくアイズまでも目を見開いてその人物を見つめていた。
来訪者はバージル・クラネルだった。
「なんやバージル、自分もかいな。はっ！　さてはアイズたんの脱ぎ脱ぎシーンにどさくさに紛れて覗くつもりやったんやろ？　残念やったなぁ！　アイズたんの裸体を見る権利があるのはうちだけや！」
「そんな事はどうでもいい」
ロキの戯れ言を一切合切切り捨ててバージルは恐らく暇潰しの為に持ってきた書物を近くの机に置くとシャツのボタンを外していく。
「何のようや、っていう質問は聞くだけ野暮やな」
「ここに来る理由など一つしかないだろう」
バージルがロキに用事がある理由など、ステイタスの更新以外に在り得ない。
バージルはシャツを脱ぐと背中をロキに向ける。半裸となった上半身の無駄のない鍛え上げられた筋骨隆々の肉体はある種の芸術品で、近くで直視してしまったアイズはしばらく見惚れてしまっていた。
「フムフム、こうして見るとええ身体しとんのーバージルは。フィンは見た目ショタのアラフォーやしベートはモフモフやしガレスはおっさんやし。なあバージル、ちょっとそこでなんかポージングしてみてや」
「無駄口を叩く暇があるなら手を動かせ」

「相変わらずバージルはつれへんなー」
バージルの【ステイタス】を更新していく中、アイズは邪魔にならないよう少し離れた椅子に腰掛ける。ふと机を見ると、そこにはバージルが持ってきていた書物が置かれており、少々気になってその本を手に取った。
それは分厚く年月を感じさせる荘厳な雰囲気を持っており、何度も読まれたのが解るほど古びているが丁寧に保存されている。その本の題名は――
「……『迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）』」
それは英雄譚。一人の英雄とそれに寄り添う精霊との物語を描いたお伽話。
確かこれはバージルの数少ない私物であり、普段ダンジョンに籠りっぱなしのバージルが待機を命じられている時にいつも読んでいるお気に入りの本のはずだ。
アイズは少し頁を開いていると、ふとある単語が目に入り頁を捲る指が止まる。それは英雄に寄り添う精霊の名前であり、アイズにとってその名前は――
「おぉ？　アイズたんの持っとるその本……『迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）』かいな。バージルはほんまその本好きやな、暇さえあればそればっか読んどるし」
「……俺が何を読もうが貴様には関係あるまい」
「おふぅ、バージル言葉のドッジボールじゃなくてキャッチボールしようや。きっとその本読みながらその仏頂面の下では『ハーレムは至高！』とか思っとるんやろう？　んんぅ？　素直に言ってみい、あっ、でもアイズたんはうちのもんやからな！」
「それ以上戯れ言を続けたいのなら死んでからにしろ」
バージルが殺気立つ中、アイズは未だぼんやりとその本を眺めている。その表紙をしばらく眺めていると、ふと言葉が漏れた。
「……バージルはこの本の中で誰が一番誰が好き？」
その質問に意味など無かった。発言したのが自分だと気づいたのが発声した後のほど無意識の発言であり、そんなくだらない話をバー

ジルが応えるとも思っていなかった。
だがその思惑を裏切るようにバージルは一瞬眉間に皺を寄せた後、静かに告げた。
「――『アリア』だ」
「――」
その答えにアイズは息を呑む。
英雄でも、ハイエルフでも、ドワーフでも、獣人でも、小人族でも、アマゾネスでもなく。
精霊『アリア』が良いのだと、バージルは言った。
「へぇー、バージルはアリアが好きなんか。どんなところがええん？」
「理由などない。ただその中で誰が良いかと聞かれれば彼女だっただけの話だ」
「しっかし、そうかぁー、アリアかー、ふぅーん、バージルはアリアが好きなんかー」
「……何が言いたい？」
人を挑発するような態度にバージルの視線が鋭くなる。だが、そんな態度のバージルを普段の様子とはかけ離れたように優しく見守る母のように、ロキはふとバージルに語りかけた。
「――なら、いつかバージルが英雄になったら、『アリア』が寄り添ってくれるかもしれへんな」
そう告げるロキの瞳は何故か一瞬自分を見ている気がして、アイズは無意識に本を胸に抱きかかえた。しかし、そんなロキの言葉を一蹴するようにバージルは否定の意を告げる。
「くだらん。英雄（そんなもの）に興味はない」
「――」
その否定の言葉に――英雄など興味がないという言葉に――何故かアイズは、無意識の内に胸を抑えていた。
その言葉が、何か大切なものが傷ついた気がして。
「それよりも、【ステイタス】の更新はまだ終らないのか？」

「ん、それならもう終ったでー。ほい、これがバージルの【ステイタス】や」

バージルが自身の【ステイタス】が書き写された羊皮紙を受け取るとそれを眺める。

……本来他人の【ステイタス】を盗み見るのは御法度だとアイズも知っているが、どうしてもバージルの【ステイタス】が気になってしまいここに残っていた。目標とする人物がどれほどのものなのか。喩えそれが絶望的な差だとしても、アイズは知りたかった。

羊皮紙に書かれたバージルの【ステイタス】。それを横から盗み見て、アイズは絶句した。

バージル・クラネル
Ｌｖ．６
力：Ｃ６１９→Ｃ６３６
耐久：Ｃ６４８→Ｃ６７３
器用：Ｂ７６１→Ａ８０６
敏捷：Ａ８７６→Ｓ９０８
魔力：Ｓ９０５→Ｓ９３７
耐異常：Ｇ
精癒：Ｇ
治力：Ｈ
悪運：Ｉ
《魔法》
【悪魔の引鉄（デビル・トリガー）】
・魂の望む姿に変身する。
・変身を持続し続ける限り魔力消費。
《スキル》
【憧憬一途（リアリス・フレーゼ）】
・早熟する。
・懸想が続くかぎり効果持続。
・懸想の丈により効果向上。

【魔力放出（ダークスレイヤー）】
・魔力を自在に操作可能。
・瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。

（全アビリティ熟練度、上昇値トータル１５０オーバー……!?）
それは在り得ない上昇率だった。
【ステイタス】の上昇率は評価Ｓに近づくにつれて上昇率は低下するのが基本だ。それもバージルのような第一級冒険者ならば本来その上昇率などアイズと同じように微々たるものとなるはずだ。
だというのに、この上昇率。つまりそれは、バージルの限界はまだここではないという事。
――もうここが上限（げんかい）の、アイズと違って。
「……ッ！」
解っていたはずだ。理解していたはずだ。それでも現実を目の当たりにしてアイズはスカートの裾に皺が出来るほど握り締める。感じる無力感に視界が暗くなる。
遠い。直ぐ側にいるはずなのに、手を伸ばせば届く距離にいるはずなのに、何故か届くとは思えない。ひたすら突き進んで前へ疾走ってきたのに、それでもその手は憧憬を掴むこと無く空を切る。
アイズ・ヴァレンシュタインでは、バージル・クラネルには未来永劫届かないのではないかと心の何処かで思ってしまう。
それが悔しくて、不甲斐無くて、情けなくて――
「……なあバージル。自分、いったい誰に憧れとるんや？」
葛藤するアイズなど眼中にもなく用済みとなり部屋を立ち去ろうとしてシャツを羽織ったバージルの背中にロキはいつにもまして真剣な面持ちで問いかけた。
普段笑って細められている瞳が僅かに開きそこから見える眼光は嘘など許さない。その気迫を背中で感じ取ったのか、僅かに扉を開いていたバージルは立ち止まり静かに聞き返す。
「それを貴様に言う価値があるのか」
「答えいバージル。それとも答えられん疚しい事なんか？」

いつにもまして真剣な様子のロキにアイズは首を傾げるが、その疑問は直ぐに解った。
バージルはオラリオの中でも数名しかいない数少ないＬｖ．６の一人だ。だからこそ彼に憧れを抱く者は多いいが、その逆は在り得ないはず。
まして彼は【ロキ・ファミリア】最強とも呼べる冒険者。そんな彼が憧憬する存在など数が限られているが、普段の彼の態度からそのような人物がいるとは思えない。だが、【憧憬一途（リアリス・フレーゼ）】がそれが真実だと告げている。
ならば、それはいったい――
「……今の俺では程遠い。あの人の足元にも及ばん」
「ふーん、バージルがそこまで言うんなら同Ｌｖ．の奴らじゃなさそうやし……となるとオッタルかいな？」
「たわけ。奴などと一緒にするな」
あの唯我独尊のバージルが『あの人』と呼ぶほどの存在。そしてオラリオ最強の冒険者であるオッタルではない。だとすればアイズには皆目検討がつかなかった。
「――――」
だが、嫌な考えが頭を過ぎった。
それはつまり、現実に存在する人物ではないのではないかという考え。お伽話や英雄譚に出てくるような読み手を楽しませるために無理難題な試練を乗り越える空想上の存在に憧憬しているのではないのか。
そして、だからこそ思ってしまう。もしかしたらバージルは――それそのものに成ろうとしているのではないのかと。
憧憬は大切だ。目標を持ちそれに目指すことが悪いことだとは言わない。アイズ自身そうであり、それを目指して飛躍するのは冒険者となった者ならば誰もが一度は通る道だろう。
だが、なんとなくバージルの憧憬は違うとアイズは直感的に思ってしまった。
その憧憬を目指して努力するのではなく、その憧憬そのものに成ろ

うとしているのではないか。バージル・クラネルという存在を削ぎ落とし、『誰か』に成ろうとしているのではないか。
そして、もしそう成り果ててしまったら――――二度と、この手が届かない場所に消えてしまうんじゃないかと。
「……バージルは、バージルだよ？」
その不安をかき消すようにアイズは気付けば口にしていた。他の誰でもない、貴方は貴方なのだと。言葉数の少ないアイズが必死に振り絞って込めた言葉を、バージルはやはり一度も振り返ることなく告げる。
「無論、言われるまでもない。――――俺が、バージルだ」
まるで自分に言い聞かせるような声。どこまでも咬み合わない歯車のように虚しく木霊する。
話は終わりだ、そう告げるように今度こそバージルは何も言わず部屋を後にした。扉の閉まる音。閉じられた扉がまるでアイズとバージルの境界線のように、彼らを遮るのであった。

◇◇◇

部屋に戻り明かりも付けずそのままベッドに寝転がる。あっ、そういえば『迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）』をロキの部屋に置きっぱにしてしまったが、まあ後で取りにいけばいいだろう。というか今更忘れ物を取りに戻ったら恥ずかしくて死ぬ。あんな格好付けたのに「あっ、忘れ物取りに来ましたー」なんてバージルのキャラ崩壊もいいところだし。
それはそうと、ポケットから【ステイタス】の書かれた羊皮紙を取り出して再度見る。上昇したアビリティに思わず頬が緩みかけるが、自制の念を持って何とか抑える。
そうだ、この程度で満足していては本家から『有給ラッシュ！』をぶちかまされてしまうだろう。とてもじゃないが遠征の時の俺はスタイリッシュとは呼べなかった。あの程度バージル鬼いちゃんならきっとノーダメ且つスタイリッシュSSSに決めていたはずだ。この程度で満足していてはバージルロールプレイヤーの風上にも置け

ない！

しかし、ロキに誰に憧れてるか聞かれた時は非常に焦ったなー。ぶっちゃけ「スタイリッシュバージル鬼いちゃんです！」なんて真正直に答えたら「はぁ？」みたいな呆れ反応されるだろうし。そんな反応されたら今までコツコツ積み上げてきたバージルロールプレイのイメージが台無しになってしまう……！

しかし嘘を吐こうにも神様に嘘は通用しないから何とかお茶を濁したが……あれで大丈夫だよね？　後で皆の前で聞かれたりしないよね？　集団虐めとかされたら俺は本格的に引き篭もるぞ、ダンジョンにだけど。

まあ俺のバージルロールプレイ道もまだまだということが解っただけでも良しとしよう。【ステイタス】の上昇率から見てまだまだ本家に近づける余地はありそうだし。とりあえず俺がすべきことは、「Ｉ（もっ）ｎｅｅｄ（と）ｍｏｒｅ（カ）ｐｏｗｅｒ（を）……！」

――まずは発声練習だ！　目指せ、ＤＭＤのスタイリッシュバージルロールプレイを！

専属契約者

北東メインストリートの先にある都市第二区画、工業区に隣接する道をバージルは蒼い外套を翻しながら歩いていた。筋骨隆々のヒューマンやドワーフ達が雄々しい怒声や金属音を立て鳴らす工業区にバージルのような細身の男性が歩いている事に一部の者達が奇妙な視線を向けるが、その蒼い外套を見て誰なのか正体を悟りすぐに仕事に戻る。

周囲から向けられる視線に意にも介さずバージルは第二区画の中心に向かうと、とある平屋造りの建物が見えた。彼は声を掛ける事もなく自然とその建物の内部へと入っていった。

バージルが声を掛け無かったのは、そもそも意味がないと理解していたから。建物の内部から響き渡る金属音のぶつかり合う音が、彼女が仕事中だと明確に告げている。

建物の内部に入れば、そこは工房だった。鍛冶場特有の強い鉄の香りが充満しており、昼間だというのに薄暗く唯一の明かりは部屋の奥で灯っている炉の赤い炎のみ。

その炉の直ぐ側。大型工具に囲まれたその場所にバージルの目的の人物がいた。

「……ッ！」

バージルが後ろに立っている事にすら気づかず彼女は真摯に鎚を振るっていた。まるで魂を吹き込むように鉄床の上にある精製金属を叩きつけ、一振一振に思いの全てを込めている。

彼女がこうなっている以上、何をしても無駄だという事を過去の経験から知っているためバージルは待ち場所の定位置と化している壁にもたれ掛かると、鎚を振るう彼女の顔を静かに見つめる。

カンッ、カンッと時間の流れが曖昧になるほど永遠と金属の打撃音が鳴り響く。その中で鎚を振るう彼女はいったいに何を考えているのか、不意に微笑み、また凛々しくなり、或いは笑ったりと表情が騒がしい。普段の面持ちからは予想出来ない表情の多彩な変化にバージルは新鮮さを覚え変化する横顔を眺めていた。

どれほどの時間が過ぎたのだろうか。カァンと最後に感高く鎚を振り下ろすと、一息も付かずそのまま鉄床の上に出来た長剣を鋏で掴むと、水で一気に冷やし研ぎ磨かれる。大事に取ってあったのか布で包まれていた柄と鍔を組み合わせたその長剣を持ち上げるとあらゆる角度から見て満足気に頷いた。
「……よし、この出来ならばあやつも――――」
「椿」
「ヒャウンッ!?」
　気の緩んだ時に突然話しかけられ椿と呼ばれた女性は奇妙な悲鳴を上げながら身体が跳ね上がらせて思わず持っていた長剣を落としそうになりワタワタと慌てる。何とか地面に落下する前に掴んでほっと息を吐くと、恨めしそうに突然話しかけてきた来訪者を見る。それがバージルだと解ると屈託なく笑顔を浮かべると歩み近づいていった。
「おお、バージルか！　なんだ来たのであればちゃんと挨拶をせんか。思わず剣を落としてしまうところだったではないか」
「話しかけたところで貴様が気づくと思えんが？」
「ふむ、まあそうだろうな。それよりも、工房にこもりっきりで人肌の温もりが恋しいのだ、抱き締めさせてくれー」
　彼女の中ではもはや決定事項となっているのか両手を広げ近づいてくる椿に対し、バージルはそれを無視するように無言で持っていた刀を椿に差し出す。前に突き出された刀を前に眉を潜めながら受け取ると鞘から抜いて刀身を眺めると、鍔の付近で視線が固定され端正な顔立ちが僅かに歪む。
「遠征の最中に刀身の歪みを僅かに感じた。念には念を入れそれ以上抜かなかったが、どうなっている？」
「賢明な判断だな。刀身の芯が歪んでいる。この状態でお主の抜刀を何度も受ければそれこそ刀身が耐え切れず壊れていただろう。全くお主といいロキ・ファミリアの連中は鍛冶師泣かせだの」
「……力任せに振るう奴等と一緒にするな」
「解っておる。この刀身の歪み方は力任せに剣を振るって出来るもの

ではない。おそらく――――お主の抜刀に刀自体が耐え切れず歪んだのだろう。全く、『不壊属性(デュランダル)』を歪ませるなど相も変わらず規格外な奴だの」

呵々と愉快そうに笑う椿に対し、やはりバージルは何の反応も示さず端的に、そして何より重要な事実を尋ねる。

「直せるのか？」

バージルが聞きたいのはそれだけだ。その問いに対し、椿はまるで獣のような獰猛な笑みを浮かべながら自信満々に告げた。

「――――当然だ。手前を誰だと思っている。この『閻魔刀(やまと)』を打ち、お主の専属契約者だぞ？　五日あればこやつをより強く鋭く新生させてみせよう」

そう笑う彼女の名前は椿・コルブランド。

数多の上級鍛冶師(ハイ!スミス)が所属する【ヘファイストス・ファミリア】団長であり、名実ともにオラリオ最高の鍛冶師(スミス)である。

「そうか。ならば五日後取りに来る。代金はその時に払おう」

「まあ待て。お主も五日間無手で過ごす訳にもいくまい。お主の技量ならば並大抵の得物では使い潰すだろうしな」

話は終わりだとバージルは背を向けるが、それを遮るように椿が制止の言葉を掛ける。訝しげに振り返るバージルに椿は丁寧に置かれていた籠手を渡した。

「ほれ、お主が以前狩ったベオウルフの籠手の部分だ。それを付けたまま剣を振るえるように改良してある。あとそれと――――」

獣の腕のような鋭く爪が付いたベオウルフの籠手を渡し、更に取り出したのは先ほど打っていた長剣。白銀に輝く刀身は、素人であろうとこれが名剣であると一目で理解できる。その長剣を目にした時、バージルの眉がぴくりと震えた。

何故なら、その剣はあまりに見覚えがあったから――――

「先ほど打った剣だが、『閻魔刀(やまと)』にも劣らん特殊武装(スペリオルズ)であると自負しておる。この剣ならばお主に使い潰されることもなく全力で振るう事が出来るだろう」

「……この剣の、名は？」

「ふむ、そうだな。造ったばかりで考えていなかったが、名付けるとしたら――【フォースエッジ】でどうだ？」
「――――」
その時、椿は珍しいものを見た。普段から仏頂面を崩さないバージルが珍しく目を見開いて驚愕した表情を浮かべ破顔したのだから。
まるで、その名前を聞くとは思っていなかったと言わんばかりに。
「むっ、気に入らなかったか？　ならばヴェル吉が名付けた小太郎で――――」
「フォースエッジで構わん。ただ……その名前に因縁を感じただけだ」
そう言いながら籠手を両腕に身に付け感触を確かめ、背中に【フォースエッジ】と名付けられた長剣を背負いながら感慨深い呟く。
「……【閻魔刀（やまと）】に【ベオウルフ】、【フォースエッジ】に【剣（スパーダ）】か……つくづく奇妙な因縁だ」
その呟きは恐らくバージル自身にしか解らないのだろう。「これらも五日後に払おう。それまでに代金を【ロキ・ファミリア】に請求しておけ」とそう告げると今度こそ別れだというようにバージルは振り返らず出口へと向かっていく。
「むっ、なんだ。試し振りはしていかないのか？」
バージルに渡した長剣は椿にとって自信作だと自負しているが、それは振ってみなければ解らないだろう。柄の違和感、柄と鍔の固定の不具合など、実際に振らなければそういった細かな部分は細微な箇所までは解らない。故に試し振りをすると思っていたがそれをしないバージルに懸念していた。
それに対し、バージルは振り返りもせずさも当然のようにその答えを口にした。
「貴様の打った剣だ。ならば問題などあるはずがなかろう」
「――――」
それは、絶対の信頼。
【ヘファイストス・ファミリア】団長としてではなく、バージル・クラネルの専属契約者としての信頼。今まで何度も剣を打ってくれた

関係だからこそ、バージルは絶対の信頼を寄せる事が出来た。
　扉が閉まり、足音が去っていく。残るのは炉の炎が燃え滾る音のみ。それを静かに聞きながら、僅かに赤くなった頬を吊り上げて彼女は笑った。
「全く、お主という奴は鍛冶師（手前達）が言って欲しい言葉を簡単に言ってくれるの」
　その時感じた胸の熱さは、確かに鍛冶の時とはまた違った熱さを持っていた。

◇◇◇

「あら、その様子だと彼が来たようね」
「おお、主神様ではないか。……そんなに違うのか？」
「ええ、あなたがそんな表情浮かべるの彼が来た時ぐらいだもの。まるで恋する乙女みたいよ？」
「ふむ？」
　バージルが去った後。一本剣を打ち終えた事で一息吐いていると、椿が鍛冶に集中しすぎて飢え死にしていないか様子見に来た椿達【ヘファイストス・ファミリア】の主神であるヘファイストスが邂逅一番にそう告げてきた。
　そう言われて確認するように自分の頬を触ってみるが、やはりいつも通りにしか思えない。そうやって不思議そうに首を傾げる椿を微笑ましく見ていると、ふと疑問に思ったようにヘファイストスは口を開いた。
「しかし、あの【剣（スパーダ）】と専属契約を結ぶなんてやるじゃない。いったいどんな手を使ったの？」
「どんな手、とは？」
「確か彼、バージルと言ったかしら。噂だと堅物な性格だって聞いてるし他の鍛冶師が彼と専属契約を結ぼうとしたけど全部門前払いされたって話よ？　そんな噂の英雄と専属契約したなんてどんな手を使ったか普通気になるじゃない？」

「……英雄、か」

ねえどうしてどうして？　とまるで乙女のように笑みを浮かべながら迫る己の主神に苦笑いを零しながらふと感慨深く椿は声を漏らした。

僅か四年でオラリオにおいても両手で数えられるほどしかいないＬｖ．６に至った人物。もはやこのオラリオにおいて知らぬ者は誰もいないだろうとされるほどの存在。そんな彼の昔姿を思い出して少し笑ってしまった。

――椿・コルブランドにとって、バージル・クラネルは理想だった。

椿が初めてバージルの事を知ったのは噂だった。

僅か一ヶ月半でＬｖ．２にカテゴライズされるミノタウロスを単独撃破しＬｖ．２に至り、更に一ヶ月で階層主を単独撃破することでＬｖ．３に至った最速到達記録（レコード）を二個も達成した冒険者。白い髪に蒼い外套がトレードマークだと聞く【剣（スパーダ）】だという二つ名が与えられた人物に対し、当時の椿は正直に言ってあまり好ましく思っていなかった。

当時一年という最速だった【剣姫】の記録を軽く上回る記録。それははっきり言って異常だ。それ以上ともなれば彼女以上に必死にならなければならない。

あの、抜き身の剣のような刃が刃毀れ砕け散るまで戦い続ける少女より。

だからこそおそらくその人物に会っても自分は武器を作ってやりたいとは思わないだろうと椿は予想していた。それが覆されたのはダンジョンで彼と初めて出会った瞬間だった。

椿がいつものように新作の魔剣を試し切りにダンジョンの中層に潜っていると、一人の冒険者を見つけた。白い髪に蒼い外套、それが巷で噂となっている世界最速（レコードホルダー）だと気づいて果たして如何なるものかと彼の戦いを眺め――見惚れた。

冒険者だけでは解らない。鍛冶師だけでも解らない。冒険者と鍛冶師の両方の目を持っている椿だからこそ理解できた。

それは武器の担い手としての理想。最も鋭く、最も強く、最も速く、最も武器の性能を引き出す無駄のない動作。剣を打った自分が目指す剣士としての在り方を、自身よりＬｖ．の低い冒険者が体現していた。

それを見た瞬間、鍛冶師としての自分が強く疼いたのを椿は感じ取っていた。彼に剣を打ってやりたい。彼の振るう剣をもっと見てみたい。留めなく溢れ出してくる感情を理解しながら、しかし冒険者としての自分が冷静に冷めているのも理解していた。

――まるで死に急いでいる。軽装は罅割れ、碌に休憩も取っていないのか息が上がっている。そもそも中層にまで一人（ソロ）で来るなど愚の骨頂だろう。

だからこそ椿は悩んでいた。鍛冶師としての自分と冒険者としての自分。相反する二つの心が彼に話しかけるか躊躇わせる。

だが、悩んでいたのはそれまで。恐らく彼の技量が剣の耐久値を上回っていたのだろう、彼の振るう剣が彼自身に耐え切れず砕けたのを見た瞬間、気付けば椿は駆け出していた。

冒険者がモンスターに殺されるのはまだ仕方ない。――だが、冒険者が己の剣に殺されるなど、冒険者としても鍛冶師としても見過ごせるはずがなかった。

頭上から一気に飛び降りモンスター達を一瞬で蹴散らす。そして無手になったのにも関わらず戦い続けようとした少年に向かって椿は笑いながら告げた。

『手前（てまえ）が、お主の剣を打ってやろうか？』

それが、バージル・クラネルと椿・コルブランドの奇妙な関係の始まり。

必要ないと切り捨てダンジョンに一人で潜ろうとするバージルに新作の試し切りだと笑って魔剣を椿が渡し、付いてくるなとバージルが睨めば行き先が同じなだけだと椿は笑う。決してそれは信頼における専属契約などではなく、一方的な奇妙な二人組（タッグ）だった。だがその時が最も楽しかったと椿はいま思う。

そして、バージルが椿が来ることを諦め、名前を呼ぶようになるほ

ど親しくなった頃。ふいに酒場に行こうと椿が提案しそれに珍しくバージルが了承し二人で酒を飲んでいると、幾らか酒を飲んで口が軽くなった椿がふいに尋ねた事があった。

『バージル、お主はどうしてそこまで強さを求めておる？』

それは共にダンジョンに潜っていてもつくづく思っていた事だった。

僅か数ヶ月で連続してＬｖ．アップすれば普通ならば驕りや慢心する。自身を特別な存在だと自負し、それが死にたがり屋の理由だと思っていた。

だが実際は違った。この男はそれを当然の事だと思っている。前代未聞のＬｖ．アップをこの男は至極当然の事だと思っているように見える。

まるで――――誰かがそうしてきたのを知っているように。

だからこそ椿にはバージルがなぜそこまで強さを求めるか理解出来なかった。これが普段ならばここまで踏み込まず笑って誤魔化しただろう。だが酒の影響で自制心のタガが外れた椿は珍しく追求してしまった。

そしてこれが普段通りのバージルだったならば、無言でそのまま立ち去っていただろう。だが今の彼も酒を幾らか飲み干しており若干酔ってしまっていた。だからこそ彼も珍しくその答えを口にした。

『……憧れている人が、いるからだ』

それは無意識の内に出た言葉だったのだろう。据わった目のままバージルは零れ落ちるように言葉を続ける。

『巷で死にたがり屋と言われているのも知っている。だが、身体が、魂が、止まらない。目指している場所に少しでも近づけたと思うと、言うことが利かなくなる。どうしても追いつきたくて、何が何でもたどり着きたくて、だから、俺は――――』

その時見た彼の表情を、椿は一生忘れる事はないだろう。

いつもの険を帯びた顔とは違う、まるで歳相応な子供のような純粋な笑顔。それを浮かべながら彼は告げた。

『だから俺は、強くなりたいんだ――――』

それを聞いて、椿は理解した。
ああ、なんだ。この男は――――ただの〝大馬鹿者〟だったのかと。
巷で噂されているような英雄などではない。噂を気にしていないのは興味がないから。死に急いでいるように見えるのは憧れに目指してひたすらに向かっているから。ただ夢を追い掛ける何処にでもいる冒険者なのだと。
だからこそ、椿は見てみたいと思った。この少年の言う憧れを。この少年の夢の先を見てみたいと思った。
冒険者と鍛冶師。相反していた心はもはや一つ。
『――――バージル。手前と専属契約をしてくれんか？』
この男の物語を見てみたいと。
これこそが真の二人の関係の始まり。奇妙な二人組（タッグ）から専属契約となった、バージル・クラネルと椿・コルブランドの真の関係の始まりだった。
「あやつは英雄などではないさ」
過去の事を思い出しながら椿は渡された刀を眺める。椿が初めてバージルの為だけに打った魔剣。ヘファイストスからも最高傑作と言われた『閻魔刀（やまと）』は、まるで彼であるように刀身から鈍い蒼い輝きを放ちながら何かを訴えている。
まだだ、まだ自分は戦える。まだ自分は斬れる。こんなところで終わりたくない――――持つ主のように険を帯びたその魔剣に椿は微笑みながら心で呟く。
――――安心するがいい。お主はまだ終わりではない、もっと強く、もっと鋭く生まれ変わる。手前がそれを果たして見せる。
その思いが通じたのかは定かで無いが、刀身の輝きが収まっていく。それを眺めて微笑むと、彼女にとっての彼の印象を女神に告げた。
「あやつは――――〝男の子〟さ」
夢を目指して何処までも突き進む、そんな何処にでもいる冒険者でしかない。
そう告げる彼女の笑顔は、女神（ヘファイストス）が見惚れてしまうほど可憐な笑顔

だった。

邂逅

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなごくろうさん！　今日は宴や！　飲めぇ!!」

西のメインストリートの中で最も大きな酒場である『豊穣の女主人』、その店内で遠征の打ち上げに集まったロキ・ファミリア御一行が主神であるロキの音頭と同時に皆盛大に騒ぎ出した。

「団長、つぎます。どうぞ」

「ああ、ありがとうティオネ。ところで僕は尋常じゃないペースでお酒を飲まされているんだけど、酔い潰した僕をどうするつもりなんだい？」

「ふふ、他意なんてありませんよ団長。ささっ、もう一杯」

「本当にぶれねえなこの女……」

「うおーっ、ガレスー!?　うちと飲み比べで勝負やー！」

「ふんっ、いいじゃろう、返り討ちにしてやるわい！」

「ちなみに勝った方がリヴェリアのおっぱいを自由にできる権利付きやあああァッ！」

『な、なにいいいいいいいいいいいいッ!?』

「じっ、自分もやるっす！」「俺もやるぜ！」「私もっ！」「ヒック。あ、じゃあ僕も」「団長ォー！　そ、それなら私のを揉んで下さい！」「ティオネも参戦やとォ――――!?」「あ〝ァ？　私の身体は団長だけのものに決まってんだろぶっ殺すぞ!?」「ですよねー」「リ、リヴェリア様……ッ？」「言わせておけ」

いやー、皆さん元気ですねー。皆酒を飲んだせいでタガが外れているのか好き放題言って非常に混沌となっております。やはりそれぞれ仲の良いグループで固まっており、アイズとティオナとレフィーヤ達、ベートとラウル達、フィンとティオネとリヴェリア達、ロキとガレス達といった様に意気揚々と騒いでいる。

え、俺は誰と一緒に居るかだって？　それは勿論――――

「……」

独りですけど何か!?　皆肩を組み合ったり酒を注ぎ合ったりして

いる最中、俺の周辺だけ席が一つずつ空いてますけどそれが何か!?
あれ、俺ロキ・ファミリアの団員だよね？　実は仲間だと思っているの俺だけとかいう悲しいオチじゃないよね？　いやまあ確かにバージルが酒飲んでたら隣に座りたいとは思わないけど。だけどこの疎外感は流石にないんじゃない？
べ、別に悲しくなんかないけど。静かに酒飲めて満足だし？　バージルロールプレイとしては騒がしいバージルなんて想像出来ないから大助かりですけど？　独りでいるのは慣れてるしい？　……あれ、なんか目から液体が垂れてきた。涙じゃないよな、だって悪魔は泣かないもん……！
「そうだ、アイズ！　お前のあの話を聞かせてやれよ！」
内面で涙を流しつつ外面では一切様子が変わらないまま仏頂面で酒を飲んでいると、早いペースで酒を飲みまくったせいか完全に出来上がっていると一目で解るほど顔を赤くしたベートが唐突に口を開いた。
話を振られたアイズには解らなかったのか首を傾げる中、ベートは機嫌よさげに語る。
「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス！　最後の一匹、お前が5階層で始末した時の、トマト野郎の事だよ！」
あ、それベルの事だわ。
しかしベルの奴、村に居た時はナチュラル年上キラーだったのにも関わらず、まさかアイズを一目見ただけで一目惚れするとは……しかも確か逃げ出した理由が恥ずかしさのあまりだったっけ。いつからそんなヘタレになってしまったんだベルェ……。
というか助けられて惚れるって完全にヒーローとヒロインの関係逆転してないか？　ハッ！　まさかベルがヒロインだったのか!?
そういえば、この話ってベル聞いていたんだっけ。周りを見渡して見ると――――居た。カウンターの向こう側、店員達が奇妙な目で見る視線の先に白い髪がピクピク震えている。あのクセ毛は間違いなくベルだ。というか自分の話をされていると気づいたのか見えている髪の部分が物凄くピクピク反応している。本当に兎かお前。

「じゃあ質問を変えるぜ？　あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい？」
――なんて事思っているうちに何か凄い発言がベートの口から飛び出してきた。
えっ、これって要するにプロポーズですよね？　狼人風だけど、告白より先にプロポーズするとか酒の力って本当に恐ろしいな。
酔った勢いというのは残念だが、告白内容はベートらしくていいと思う。何というか、『俺の女になれ』的な。果たして結果は!?
「……私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです」
一切躊躇無く振られたァ――!!　しかもあの顔、ガチで嫌がっている時の顔だ。どんまいベート。恐らく明日になったら綺麗さっぱり忘れてロキとかに吹きこまれてショックを受けると思うけど、俺はきみを応援してるよ。あとで骨付き肉とか持っていってやるからな？
しかしツガイ……というかお嫁さんかー。俺にもいつか欲しいけど、正直バージルが家族団らんとしている姿なんか想像できないし。あっ、でも子供いるんだし大丈夫か？
俺、結婚して子供が出来たらネロって名付けるんだ……！
「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねえ」
「――ッ！」
「ベルさん!?」
何て考え事をしていると、誰かが席を立って駆け出す音と店員の悲鳴が。そちらに意識を向けると、白い髪の少年が店を飛び出していった。……というかベルうううううううぅぅぅッ!!

◇◇◇

「あぁン？　何事だ？」
「おっ？　食い逃げかぁ？　ミア母ちゃんのところでやらかすなんて怖いもん知らずやなぁ」
突然の事態に困惑しながらざわめく客達とは裏腹に、バージルだけ

は飲んでいた酒を机に置くと立ち上がり、店員に近づくとお金を手渡した。
「先ほど出て行った客の支払いだ。釣りはいらん」
「え、あ、あの……」
問答無益に金を手渡すと、それを見ていたロキ達が騒ぎ出す。
「何やバージル、何も自分が払わんくてもええやろ」
「そうそう！　何ならこの雰囲気をぶち壊しにしたベートに払わせればいいって！」
ロキ・ファミリアの席を見れば、諸悪の根源とされたのかベートが「ぐぉおおおおおおおおお!?」と口も縄で縛られまともな悲鳴すら上げられず全身を縛られ宙ぶらりんに吊り下げられている。その様は机に並べられている料理もあってか狼人の丸焼きにでもしそうな勢いだった。
もはや先ほどの食い逃げ犯の事は忘れ、他の客もそれに便乗し活気が先ほどのどんちゃん騒ぎにも増しそうな雰囲気の中、バージルは静かにその爆弾を告げた。
「そういう訳にもいくまい。身内の後始末を付けるのは当然だろう」
刹那――――空気が凍った。
バージルの発言に活気づく酒場が嘘の様に静寂に包まれる。アイズは勿論、縛り上げられているベートや縛り上げていたティオナやティオネ、冷静沈着なリヴェリアやフィン、そして普段細目で笑うロキすらも目を見開いて驚愕していた。
まるで時間が止まってしまったような静寂。それを恐る恐る神であるロキが破った。
「……身内って、あのファミリー？」
「それ以外に意味があるのか？」
何を馬鹿げた問いをとバージルが嘆息し、店の外へと視線を向ける。そこから飛び出していった白髪の少年の事を思い描いているように、彼は告げた。

「奴はベル・クラネル――――俺の弟だ」
その言葉が、静寂を突き破る爆弾の起爆スイッチだった。
『お、弟ぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――――ッツッ⁉』
「嘘、全っ然似てない⁉　バージルがロキ・ファミリアに来た時はもっと『世界全てを憎んでます』的な目だったよ⁉」
「というかバージルだったら迷うこと無く喧嘩売ってるわね」
「入団試験でＬｖ．３に恩恵無しで挑む様な人だしねぇ……」
「それってあの伝説の？」
「確か、リヴェリア様がいらっしゃらなければそのまま死んでいたかもしれない重傷を負ったと聞いていましたが……本当だったのですか？」
バージルの爆弾発言にその場にいた一同が一気に騒ぎ立つ。僅か四年でＬｖ．６に登り詰めたバージルに弟がいたなどという話は一切無く、そんな話が出れば騒ぎになるのは当然の結果だった。
皆が騒ぎ立つ中、居心地の悪そうに後ろ頭を掻きながらロキはバージルに話しかける。
「あぁー、もしかしてさっきベートが言っとった〝トマト野郎〟っていうのは……」
「ベルの事だろう、俺もその現場に立ち会わせていた」
「うわぁ～、そりゃあ最悪やな。自分の事を笑い話にされたらショックで逃げ出したくもなるやろ。何処のファミリアかは知らへんけど、後で謝っとかんとな。ミノタウロスの件は完全にうちらの失態やし。バージルも不愉快な気分にさせて悪かったな？」
身内を笑い者にされれば誰だって苛立つのは当然だろう。そう思い「今夜は狼人鍋じゃぁあー！」と完全に諸悪の根源と化したベートに更なる制裁を加えんとするロキに対し、バージルは顔色を変えず告げる。
「構わん。ベートが言った事は間違いではない」
ピタリと、再び騒音が止んだ。肯定されるとは思っていなかったのかベートすらも息を飲んでバージルを見る。誰もがバージルの放つ

独特の雰囲気に呑まれて押し黙る中、大声を出してもいないのにも関わらず良く響くバージルの言葉が大気に木霊する。
「力こそが全てを制する。弱き冒険者に存在価値などない。力がなければ、自分の身さえ守れはしない。そんな弱者を救うなど、ナンセンスだ。力なき者は滅びるのみ……それが真理だ」
その言葉に、誰も否定することが出来なかった。それがバージル以外の誰かが言ったならば否定する事が出来ただろう。その場にいた皆が知っていた。それを告げたこの男こそが誰よりも力を求め、力を手に入れてきたことを。
静まり返る酒場。それを見回すとバージルは蒼い外套を翻しながら店の外へと身体を向ける。
「……どうやら少し酔ったらしい。夜風を浴びてくる」
自分がこれ以上ここに残るのは賢明な判断ではないのと悟ったのか、バージルは足音を立てながら『豊穣の女主人』を後にする。
残ったのはまるでお通夜のような静寂。一人去って行ったバージルを追いかけようとアイズが席を立とうとするが、それはやんわりと肩に置かれたロキの手が制していた。
「ストップやアイズたん。ここはうちに任してくれへんか？」
「……」
主神にそう謂れ、アイズは葛藤するように眉を潜めた。このままロキに任せていいのか、仮に自分が行ったとして何を言えばいいのか、胸の中でわだかまる思いを抑えるように胸前に手を置くアイズに、ロキはまるで何もかも見通しているように肩を撫でて安心させる。
「まあアイズは少し落ち着いて冷静になってから来ればええで？……少し、厄介な奴の気配もするしなぁ」
後半の呟きは誰にも聞かれること無く虚空に消える。微笑むロキの目、その僅かに開かれた瞳は彼女にしか解らない何かを感じとっていた。

◇◇◇

薄暗い夜の大通りをバージルは一人歩いていた。深夜に近い遅い時間帯であるためか、人の姿はなく街灯の明かりだけが夜道を覚束ない光で照らしている。本拠（ホーム）である『黄昏の館』に向かっていた脚がふと止まると、その視線がオラリオ建造物の中で最も高いバベルに向けられる。

きっと今頃、彼は――

「――その気色悪い視線をやめろ、フレイヤ」

その思考を遮るように、バージルの殺気が一箇所に向けられる。誰もいないはずの路地裏、しかしバージルが殺気を向けた瞬間、誰もいなかったはずの路地裏の暗闇に二人の影が浮かんでいた。

「ふふっ、随分な挨拶ね、バージル」

「……」

オラリオ内最強のファミリアと呼ばれている【フレイヤ・ファミリア】のその主神であるフレイヤと、オラリオ最強の冒険者と謂れただ一人のＬｖ．７、【猛者（おうじゃ）】オッタルがそこに居た。

コツコツとフレイヤの足音が響きバージルに近づいていく。その眼は近づくにつれ熱を帯び、まるで火に誘われる夏の虫のように手が伸びる。

フレイヤは美の化身。その『魅了』は喩え神さえも魅了する。その彼女の手を拒む者など存在するまい。

「その眼をやめろ、三度は言わん」

――ただ一人、バージルを除けば。

近づくのを拒むように、いつの間に抜かれていた【フォースエッジ】がフレイヤの喉元に警告として置かれていた。その瞳はフレイヤを前にしても何ら変わりはなく魅了に掛かってなどいない。

ただ一人、フレイヤの魅了が効かない存在。言わばフレイヤにとって天敵とも呼べる存在を前にして彼女は、

「……ああ、やっぱり貴方はいいわ。とても綺麗な色」

フレイヤは笑っていた。頬を赤くし、まるで恋する乙女の様に。喉元に剣を突き付けられているのにも関わらず、そんなことは気にも止まらないと射抜く眼光を受け止める。

彼女の眼は魂の色を見抜く。その純粋な輝きにフレイヤは見とれていた。
「……」
「いいのよオッタル。私なら大丈夫だから」
喉元に突き付けられている剣に対し、彼女の守護者であるオッタルが己の剣に手を伸ばすがそれをフレイヤが制止する。彼女はまるで愛撫のように自身に向けられた剣に触れる。
「無色ではなく、透明な色。無垢な魂じゃなくて何者にも染まらない色。不変であり絶対の輝きを放つ魂。……あの子も、貴方と同じ色をしていたわね」
「ベルに手を出すつもりか」
「……だとしたら？」
「――――好きにしろ」
バージルの言葉が意外だったのか、フレイヤの目が僅かに見開いた。
「意外ね、てっきりやめさせると思ったのに」
「貴様ら風情の試練を乗り越えられぬようでは、奴もそれまでだったというだけの話だ」
「神私の試練では、不足かしら」
「当然だ。貴様らが望んでいるのは弱者が強者を打倒する英雄譚だ。だからこそ貴様らは必ず乗り越えられる試練しか与えん。それを手緩いと言わず何と言えばいい」
譬えば、何の恩恵も与えていない子に龍を討伐しろという神はいないだろう。それは絶対に不可能だと神自身理解しているからだ。だからこそ必要な環境、必要な武器、必要な感情、それら全てが揃えば確実に打倒できる試練を神は与える。
神は試練を乗り越えて欲しい。だからこそ絶対に乗り越えられぬ試練などは与えない。必ず正解が存在する試練。それを生温いと言って何がおかしい。
「……貴方にとってみれば、その通りなのかもしれないわね。神の試練ではなく、自らの試練を乗り越えてきた貴方なら」

フレイヤは知っている。この男が乗り越えてきた試練は、誰が仕組んだものでもない事を。この男は自ら絶望的な試練に挑み、それを何度も乗り越えてきた冒険者だ。
故に、だからこそ思ってしまう。その日に日に輝きが増していく魂を見るたびにその思いは増していく。
「ねえバージル。私のところに来ない？」
――貴方が欲しい。貴方の全てを手に入れたい。
フレイヤの言葉にバージルは眉を潜め、話は終わりだと言わんばかりに剣を背後に背負う。射抜く眼光はフレイヤに対し一切の熱を帯びていない事を明確に告げていた。
「前にも言ったはずだ。ロキ・ファミリア（奴等）には借りがある。その恩がある以上、俺は【ロキ・ファミリア】のバージル・クラネルだ。それになにより――」
続く言葉は、明確にフレイヤの胸を抉り抜いた。
「――貴様にはそそらん。それが全てだ」
お前になど何の興味もない――美の女神が聞けば憤怒する言葉を一切躊躇無く告げる。それに対し、フレイヤは身体を震わせていた。
だがそれは決して怒りから来るものではなかった。身体を震わせる衝動。
「ああ、やっぱり私は、貴方が欲しい」
それは、自分のものにならない未知の歓喜だった。
「――そこまでにしときや、フレイヤ。振られた女が何度アプローチ仕掛けてもしつこいだけやで」
「……ロキね」
今までの様子を見ていたのか、ロキは微笑を浮かべながらバージルの横に立っていた。
まるでここが自分の場所だと言うように。
「まあこいつは諦めるんやな。なんせこいつは【ロキ・ファミリア】のバージル・クラネルやからな。なぁーバージルー？」
「……何の話だ？」

「そんな恥ずかしがらんくてもええんやでー！　うちらに恩があるんやろ、うぅん？」
「――神殺しか、それもまた一興だろう」
「うおぉっ!?　ちょおま、今本気やったやろ!?」
　戯れ合う二人を見て、今日はもうここまでだろう。フレイヤはそう判断すると、オッタルに帰還の命を告げる。
「オッタル、今日はもう帰るわよ」
「ほらバージル、うちらも戻ろうや」
　二人の神は互いに反対方向へ歩き出す。しかしその二人の後に続く足音が響かない。バージルとオッタルは互いに向き合ったままその視線を交えていた。
「オッタル？」
「どうしたんバージル？」
　二人は動かない。オッタルは自身に向けられる殺気を感じていたため、バージルはオッタルに用があったのだから。
「何故貴様がここにいる、オッタル」
「フレイヤ様の護衛だ」
「ならば解りやすく言い換えてやろう。――いつまでその無様な姿を晒す気だ」
「――ッ！」
　バージルの問いにオッタルは応える事が出来なかった。それはもはや条件反射の領域。バージルは背中の長剣を抜くのと同時に前方へ強烈な突きを繰り出していた。それを紙一重で剣を抜いたオッタルが受け止める。
　音が遅れてくるほどの速度。金属がぶつかり火花が散り、衝撃は周囲の空気を吹き飛ばす。剣の腹でギチギチと揺れる剣を受け止めるオッタルに対し、先端を突き立てるバージルは冷淡に告げる。
「二年前、俺は貴様に剣を抜かす事すら出来ず敗北した。だが今は剣を抜いた。つまり――俺の剣は貴様の首に届くと思っていいのだな」
「――！」

その言葉の返答は斬撃。払われた剣によって両者の身体が僅かに後退し間合いを取る。
その直後。
「そこまでやバージル」
「貴方もよ、オッタル」
二人の主神であるロキとフレイヤによって制止が掛かる。元々これ以上争うつもりはなかったのか、二人は大人しく剣を仕舞う。
「貴様、いったいいつからダンジョンに潜っていない」
バージルの懸念は剣を交えた事で確信に変わり、その視線が更に鋭くなる。二年前に敗れたあの日から、バージルは一日たりともその日の出来事を忘れた事はない。だからこそ確信する。確かに二年前よりバージル自身のＬｖ．も上がったのも原因の一つだろう。だがそれ以上に、あの日のキレではない事をバージルは確信した。
「次相見える時は、嘗ての雪辱を果たさせて貰う。それまでにその錆を落としておけ。全盛期の貴様を倒さねば意味が無い。もし再び無様な姿を晒す様であれば――貴様を殺す」
「……来るつもりか、頂上に」
「違うな、Ｌｖ．７は通過点に過ぎん」
頂上だと思うオッタルと、通過点だと言い切るバージル。
二人の放つ覇気に空気が痺れるような雰囲気に包まれるが、それを無視するようにバージルは振り返りロキの横を通り過ぎる。
「ちょ、全くすまんかったなうちのバージルが。こらー！　何いきなり喧嘩売ってんねーん！」
慌ててその背後を追い掛けるロキの姿を、フレイヤとオッタルは黙ったまま見つめていた。ふと、オッタルの視線が自分の右腕に向けられる。
先ほど剣を受け止めた腕は、僅かに痺れて震えていた。

◇◇◇

月明かりが照らす大通りをバージルとロキは沈黙のまま歩いてい

た。普段口が軽いロキにしては珍しいが、その表情は眉を寄せながら難しい顔で前を歩くバージルの横顔を見ている。
正直に言おう。ロキにとってバージル・クラネルという存在は全くもって未知な存在だった。
ロキは自分の子である【ロキ・ファミリア】の皆を大事にしている。誰一人死んで欲しくないと思っているし、危ないことをしてほしくないと思っている。
だからこそ、ロキにとってバージルは彼女にとって初めて厄介な人物だった。
はっきり言ってバージルの成長速度は異常だ。神会(デナトウス)では『神の力(アルカナム)』を使ったのではないかと疑われた事もあり、何より彼はダンジョンを一人で攻略する傾向があった。
確かにその成長は快挙だろう。だが思ってしまう。その閃光のような生き様はまるでいつか――――閃光のように一瞬で消えてしまうのではないのかと。
どうすればいいのか天界きっての悪戯者(トリックスター)の自分でも解らない。
「……なあバージル。何で自分、そんなに強くなりたいんや？」
弱音めいたロキの呟きに対し、バージルは振り返りもせず、しかし普段の冷静な声とは違いそれが真実だと熱の籠もった声で告げた。
「俺の魂が叫んでいる。――――I need(もっと) more(力) power(を!).」
それがバージルの強さを求める理由。
その答えを聞いたロキは思わず立ち止まった。背後など気にせず前へ進むバージルの背中を眺め、思わず額に手をあて天を仰ぐ。
「……ほんと、どうすればええねん」
その呟きは、闇の中へと消えていった。

番外編：思春期な狼人と迷える剣姫

ベート・ローガは第一級冒険者である。
迷宮都市最大派閥（ロキ・ファミリア）の幹部として相応しい実力とそれ相応の修羅場を乗り越えてきており、その弱者を見下す傲慢な態度はその実力に相応しい威圧を持っている。
そんな彼だが、今日この瞬間、嘗て無いほど神経を研ぎ澄ませ集中させていた。
背筋に冷や汗が流れ僅かに顔が強張る。狼人の毛が逆立ち乾ききった喉に唾を呑む音が自身の鼓膜から聞こえてくるほど。普段より高鳴る鼓動は己が緊張しているのだと有無を言わさず伝えてくる。
それに対し、ベートは皮肉げに頬を吊り上げ笑った。ああ、確かにその通りだ。自分は今嘗て無いほど緊張している自覚がある。これと比べるならば階層主と戦う方がまだマシだ。
だが、それでも男には引けない時がある。困難だと解っていても挑まなければならないことがある。この試練を乗り越えた時、自分は更に強くなると確信出来る。
その試練とは――――
（――――アイズを、食事に誘うッ!!）
【ロキ・ファミリア】本拠、黄昏の館にある食堂。そこでベートは食器を片手に嘗て無いほどやる気に満ち溢れていた。
他の連中には内緒にしているが、ベート・ローガはアイズ・ヴァレンシュタインに好意を寄せている。（なお知らないのは当事者達だけで、ロキ・ファミリアの全員が知っているが）
普段ならばアイズは喧しいアマゾネス姉妹に囲まれて話し掛ける事が出来ないが、今日は二人共クエストでダンジョン中層に潜っており、レフィーヤもリヴェリアと魔導書の件で朝早く出て行ったのを確認している。
つまり、今日のアイズは全くのフリーという事実。このチャンスを逃す訳にはいかない。
だからこそベートは朝一に食堂に訪れ、如何にもついさっき来まし

たよとアピール出来る食堂窓付近の死角となる場所で冒険者としてのスキルを最大限に発揮し気配を消しながら身を潜めて待っていた。既にスープは冷めてしまっているがそんなことは気にも止めない。身だしなみを整えながら壁にもたれかかって目的の人物が来るのを今か今かと待ち望んでいた。

……もっとも、彼の気配を感じ取れる知り合いがいたならば、間違いなく呆れ顔をするだろうが。

そして数分後。彼にとって永遠とも言えるほど時が過ぎると、目的の人物の匂いが食堂にやって来るのが解った。ちなみにベートが好きな人の匂いを覚えている変態という訳ではなく狼人の特性として嗅覚が非常に鋭いから判別できたという事であしからず。

アイズは食堂に入ってくるのと同時にベートもついさっき来ましたよと言わんばかりに死角から出る。イメトレは何度も待っている間に済ませたので準備は万全。彼は余裕満々に不敵な笑みすら浮かべて声を掛けた。

「……よっよぉ」

全ッ然ダメだった。

朝一から今まで何をイメトレしていたのか問い質したいほど噛み噛みだった。

余裕の笑みだと本人が思っている表情は頬が引き攣っており、身体も不自然にギクシャクしている。正直な話見知らぬ人がこのような動作で話しかけてくれれば不審がるほどの奇妙さだったが、アイズはそれを見ても何の疑いもなく挨拶を返した。

「ベートさん……おはようございます」

（ッよっしゃあ！）

チョロかった。

挨拶を返されただけで内面では渾身のガッツポーズを取るほど喜んでいた。その間にアイズは食器を取りに行き、ベートが一緒に食事を取らないか誘おうと声をかけるが、返事がない。不審に思い周囲を見渡すが既にアイズの姿はなく、食堂全体を見渡して彼女の金髪を見つけ――直後、凍り付いた。

ベートにとってアイズは気になる人物だ。だが彼女と同じくらい気になる人物が存在する。もっともアイズに寄せる感情が好意ならばもう一人に向ける感情は敵愾心から来るものなのだが。

食堂の最端。食器を返すには往復しなければならないので混雑する時にしか埋まらないその席に一人の青年が座っていた。白い髪に蒼い外套。手元には何度も読まれた痕が見える『迷宮神聖譚（ダンジョン・オラトリア）』があり、それを片手に食後の紅茶を飲んでいる。

その場所に座り、その格好をしている人物など、ロキ・ファミリアにおいてたった一人しかいない。食器を持ってきたアイズがその人物の名前を呼んだ。

「おはよう、バージル」

「……」

【ロキ・ファミリア】幹部、バージル・クラネルに他ならない。

バージルはアイズが声を掛けてきた事に気づく素振りさえ見せず本のページを捲る。アイズもそれを解っていたのかそのまま無言でバージルの前の座席に座ると朝食を取り始めた。

その様子を、遠くから眺めながらベートは硬直していた。周りから不審な眼で見られていたがそんなことは考える余地すらなかった。

言っては何だが、ベートとアイズは長い付き合いだ。彼女が冒険者となり、成り立ての頃からの同期である。だというのに、未だ自分の呼び名は『ベートさん』と何処か距離がある。

対して、バージルがロキ・ファミリアに入ってきたのは四年前。片手で数えられるほどしか月日が経っていない。しかもバージルはソロでダンジョンに潜っているため付き合いがほとんどない。だというのに、彼の呼び名は『バージル』と呼び捨て。

何だ、この差は。そしてこの敗北感はなんだ。

「フワァ～、眠いっス。あれ？　ベートさん何でこんなところで固まってんスか？　あっ、もしかして自分のこと待ってくれたとかっスか？　なんちゃって！」

「……ラウル、朝飯前の運動にちょっくら付き合えや」

「へ？　いや自分腹ペコなんで飯食ってから――――っていただだだだ

だ!?　ちょ、肩潰れる！　冗談抜きでメシメシって言ってるっス!?
ちょ誰か助けぎゃあああああああああああああ!!」
　訳の解らないわだかまりを覚えそれを発散させるが如く後輩であるラウルの肩を掴むとずるずる引き釣りながら開けた中庭に向かう。背後から悲鳴らしき声が聴こえてきたが、湧き上がる苛立ちにベートは気にも止めなかった。
　その感情を、ベートは決して理解できず他人に指摘されても認めはしないだろう。――自分が、バージルに嫉妬しているなど。
（やっぱりあの野郎は……気に入らねえ!!）

◇◇◇

　ロキ・ファミリア本拠、黄昏の館。その出入り口である門の前で、三人の人影があった。門の前に佇み出入りを阻害するように立つのはロキ・ファミリアの主神であるロキ。彼女に阻まれるように立つ二人はロキ・ファミリア幹部であるバージル・クラネルとアイズ・ヴァレンシュタインである。
　ニコニコと笑みを浮かべながら、されど眼は全く笑っていないロキ。笑顔は時に最大級の威嚇とも言われているが、まさに現在ロキが浮かべているような笑顔を指すのだろう。あと抑えきれない憤怒を隠すためでもあるが。
「なあバージルー、アイズー。自分らいったい何処へ行くつもりや？」
　ロキの問いに対し、バージルとアイズは何一つ迷うこと無く即答する。
「ダンジョンだが」
「……ダンジョンだけど？」
「――自分ら遠征中に精神疲弊（マインドダウン）でぶっ倒れておいて何ぬかしとんねん!?」
　ロキの怒声が門の向こう側まで響き渡るが、彼女が激怒するのも無理はない。
　先日まで行われていた遠征の最中、三十七階層の『白宮殿（ホワイトパレス）』におい

てロキ・ファミリアはＬｖ．６の迷宮の孤王（モンスターレックス）、階層主『ウダイオス』と交戦しており、更に――――

「アイズは魔法の使い過ぎで倒れとるし、バージルに至ってはその後現れた特殊階層主（イレギュラー）の『ベオウルフ』を単独撃破なんて馬鹿げた事しとるし、今日は大事を取って休暇にしとけって昨日あれほど言っといたやろ！」

「戦いに支障を来すほどの疲労はしていない」

「バージルが行くなら私も行く」

「だーかーらー！　うちの話聞いとったか!?　アイズ、もしうちの言うことを聞かず無視してダンジョンに潜るっていうんなら……」

「……言うなら？」

　ロキの脅すような溜めにアイズは眉を寄せる。アイズ・ヴァレンシュタインの覚悟は鋼のように硬い。強くなるためならばダンジョンに潜らなければならない。それを邪魔するならば生半端な脅しではアイズには効かないだろう。

　だからこそ、喩え何を言われても鋼の意志を持ってそれを断ろうと決心し、

「特別出来立てジャガ丸くん小豆クリーム味スペシャル引換券を上げようって思っとったけどやっぱ止めとくわ」

「解りました、今日は休みます」

　スタッと、即答で見事な敬礼を取って休暇を受け入れた。

　やはり疲れている時は無理せず休んだ方が効率が上がるはずだ。鋼の意志？　何それ美味しいの？　と言わんばかりの切り替えの速さである。

「よぉし、じゃあ次はバージルやけど、もし無視してダンジョンに潜ろうもんなら……せやな、今度打ち上げの時に酔わせたアイズたんの隣に座らせるで？」

「……正気か、貴様」

「???」

　ロキのバージルに対する脅しに対して、バージルは珍しく冷や汗を流し、話題となっているアイズには聞こえなかったのか首を傾げてい

た。
「フッフッフッ……酒を飲んだアイズたんはある意味無敵やからなぁ……あっ、思い出したら腹痛くなってきよった……グフぅッ」
戦慄するバージルに対し、ロキも過去のトラウマを思い出したのかお腹を抑える。
彼らがここまで恐れているのは、以前本拠である『黄昏の館』で行われた打ち上げの際にアイズが誤って水と酒を間違えて飲んでしまったのが原因で起こった悲劇を思い出しているからだ。
アイズ・ヴァレンシュタインは普段酒を飲まない。そして何より、彼女は酒を飲んでも顔色一つ変えることはない。だが、アイズが酒を飲むと――ストッパーが外れ、暴走する癖があった。
ちなみにその時の被害者はロキ。普段通りにセクハラしようとアイズの肩に手を置いた瞬間、見事の腹パンが容赦無くロキの鳩尾を貫いていた。それだけならばまだ普段通りだったと言えよう。しかしアイズはその後更に馬乗りとなり容赦無くロキの顔面を左右から無言で殴り続けていた。流石に異常だと判断した他の団員がアイズを止めようとしたが、それに対しアイズは何と魔法で対抗。気が付けば打ち上げどころか死屍累々と食堂は跡形もなく粉砕され、しかもそれを引き起こした張本人は全く記憶にないとの発言。それ以来ロキ・ファミリアにおいてアイズに酒を飲ますのは暗黙の了解で禁止となっていた。
それを破るというロキの脅迫。それに対し流石のバージルでも頷くほか選択がなかった。
「……今日だけだ。明日からはダンジョンに往こうが異論はないな」
「おお、分かればええねん。という訳でアイズたん、今日はバージルの監視宜しく頼むなー。もしやってくれたら特別出来立てジャガ丸くん小豆クリーム味スペシャル引換券をアイズたんに上げるわ」
「――解った。任せて」
「……どういうつもりだ」
「ん？　どうせ休むんなら一緒でもええやろ。それにバージルの事だから休むって口では言っても鍛錬とかしそうやしなー。正直アイズ

たんクラスやないとバージル簡単に巻けるやろ？　まあ今日一日だけやから我慢せい」
「……勝手にしろ」
アイズを監視に付けるというロキの発言に対し、バージルは返答するのも億劫と感じたのか背を向け本拠へと歩み、アイズもその後に続く。恐らく装備を置いて私服に着替えてくるためだろう。
何とか説得に成功したことにロキは思わず安堵の吐息を零す。こういった役目は普段なら団長であるフィンの役割だが、彼は仕事でこの場にはいない。となるとロキ自身ぐらいしか彼らを止められる者は居らずだからこそ彼女はこうして門の所に佇んでいた。
正直な話、二人には休んで貰わなければ困るのだ。二人共何ともない態度だったが精神疲弊（マインドダウン）を引き起こしている。バージルに至ってはその状態で誰の手も借りず地上まで登ってきたのだ。
そんな極限状態だったのにも関わらず、なおかつまだ不完治の状態でダンジョンに潜られたら万が一があるかもしれない。ダンジョンに絶対は存在しないのだ。だからこそ無理難題を言ってでも二人を休ませる必要があった。
「全く、バージルがＬｖ．５になってからアイズたん昔みたいに無茶するようになったし……どないしよっかなぁ～」
若い二人の危なげな行動に深々と嘆息して、二人の後ろ姿を眺める。
「……ホント、そうやって一緒に歩いとったら兄妹みたいなんやけどなぁ……」
前を歩く兄（バージル）を、離れないように追い掛ける妹（アイズ）。
それを眺めるロキの眼は、間違いなく主神（おや）の眼をしていた。

◇◇◇

迷宮都市オラリオの中心道であるメインストリートは相変わらず活気に溢れており、その道をバージルとアイズは歩いていた。普段ならばそのままダンジョンに潜るのだが現在の彼らの服装は戦闘服で

はなく私服を着ており、美男美女の組み合わせの為か視線が集まるが二人共オラリオにおいて有名な冒険者なのでそういう類の視線には慣れている為、普段通り自然体に歩いていた。
「バージル、どこ行くの？」
「この先の広場だ。本拠（ホーム）では視線が煩わしいのでな」
「……そうだね」
バージルの言うことにアイズも同意する。ロキ・ファミリアの本拠である『黄昏の館』はアイズ達の帰る場所ではあるが、やはり数少ないＬｖ．５という立場のせいか何処にいても団員達の伺うような視線を感じて落ち着かないのだ。
バージルもそんな視線を浴びるのは不愉快なのか、本を持って広場に向かっていた。普段着ている蒼い外套は脱いでおりズボンに黒シャツとラフな格好をしており、蒼い外套を着ていないだけでも随分と印象が変わっていた。
普段ダンジョンに潜る以外していないので見知らぬ場所に興味が湧き辺りをキョロキョロと見渡していると、いい香りと共に大好物のアイズは発見し眼を見開いた。
間違いない、あれは――――ジャガ丸くん!!
「――――ジャガ丸くんの小豆クリーム味、十個ください」
「うおぉっ!?　お、おうっ」
ジャガ丸くんの店の店員が驚愕しながら慌てて返答する。店員からして見れば十歩以上離れていた少女が全く走る動作もなく気が付いたら目前に立っていたのだから驚くなという方が無理だろう。しかも直立しながら。
アイズはダンジョン中は体調管理のため保存食しか食さないと決めているので、好物であるジャガ丸くんを食べるのは実に『遠征』以来である。なので顔には出ないがウキウキで袋に詰め込まれていくジャガ丸くんを見ながら財布を取り出そうとして、
「……あ、れ？」
――――無い。財布が、無い。
幾らポケットに手を入れようがその存在は現れることなく、身体の

あちこちを触っても出て来ない。無表情でパニックになりながら何故無いのか考えて……ふと思い出した。
そうだ。確か今日はダンジョンの帰りにジャガ丸くんを買って食べようと考えていて――――戦闘服の方のポケットに財布を入れておいたのだ。
ガガァーンッ!! とショックのあまり背後に雷が墜ちたような錯覚に陥る。ロキにバージルの監視を命じられているため黄昏の館に財布を取りに戻る訳にもいかず、今のアイズは一文無しなのでジャガ丸くんを買うことが出来ない。
ジャガ丸くんが買えない、その事実に思わず項垂れて落ち込んでしまう。心のなかでは幼いアイズも膝を抱きかかえて落ち込んでいた。
「……あの、すみません。やっぱり買え――――」
「４００ヴァリスで構わんな」
アイズが断ろうと口を開いたその時、横から腕が伸びてきて強引に代金を支払った。驚いて腕の持ち主を見ると、そこには仏頂面でジャガ丸くんの代金を支払うバージルの姿があった。
「バージル……？」
「横で辛気臭い顔の奴が居られても不愉快になるだけだ」
恐らく店の前で落ち込んでいるのを見てアイズが財布を忘れてきたのを悟ったのだろう。店員からジャガ丸くんの入った袋を受け取ると問答無益にアイズへと投げるとアイズは抱きかかえて受け止めた。
胸元で温かい温度を感じる。その温度が内と外の二つから感じ取れた。
「……ありがとう。後でお金払うね」
「不要だ。４００ヴァリス程度渡されても迷惑なだけだ」
「おーおーっ、お兄さんカッコイイねぇ！ よっし、可愛い恋人の為に自らお金を出すその紳士っぷりにおじさんからのサービスだ！ 持ってけ泥棒っ！」
恋人――――そう言われた瞬間、アイズはふと胸の奥が熱くなるのを感じた。

アイズにとって恋人達と聞いて思い描くのは両親の姿だ。そして彼らに追いつく為にアイズは強くなりたいのだ。だが、ふと偶に考える時がある。

……いつか、自分もあの人達のような大切な誰かを見つけるのだろうか。愛し愛し合う人生のパートナーとも呼べる存在が出来るようになるのだろうか。もしそうだとしたら、その人は――

『――アイズ』

「――ッ」

「行くぞ」

「……うん」

声を掛けられ、先に進んでいたバージルの背中を追い掛ける。両腕で大事そうにジャガ丸くんが入った袋を抱き締めながら、ふと思う。

想像していた誰かの声。それが先ほど呼ばれた声と重なって聞こえた気がした。

◇◇◇

迷宮都市オラリオは冒険者が中心となっている都市だ。故に子供の数は少なく、昼間から広場にいる者などほとんどいない。先ほどまであれほど騒がしかった周りが一変して静寂に包まれ、まるで別世界に来たような錯覚をさせる。

バージルは途中で買った紅茶をベンチの肘掛けに置くと腰を下ろし、本を開くと静かに読書を始めた。アイズもそれに習い隣に腰掛けると先ほど買って貰ったジャガ丸くんを口に運びだす。

天気も良く心地よい温度に包まれながら紙の捲る音と咀嚼音だけが聞える。遠くから聞える騒音が遠い出来事のように感じ、まるで自分達の周囲だけ時間の流れが遅くなってしまったような錯覚にアイズは感じていた。

全てのジャガ丸くんを食べ終え、一息付きながらそっと背凭れにも

たれ掛かる。視界一杯に広がるのは何処までも続く青空。そよ風がアイズの前髪を靡かせて、樹々の葉が揺れる音と紙を捲る音に耳を寄せる。全身に降り注ぐ心地良い陽気はアイズを嘗て無いほどリラックスさせていた。

果たしてその状況でどれだけの時間が過ぎたのか。青空を見上げていたアイズはふと口を開いた。

「バージルは……自分の中に黒い炎が燃えているのを感じたことはない？」

それは、普段ならば決して見せる事のないアイズの弱い本音だった。誰かに聞かせるものではなく、自分自身に向けられた問い。バージルは何も答えない。それが分かっていたのか、アイズの独白は続く。

「胸の奥で、強さを求め猛り狂う醜く汚い黒い炎がずっと燃えてる。その炎がずっと私を死地へと駆り立ててきた。私はその炎に抗うこともせず、炎の求めるままこの身を投げ打ってきた。それが――怖かった。私と、あの怪物達。何が違うのか解らなかったから」

ただ炎に身を任せ強さを求め続けてきた自分。ただ衝動のままに冒険者を殺しにくる怪物（モンスター）。

ああ――そこにいったい、何の違いがあるというのだろう。

「だから、私は怖い――いつか、私も怪物に成り果てる気がして」

ああ、やはりアイズ・ヴァレンシュタイン（わたし）は弱い。強くなりたいのに、怯えられる事を恐れている。強くなるにはそんな余計な考えなどしている暇などないと言うのに、それでも恐怖を拭えない。

私は強く……なれない――視界が涙で滲み、頬を伝う。太股に溢れる雫が何よりの証拠だった。

「……下らん」

ポンッと開いていた本を閉じる音と共にバージルの声が聞える。強さを求めてきた彼からすれば失望されて当然の話だろう。それに対して失望された眼を見るのが怖くてアイズは震える肩を更に縮こませる。

だが、聴こえてきたのは全く別の意味だった。

「貴様が悩んでいる葛藤はただの思い過ごしだ。貴様が怪物に成り果てるだと？　――――あり得んな。怪物は疑問など感じん。そうであるからそうなった。そこに疑問など挟む余地などない。自己の本質に疑問を抱くのは人間だけだ。人間だけが、己の行く末に葛藤し疑問を持てるのだから。それに何より――――」

グイッと顎を親指と人差し指の腹で捕まれ無理やり向き直される。そして、そっと親指で流れ落ちる涙を拭われた。その出来事にアイズは眼を見開いて、涙で滲む視界の中、確かに見た。

「――――怪物は涙を流さない。涙を流せるのは人間の特権だからだ」

――――だからお前は間違いなく人間だ、アイズ。

涙を拭った手が頭に伸びてアイズの髪を撫でる。その不器用な撫で方と見たことがない歳相応な笑顔は、何処かで見た気がして。

「……お父、さん」

『遠征』での疲弊、昼の暖かな陽気、安心できる誰かの隣。様々な要因で押し寄せてきた心地良い睡魔にアイズは安心して身体を委ねてそっと眠りにつくのだった。

◇◇◇

――――夢を見ている。

――――大きな巨樹の下で、少女が横になって眠っている。

――――少女の枕元には青年の太股が置かれ、青年は優しい微笑を浮かべながら優しく少女の頭を撫でている。

――――ふと、眠る少女に対し青年は独り言のように呟いた。

『いつか、お前だけの英雄に巡り会えるといいな』

◇◇◇

「……」

睡眠と取っていた意識がゆっくりと覚醒していく。それと同時に、頭の上にあった感触が離れていった気がした。

目蓋を開き、ぼやけた視界の中で最初に見えたのは普段見慣れた殺風景な自室ではなく、仏頂面でこちらを見下ろす青年の顔だった。
「……バージル？」
「起きたか。ならばさっさと退け」
「……？」
バージルに言われて意味が解らず首を傾げ、アイズはふと普段の柔らかい枕の感触ではなく、硬いが温かい何処か寝心地のよい物を枕代わりにしている事に気づいた。即ち、バージルの太股を枕代わりにしていたのである。
アイズが寝ぼけながら顔を上げると、自由になったバージルが固まった身体の節々を解すように立ち上がる。その時、夕陽が沈む空を見てようやく自分が寝てしまっていた事を理解した。
「……夢？」
ならば、いったい何処からが夢だったのか。寝ぼける目蓋を擦ろうと指を寄せて、アイズはふと気づく。目元の周り、そこに確かに誰かに拭われた後があった。
「バージル……私、何か言った？」
「……何の話だ？　貴様は菓子を食い終わると途端に横になって眠りだしたが？　お陰でいい迷惑だった」
アイズの問いにバージルは否定する。ならばあの時言ったバージルの言葉は夢だったのか。その答えは解らない。けれど、それで良いと思った。どうせ夢か現実か定かではないのならば、自分にとって都合が良いほうを選ぼう。
私は――人間なのだから。
「もうすぐ日が沈む、か。戻るぞ、アイズ」
「うん」
声を掛けられ立ち上がり、ふと気づく。この時間まで待っていた。それはつまり――
（私が起きるのを……待ってくれていた？）
置いていけばいいものを、ずっと傍で見守ってくれていた。その事実が嬉しくて、アイズはふとバージルの前に踊りでた。

「……何の用だ？」
訝しるバージルに対し、アイズは自然体のまま告げる。
「――ありがとう、バージル」
それは、彼女が憧れる『風（お母さん）』のような。
誰もが見惚れる、優しい満面の笑顔だった。

番外編2：小さな英雄の産声

――夢を見ている。

まだ自分にとって全てが存在していた頃。祖父が居て、兄がいて、まだベル・クラネルにとって何も失っていなかった頃。祖父が死んでしまった日に見た夢を思い出している。

見上げる夜空は雲一つない満天下。大地に生い茂る草を布団代わりに寝転び、満天下に輝く星々を眺めていると、横で寝転がっていた兄が腕を枕代わりにしながらふと訪ねてきた。

『ベル。お前は受け継ぐならば、力か誇り高き魂。どちらを選ぶ』

兄は寡黙な人だった。多くを語らず背中で語るような人だった。誰よりも厳しくて、それ以上に自分に厳しい人だった。他人に頼らず、どんなに辛くても前に進み続ける人だった。

そんな兄の事が好きだった。生まれてからずっと兄の背中を追いかけてきたと思う。どんなに苦しくても辛くても転んでも、決して兄は助けようと手を差し伸ばしてくれることは無かった。

ただ信じているように、僅かに振り向いた貌は自分の到達を待っていた。

『やっぱり僕は英雄になりたいから、誇り高き魂かな。だって力だけじゃ英雄にはなれないと思うから』

『……そうか』

応えた解答に兄は目を細める。冷たい眼、だけど寂しそうにも見える眼。その眼は嫌いだった。まるで自分を通して誰かを見ているような、何処かへ往ってしまいそうな眼だったから。

『兄さんならどっちを選ぶの？』

『……』

その問いかけに兄は答えなかった。誤魔化すように、髪を強引に掻き混ぜられる。兄の真似をして掻き上げていた前髪も無理やり垂れ下げられて不満気な顔をするが、兄は知らん振りだった。

だけど、見えていた。掻き混ぜられている最中、垂れ下がった前髪の隙間から見えた兄の眼は、何処までも達観していた。

まるで、自分にはその答えを選べないと言うように、大切な物を見るような優しい眼で。

『――お前の魂は、何と叫んでいる――』

もう一度投げ掛けられた問いに、自分は応える事が出来なかった。

ベル・クラネルの世界は完結していた。祖父の語る冒険者という言葉に憧れは持っていたとしても、それは遠い世界の出来事だった。だからベル・クラネルは冒険者に憧れながらも、きっと祖父と兄と一緒にこの村で過ごし続ける。そう思っていたからこそ、自分の望みが解らなかった。

『……兄さんのは、何て叫んでいるの？』

だからこそ兄の望みが知りたかった。自身の目標、憧れの存在。そんな彼はいったい何を思って生きているのか。

その問いに兄は一度小さく笑い、そして告げた。

『――■■■■■――』

あの時、兄はいったい何て言ったのだろう。

『じゃあ、僕もそれでいい』

あの時の自分は、いったい何に共感したのだろう。

あの時、僕は――

◇◇◇

「――ベル君！」

衝撃、反転、落下。

何かに身体を突き飛ばされて意識が覚醒する。何が起こったのか、突然の事態に混乱する思考を冷静にさせるために何があったのか回想する。

此処はダイダロス通りで、今日は怪物祭（モンスターフィリア）が開かれており、その際にモンスターが脱走し、自分はシルバーバックに襲われて――

そこまで思い出して、ベルは自分の胸元にある温もりに意識を向けた。そこにいたのは先ほどシルバーバックに襲われて逃げるように説得したはずの彼の主神、ヘスティアが激しく息切れしながら庇うよ

うにベルの胴体を抱き締めていた。
「かっ、神様⁉　何でここに――――」
逃げたはずじゃ、とそこまで考えて隣から聴こえてきた息遣いに思考を打ち切りそちらに視線を向ける。
恐らくヘスティアが突進してきた衝撃で紛れ込んだであろう路地裏の階段上、そこからシルバーバックが腕を伸ばしてベル達を掴もうとしている。幸い怪物の図体が巨体なため身体が裏路地に入れないでいるが、両壁はシルバーバックの巨体に耐きれず罅が奔り、壁を粉砕して路地裏に侵入してくるのも時間の問題だろう。
このままだと、神様まで巻き込んでしまう……っ！
「失礼します、神様！」
「うっ、う～ん。ベル君……ッ？　うわぁ⁉」
階段から転げ落ちた際に頭を打ったのか、頭を押さえて呆然としていたヘスティアを不躾さだと分かっていながらベルはその小柄な身体を抱き上げ一直線にシルバーバックから離れるべく駆け出す。
俗に云う、お姫様抱っこの形で。
「べ、ベル君……こんな状況で本当にすまないと思ってるんだけど……ボクは今心から幸せを感じている……！」
「なに言ってるんですか神様ぁ⁉」
こんな状況でも幸福そうに笑うヘスティアに絶叫しながらベルは一歩でもシルバーバックから遠ざかるべく全速力で迷路とも言えるダイダロス通りを縦横無尽に駆け巡る。
もっと、もっと遠くへ。この神(ひと)だけでも逃がしてみせる――――決死の覚悟で逃走するベルに対し、されど運命は微笑まず、
「……ぁッ、そん、なぁ……」
複雑な一本通りの行く先。そこにあるのは青空へと続く出口ではなく――――空高くそびえ建つ壁だった。
袋小路。即ちデッドエンド。一本通りを引き返したところで別の道など存在するはずなどなく、完全に退路を断たれてしまった。怪物がここまでやって来るのも時間の問題だろう。四肢に力が入らず崩れ落ちる。

「ごめんなさい、神様。僕は、僕は……ッ！」
また失うのか。また家族を守れないのか。矮小で惨めな自分が情けなくて流れ落ちる涙を拭う事すらできず、ベルは蹲りながらとうとう耐え切れず己の心的外傷（トラウマ）を口にした。
「僕は――――兄さんにはなれないッッ!!」
――――ベル・クラネルにとって、バージル・クラネルは憧れであり、同時に歪みでもあった。
幼いベルにとって兄であるバージルは英雄そのものだった。
強く、格好良く、誰も譲らない信念を持っており、弱くて無様ですぐ揺れる己とは正反対な存在。すぐ立ち止まってしまう自分とは違い、前に進み続けることが出来る理想の人物。
だからだろう。何の変哲もない日。激的な変化もなく、同じような日々が繰り返されていた日常で、唐突に兄はオラリオに一人で向かった。
その時、その気になればきっと自分もその後を追えたはずなのだ。だけどそれが出来なかった。〝お爺ちゃんを一人には出来ないから――――〟そう自分に言い訳して、村に残った。
そうだ、ベル・クラネルはそういう人間だ。すぐ立ち止まってしまい、誰かに尻を蹴って貰わなければ前に進むことが出来ない。結局、何もかも失わなければ行動することが出来ない弱く惨めな存在。
そんな自分が嫌だった。だから祖父が崖から転落して死んだと聞かされた時、涙を流し尽くし一人になった部屋を見て決めたのだ。
変わろうと――――兄のように成ろうと。強くて格好良い、英雄のように成りたいと。夢に憧れていた冒険者になると誓ったのだ。
そして残った全財産を持ってオラリオに着いて、先に向かった兄の行方を知ろうと調べて、愕然とした。
迷宮都市オラリオの最大派閥【ロキ・ファミリア】に属するＬｖ．６。数多の最速到達記録（レコード）を更新し僅か四年で数少ないＬｖ．６に到達した生きる英雄。それが調べて出てきた兄の記録だった。
それを知った時、ベルは決めた。喩え何があろうと、決してロキ・ファミリアの看板だけは叩かないと。自分のような弱者が受け入れ

て貰えるとは到底思えない。だがそれでも、そこだけには行かないと固く胸に誓った。
きっとそこに行き、バージルの弟だからと受け入れられてしまったら――二度とベルは、ベル自身を許せなくなる。また兄に頼ってしまう。それは絶対に認められなかったから。
そして。数多のファミリアから入宗を拒否られ路傍を彷徨っているところを、ベルは現主神となるヘスティアに拾われたのだ。それが運命の出会い。ベル・クラネルは冒険者となり、ダンジョンに潜り――兄との隔絶した差にトラウマを持ってしまっていた。
こんな時、兄ならばどうしたか――？　決まっている、きっと兄ならば勇敢に立ち向かったに違いない。英雄のように、お伽話に出てくる主人公のように、きっと見事に勝利を収め前に進み続けるに違いない。
だけど、それをベル・クラネルは選べない。力がない。勇気がない。自分を信じれない。こんな無様な自分では何も出来ない――
「……当然じゃないか、ベル君」
涙を流すベルの頭上からヘスティアの声が彼の身体に突き刺さる。そうだ、成れるはずがない。兄のような存在に、自分のような無様な弱者が――
「――だってベル・クラネルに成れるのは、ベル・クラネルしかいないんだからさ」
「えっ――」
罵倒されると思った声は優しくて、ベルは思わず顔を上げた。そこには普段彼が見慣れた優しい神様の笑顔があった。
「ベル君。人は誰かになることは出来ないんだよ。喩えその人と同じ出来事をしてきても、どれだけ真似たとしても、絶対にその人自身になることは出来ない。神様（ボクら）だってそうさ。だけどそれは、君には君しか成れないって事でも在るんだよ。君が今までしてきた努力は決して無駄なんかじゃない。それでも君が君自身を信じられないって言うんなら――」
そう告げて、ヘスティアはそっとベルの手を両手で包み込んだ。そ

の際にベルの手に何かが手渡される。両手の隙間から見えたのは、漆黒に輝く一振のナイフ。まるで生きているように輝く刃の刻印にベルは息を飲んだ。
「ボクがベル君を高みへと導いてみせる。それが君が君であることの証。この世に一つとしか存在しない君だけの武器（ユニークウェポン）。バージル・クラネルでも持っていない、ベル・クラネルだけの武器さ」
「神、様……」
呆然とするベルに対し、ヘスティアは笑う。強く優しい、女神のように。
「どうか信じて欲しい。ボクを――そして、ボクが信じる君を」
「……はいっ！」
ベルは頬を垂れる涙を強引に拭い、力強く頷いた。
もう、その手は震えていなかった。

◇◇◇

ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｇ２２１→Ｅ４０３
耐久：Ｈ１０１→Ｈ１９１
器用：Ｇ２３２→Ｅ４１２
敏捷：Ｆ３１３→Ｄ５２１
魔力：Ｉ０
全アビリティ熟練度、上昇値トータル６００オーバー。
過去最速で【ステイタス】の更新を終えたヘスティアが見たベルの【ステイタス】は、彼女が見てきた中で最高の上昇値となっていた。
これならいける――！　ヘスティアがベルに与えたナイフは《ヘスティア・ナイフ》。彼女の親友であるヘファイストスが直々に打った進化する武器。所有者の【ステイタス】と共に進化するそれは、紫紺の輝きを放っていた。
「ベル君！　準備できたよ！」

【ステイタス】の更新が終わったのを告げるのと同時に獣の咆哮が響き渡る。間違いない、今のはシルバーバックの咆哮──もうじき場所が割れるのも時間の問題だろう。ベルは隠れていた物陰から立ち上がり、一歩だけ進むと振り返った。
「神様。……行ってきます」
その時浮かべていた表情は、今まで見たことがないほど──男の子の顔をしていた。
ああ、そんな表情で言われたら、女神として、愛する女として、告げる言葉など一つしかない。
「うん！　行ってらっしゃい、ベル君っ!!」
いつものように、されど笑顔度１２０％増しで。ヘスティアはベルの背中を押し、ベルは今度こそ振り返ることなく物陰から戦いの場へと身を乗り出した。
「…………」
──身体が、熱い。まるで全身が燃焼しているように、されど思考だけは異様に冷静（クリア）。そして全ての熱が集中しているように、ナイフが熱い。まるで生きているように。
そこまで考えて、上から降って来たシルバーバックにベルは視線を向けた。自分では到底敵わないはずの怪物。だというのに、今はその姿を見ても何の恐れも抱いては居なかった。
そしてその変化をシルバーバックも感じ取ったのか、警戒するように唸り、威嚇するが如く咆哮を解き放った。
『ガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!』
雄叫びに大気が震え、風となってベルの全身に叩きつけられ、前髪が揺れる。
ベルはその咆哮に怯えを見せる事もなく、上に掻き立つ前髪を掴み──そっと降ろした。
「そうだ、当たり前のことだったんだ」
呟く声は、まさに零れたとしか言えない音量。
誰かに聞かせる訳でもなく、自分自身にベルは告げる。
「僕は、ベルだ。兄さんじゃない。僕は僕だ。弱くて惨めで情けなく

て――それでも変わりたいと思った――ベル・クラネル。それが僕だァ――ッ!!」
咆哮に負けじと吠えて、掻き降ろした前髪からシルバーバックを睨みつける。それは決別の証。もう、バージルに成り切るのは辞めよう。今度は、ベル・クラネルとしてバージル・クラネルに追いついてみせる。
前へ。先へ。一歩踏み出し、その逆の脚も踏み出して歩みは次第に駆け足に、疾走へと進化していく。
――その刹那。
〝――這い上がって来い。頂にて、貴様を待つ〟
それは幻覚だったのだろう。
それは幻聴だったのだろう。
吹き荒れる風の中、その先に兄の幻影を見た。いつものように、助けを伸ばすのではなく、ここに辿り着くのを待つように僅かに振り向いた横顔。
それを見て、告げる言葉など一つしかない。
待ってて、でもない。
置いて行かないで、でもない。
歯を食い縛り、熱く滾る四肢に更に力を込めて、絶叫と共に幻影の背中を突破した。
「先に行ってて――必ず、兄さんを追い抜いてみせるから――!」
それは自分自身に告げる宣告。
他の誰でもない、自分自分の魂への誓い。
風が途絶え、目前に広がるはシルバーバックの驚愕した顔。先ほどとはかけ離れた速度に完全に迎撃しようとして振るっていた腕は明らかに追いつかない。
空前絶後のチャンス。これを逃せばベル・クラネルに勝機はもはや存在しない。無防備となった胸部に向けて、ベルは矢のようにナイフを持つ右腕を引いて足腰に力を込め、一気に解き放つ。
それはかつて、ベルがバージルから教わった数少ない技の一つ。
魔剣技突撃疾走式――

「スティンガァアアアアアアアアアッツ!!」

解き放たれた突撃槍が紅い軌道を宙に描きながらシルバーバックの胸部に深く突き刺さる。衝撃に視界が真っ白に染まり、それでも前へナイフを深く突き立てる。

――熱い。身体が沸騰しているかのように、思考も曖昧になっていく。

何もかもが溶けていくような感覚の中、ベルの口がまるで制御から離れたように勝手に言葉を紡ぐ。それは、彼の魂の叫び。嘘偽り無い、彼の思い。

「あの日に……誓ったんだ。もう二度と、失わないって……家族を、守りぬいて見せると……僕の魂が、叫んでいる……!」

フラッシュバックする記憶。何もかも曖昧となっていく世界で、過去と現在が交差する。

「――もっと力を――」

『――もっと力を――』

胸の内側から溢れ出す魂の咆哮が起爆剤と化し、熱く滾る身体が回路と成りて、ナイフが力を爆発させる。身体の力を一つ残さず使い切る勢いでベルは渾身の思いと力をシルバーバックに叩き込む。

「いっけぇぇえええええええええええええええええええええええええええツッ!!」

迷いも、恐れも、何もかもを置き去りにして――シルバーバックは魔石を砕かれ、跡形もなく消滅した。

「……勝っ、た……?」

自分のした事が信じられず、驚愕と共に無意識に座り込む。やがて自分のした事を受け入れて、震える両手を握り締めた。

それは決して恐怖から来る震えなどではない。むしろその逆。押し寄せて来る歓喜を抑えきれなかったから。

そして、抑える気もなかった。

「――ぁ、ぁぁぁ、ぁあああああああああああああああああああ

あああああああああああァァァッッ!!」
両手を強く握り締め、渾身のガッツポーズと共に抑えきれぬ歓喜を咆哮に変えて天へと轟かす。ただただ、喉が枯れ果てるまで少年は空へと吠えた。
この日。ようやくベル・クラネルはベル・クラネルとして、冒険者となった。

◇◇◇

――そして、その至高の輝きを眺め女神は恍惚の笑みを浮かべていた。
「ああ、良いわベル……やっぱり貴方の魂は本当に綺麗……」
青臭く、されど誰しもが思わず見てしまう魂の輝き。それを見て笑っていた女神は、ふと視線を変える。
「それで……貴方はいったい何の用なの、オッタル？」
女神が向けた視線の先。赦しを乞う罪人の如く頭を垂れるオラリオ最強の冒険者と謳われる【猛者（おうじゃ）】は、何時間もその体勢でありながら何一つ不満を述べること無く発言の権利を得たのと同時に告げる。
「フレイヤ様、不躾ながらお許し下さい。――どうか、私に貴方の護衛から離れ、ダンジョンに潜る許可を与えて下さい」
その脇に置かれているのは、嘗て鍛冶の神であるヘファイストスが己の全霊を注ぎ『神の力（アルカナム）』を駆使して作り上げた至大至高の神造兵器（アーティファクト）。
僅かに上げられたオッタルの顔から見える双眸は隠し切れない戦気の業火に燃えており、その魂の輝きに思わず飲み込まれそうになる。
その姿を見て、女神は更なる笑みを浮かべた。
――決戦の日は近い。

番外編３：強者の壁　―１―

「何て言うかさぁー。バージルって距離感が遠く感じない？」
　ロキ・ファミリア本拠【黄昏の館】。一階の談話室に風呂上がりで僅かに湿った髪を乾かしながらアイズ達一同が世間話をしていると、ふとティオナがふと呟いた。仲間を貶めるような発言に批難するようにアイズの目が細まり、慌ててティオナが手を横に振りながら続きを告げる。
「いや、別にバージルのこと批難してる訳じゃないよ!?　ただ、何て言うか……あたし達ってフィンやリヴェリアに育てられてきたじゃん？　ロキ・ファミリアがいるから今のあたしがいるって強く断言できるし」
「まあ……それはそうね」
「うん……」
「確かにティオナさんの言う通りですね」
　ティオナとティオネはフィンに、アイズとレフィーヤはリヴェリアに、そしてここにはいないがベートはガレスに。第一級冒険者に至った者達は皆仲間に鍛えられてここまで強くなれた。
「だけどさ……バージルって誰かとダンジョンに潜った事なんてほとんど見たことないし、【ヘファイストス・ファミリア】の団長とのコネだって自分だけで作ったようなものでしょ？　それを見てると……バージルって本当にあたし達の事を仲間だって思ってるのかなって……」
『……』
　その言葉に、彼女達は否定の意を唱える事が出来なかった。
　バージル・クラネル。四年前に【ロキ・ファミリア】に入宗してきた青年であり、今やロキ・ファミリアの幹部の一人であるオラリオにおいても数少ないＬｖ．６の一人。ただ、その在り方は酷く歪だった。
　初めは一人でダンジョンに潜っていたアイズや弱者を見下ろすベートでさえ、今はパーティーを組んでダンジョンに潜っている。だ

というのに、バージルはロキ・ファミリアに入宗してから未だほとんどソロでダンジョンに潜っていた。
決して仲間を作らず、己一人で全てを成すその姿を見ていると、凄く不安になる。普段喧嘩ばかりしているベートでも大切な仲間だと思っていると断言できるのに、バージルの気持ちが解らない。
バージルは確かに強者だ。だがその強さは【ロキ・ファミリア】に鍛え上げられた強さではなく、彼自身で鍛え上げられたものだ。だからこそ思ってしまう。彼にとってロキ・ファミリアは大切な仲間ではなく――――ただ己を強くする道具に過ぎないのではないかと。どこのファミリアに所属しようと変わらないのではないかと。
ティオナの発言に先ほどまであれほど賑やかだった談話室がお通夜の如く暗くなる。
と、そこへ、
「なるほど、確かにそれは問題だね」
「わっ!? び、びっくりしたー」
「団長っ!? い、いつからいらっしゃったんですか!?」
やっ、と片手を上げて気楽に挨拶する小人族は団長であるフィン。アイズ達しかいなかった談話室に突然現れたフィンの存在に一同は驚く。
「先ほどようやく書類が片付いてね。部屋に戻るところに君達の会話が聴こえてきて、盗み聞きするつもりは無かったんだけど気になる事が聴こえてきたからついね。不快に思ったなら悪かったよ」
「いえいえ！ 団長なら私を３６５日２４時間いつでも盗み聞きしてかまいませんから！」
相も変わらずなティオネの発言に引き気味に苦笑するフィンだったが、ごほんっと一度咳き込んで仕切り直してティオネ達に向き直る。
「団員達が不和のままなのは団長として見過ごせないからね。ここは親睦会でも開いてお互いの仲を深めようか」
「親睦会……？」
突然の申し出に首を傾げるアイズ達だったが、そんな様子は気にも

止めずフィンは不敵な笑みを浮かべる。
「もっとも……冒険者らしい親睦会になるだろうけどね」
　その時彼が浮かべていた笑みは、まるで悪戯を仕掛けた少年のような不穏さが含まれていた。

◇◇◇

「……で。フィンに言われた通りに来たんだけど……何でここにベートがいるわけぇ？」
「知るか。俺も今朝フィンに呼ばれて来ただけだ。てめえ等こそ何なのか知らねえのかよ」
　翌日。フィンに言われた通り訓練所に訪れたアイズ達だったが、そこにフィンの姿はなくいるのは同じ【ロキ・ファミリア】の幹部である狼人のベート・ローガだけだった。
「あたし達もフィンに言われて来たんだけど……何でもバージルと親睦会を開くとか何とか言ってたっけ？」
「あァ？　あいつと親睦会だァ？　……チッ、フィンの奴いったい何を企んでいやがる」
「ちょっとぉ！　団長に対してその態度は何なのよ！」
「じゃあ逆に聞くがよォ、あいつが素直に親睦会を受ける光景が目に浮かぶか？」
「それは――――」
　ベートの問いに対し、一同は黙りこんで考え込む。彼らの頭の中ではそのシチュエーションが浮かび上がるが、その成果は彼らの苦悶の表情が言葉以上に語っていた。
「……ごめんなさいベート。今回ばかりは私が間違ってたわ」
「どう考えても絶対に『不要だ』とか言って一瞬で切り捨てられそうだよねー」
「ま、まあバージルさんですし……」
　目を逸らしながらティオネが謝罪し、苦笑しながらティオナとレフィーヤがバージルの心像を口にするが、アイズだけは不思議そうに

首を傾げていた。
「ねえー？　アイズもそう思うでしょ？」
「……？　バージルは受けると思うよ。前にジャガ丸くん買ってくれたし」
　刹那――――ピシリッ、と空気が凍った。
　あの、バージルがアイズにジャガ丸くんを奢った？
　あの、バージル・クラネルが？
　あの、天上天下唯我独尊のバージルが!?
「あ、あああのアイズ？　そ、そそそれっていいいつの話？」
「遠征の翌日だけど……」
「な、何でそんな事になってんですかぁっ!?」
「ダンジョンに潜ろうとしたら、大事を取って休めってロキに言われて……バージルなら黙って潜るかもしれないから監視しろってロキに言われて、後を付いて行ってる時に財布を忘れてて」
「なんだ、デートじゃなかったのね」
　ふぅー、と心底安心したように嘆息する三人。その様子に不思議そうにするアイズだったが、気になったベートが怖ず怖ずと話し掛ける。
「な、なあアイズ。それだけだよな？　他にはなんにも無かったよな？」
　まるでそうであってくれと祈るような問いに対し、アイズは少し考え込むように顎に手を置き、それから思い出したように手の平をポンッと叩いた。
「……そういえば、途中で眠ってしまって……バージルの太股を枕代わりにしてたから、迷惑かけてしまいました」
『ひ、膝枕だとォ――――ッ!?』
　アイズの返答に対し、その場にいた第一級冒険者の肺活量を無駄に消費した声高が訓練所に響き渡った。
　あの、バージルがアイズに膝枕しただと？
　あの、バージル・クラネルが？
　あの、悪鬼羅刹冷酷無比なバージルが!?

「あ、あの野郎……俺でも出来ねえことを、易々と、だと？」
「いやベートは一生無理でしょ」
「んだとォこのド貧相女ァッ！」
「誰がド貧相だァァああああああ!!」
　ガルルル！　ぐるるる！　とまるで獣同士のように至近距離で睨み合うティオナとベート。二人を止めようと慌ててレフィーヤが喧嘩の仲裁に入ろうとするのを見てやれやれと嘆息するティオネとその光景を眺めているアイズ。
　いつも通りの光景が展開されている中、訓練所の扉が開く音が荘厳に響き渡る。彼らはそちらに視線を向けると、そこには彼らをここに呼んだロキ・ファミリア団長であるフィンと、付き添いで来たのかハイエルフのリヴェリアが佇んでいた。
「やっ、待たせたかな？」
「もうフィン、遅――グフゥッ!?」
「団長ッ！　いえいえ！　私達も今来たところです！」
「ああ！　ティオネさんの容赦無い腹パンがティオナさんの鳩尾に!?」
「……綺麗なボディーブロー」
「何やってんだてめえら……ったく、それで俺らを呼んだのはいったい何だってんだよ」
「まあ、その話は全員が揃ってからでね……ほら、真打ちのご登場だ」
　僅かに振り返ったフィンの横目が訓練所の開いた扉の先にある暗闇を射抜く。コツコツと存在感のある足音と共にその音の正体が顕となる。
　蒼い外套を翻し、逆立った白髪の下にある鋭い眼光が暗闇の中で蒼く光る。手には彼の得物である刀が握られており、その両腕両足には普段見慣れない獣のような籠手具足が取り付けられている。
　そのような姿をしている者など、ロキ・ファミリアにおいてただ一人しか存在しない。
「呼ばれたから足を運んで来てみれば……何の了見だ、フィン」
【ロキ・ファミリア】幹部、バージル・クラネルがそこにいた。

「悪かったねバージル。ダンジョンに行くところを邪魔してしまって」
「御託はいい、要件だけ話せ」
　相も変わらず不遜な態度にフィンは苦笑するが、気を取り直してバージルの要件通り端的に口にする。
「なに、ちょっと親睦会を開こうと思ってね。バージルにも参加して欲しかったのさ」
「親睦会……だと？」
　ピクリッ、とバージルの眉間が不愉快そうに歪む。それはそんな下らない事に時間を割かれた憤りか、しかしその正体が解る前にフィンは続きを口にした。
「アイズ、ティオナ、ティオネ、レフィーヤ、ベート――――君たちには、これからバージルと決闘をして貰う」
『はぁあああああ――――っっ!?』
　フィンの発言に対しアイズ達は驚愕するように声を荒げる。Ｌｖ．６の余裕ゆえか、リヴェリアとバージルは叫ぶこと無くただジッとその思惑を探るべくフィンを見つめていた。
「ちょっとフィン!?　どういうつもりなのッ!?」
「言葉通りの意味さ。冒険者（僕ら）は百の言葉を交えるよりも一つの剣戟を交えた方が互いの気持ちを伝えやすい。一度本気でぶつかり合ってみれば今まで見えていなかったものが見えてくるかもしれないだろう？」
「どんな野蛮人なんですか冒険者（私達）は!?」
　流石のアイズ達もその発想は予想外だったのか、フィンに問い詰めるが当の本人は笑って誤魔化された。騒々しい光景を遠くから眺めていたバージルはこれ以上付き合いきれんと告げるように嘆息すると踵を返す。
「どこへ行くつもりだい、バージル？」
　バージルが訓練所の扉を押す直前でフィンの重苦しい声が響く。それで他の者達もバージルが出て行こうとしていた事にようやく気が付いた。扉に手を付いたままバージルは振り返ること無く口を開

く。
「つまらん戯事に俺を巻き込むな」
「団員同士が不和のままなのは団長として見過ごせないだろう？
……それとも、彼らでは不満かい？」
〝――――Ｌｖ．５では相手にならない。〟
そう告げられているようで、流石のアイズ達もカチンと来た。彼らはこれまで幾つもの修羅場を乗り越えてきた猛者共だ。確かにＬｖ．では劣っているが、一対多数のこの状況で不利なのは明らかにバージルの方だろう。
だがそんな劣勢差など一切感じさせず、バージルはアイズ達を一瞥すると、静かに断言した。
「少なくとも、今のこいつらでは話にならん」
その、舐め腐った態度に――――ブチィッと、とうとう彼らの堪忍袋の尾が切れた。
「そこまで言うならさー……相手してよバージル」
「ティ、ティオナさん？」
「話にならないなら別にいいわよねー？」
「ティオネさんまで!?」
「上等だクソッタレ……！　目に物見せてやらァ……ッ!!」
「お、落ち着いて下さい皆さぁん!?　凄い形相になってますよ!?」
「……ヤル」
「アイズさんまでぇッ!?」
ゴゴゴゴゴゴ!!　と背後から効果音が聴こえてきそうなほど殺気立ったアイズ達の様子に一人取り残されたレフィーヤがアワアワと慌て出す。その様子を見てフィンは満足そうに頷いた。
「どうやら皆やる気になったようだね」
「お前がそうなるように仕組んだのだろう……」
腹黒い笑みを浮かべるフィンにやれやれと嘆息するリヴェリア。その言葉を聞こえない振りをして聞き流し、フィンはバージルの方へ向き直る。
「さて、残るは君だけだバージル。もしこれを受けてくれるのなら、

『ベオウルフ』の時の単独行動についての問題は不問にしよう」
「……脅しのつもりか？」
「まさか。これはお願いだよ」
　しばし二人は無言のまま見つめ合った。ニコニコと笑みを浮かべるフィンに、仏頂面で睨み付けるバージル。異様な緊張感が漂う中、先に折れたのはバージルの方であった。
「……今回だけだ。次はないと思え」
「ありがとうバージル。心に留めて置くよ」
「ふん。……まあいい、ちょうどこれの性能を確かめたかったところだ」
　そう告げると、手に持っていた刀――【閻魔刀】をフィンに投げる。フィンがそれを危うげ無く受け取ると、バージルは両腕両足に装着された特殊武装（スペリオルズ）の調子を確かめるように握り締める。
　アイズ達が初めて見た装備、それはつまり――
「……私たちなんか武器の調子を確かめる程度の相手にしか思われていないっていう事ね」
「ちょーとそれはムカつくなぁー……」
「どこまでも舐め腐りやがってェ……ッ！」
　普段使い慣れた得物ではなく、初めて使う武具を使うという事は、つまりそういう事だろう。本当に相手にもされていない事実に、アイズ達は思わず憤怒で強く奥歯を噛み締める。
「両者準備はいいみたいだね。なら勝利条件を言うよ。バージルは【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】を使ったら敗北。相手にならないなら問題ないね？」
「無論だ」
　どこまでも静かにバージルは構えも取らず告げる。
「アイズ達は戦意喪失すれば敗北だ。異論はないね」
「上等だボケがァ！　こっちも魔法なしでやってやらァッ！」
「私魔法が使えなかったら何も出来ないんですけど!?」
「まだ杖があるじゃん！」
「団長の前で無様な姿は見せられないわ……！」
「行くよ、バージル……！」

身体から戦意を溢れ出させて若い戦士たちは武器を構える。
「それじゃあ――――試合、初めぇッ！」
フィンの号令と共に、戦いの火花が切って落とされた。

番外編３：強者の壁　―２―

『遠征』から数日が経過したある日、俺は久しぶりにダンジョンに潜ることを決心していた。

実が遠征から帰ってきてからダンジョンに潜ろうとする度に用事を押し付けられて阻止され続けてきたが、身体が完全復活したのでようやくお使い地獄から解放された……！　イシュタルに伝言とか俺に任さず自分で行けやァ！　歓楽街の連中はしつこすぎてマジで面倒。あいつら十数人で襲いかかって来るもの。殺さず無力化しなければならない分モンスターより質が悪い。

だが、もうそんな面倒事などしなくても良いのだ！　俺はダンジョンに籠もるぞロキぃいいい――！

『今まで色々と用事を任せてしまってすまんかったな。明日からはダンジョンに行ってもええで。た・だ・し！　くれぐれも無茶しちゃあかんで？』と昨晩言質を取っているため、今日の俺は非常に気分が良い。しかもちょうど『遠征』で撃破した特殊階層主（イレギュラー）の武器素材（ドロップアイテム）である『ベオウルフの爪牙』から造られた特殊武装（スペリオルズ）『ベオウルフ』が完成したと昨日専属鍛冶師である椿に渡されたため、俺のテンションはまさしく天元突破。流石だ椿、愛してるぜェ――ッ！

ああ、空気が旨い。

身体が軽い。

こんなに清々しい気持ちになるのは久しぶりだ。

もう、何も怖くない――

「アイズ、ティオナ、ティオネ、レフィーヤ、ベート――君たちには、これからバージルと決闘をして貰う」

などと思っていた時期が俺にもありました。

今朝清々しい気持ちでいざダンジョンに向かおうと自室の扉を開けると、目前にはニコニコと笑みを浮かべるフィンの姿が。「訓練所に集合ね」という団長命令に逆らう訳にもいかず大人しく向かうと、いきなり決闘宣言。しかも俺だけ魔法なしという縛りプレイ。相手はロキ・ファミリア幹部であるアイズ、ティオナ、ティオネ、レフィー

ヤ、ベートの計五人。
……うん、ＭＵ・ＲＩ☆
この鬼！　悪魔！　鬼畜！　ショタジジイ！　フィン!!（悪口）
そんなに俺が憎いのか!?　実は俺が独断で『ベオウルフ』を撃破したこと根に持ってたのか!?　確かに相談もせず制止の声も無視して一人で突っ込んで行ったのは悪かったと思うけど、目の前で憧れのモンスターが現れたらファンなら当然の事だろう!?　……自業自得？　デスヨネー。
しかも逃げようと気配を消して出入り口の前に移動してたら直ぐ様バレて、「（翻訳）おんどれ一人で問題起こしておいて、逃げたらどうなるか分かっとんやろうなワレェ？」と脅される始末。
ふふ、ふふふふふ、不幸だ。何が今日は気分が良いだ。最悪の日じゃねえかこんちくせう。もういい、上等だ、やってやるやればいいんでしょやってやらァの三段活用!!　――とりあえず【閻魔刀】は殺傷力が在り過ぎるんでフィンに預けておいて――て、テメェらなんか恐かねぇ！　野郎オブクラッシャー!!

◇◇◇

フィンの決闘開始の宣言と共に行動を起こしたのは敏捷のステイタスが高いアイズとベートだった。ベートは地を駆ける狼の如く身体を地面と平行になるほど屈めながら突進し、アイズもそれに劣らず剣を振り抜く居合の構えで風の如く地を蹴り飛翔する。彼らに続く形でティオネとティオナも距離を詰め、最後尾に控えたレフィーヤが詠唱を紡ぐ。
それはパーティーとして基（オーソドックス）本な陣形だった。敏捷値の高いアイズとベートが前衛を務め、比較的冷静なティオネが指揮しティオナがフォローする。そして後衛であるレフィーヤが魔法という最大火力で仕留める。怒りで冷静さを失っていても指示無しで己の役割を理解し実行するその判断力は流石だと言わざるおえない。。
だが、それは所詮〝基本〟の陣形でしかない。Ｌｖ．５が大半の

パーティーで組まれた陣形ならば万が一の事態に陥っても単独の実力で乗り越えられるだろう。だからこそ、彼らは無意識の内に〝強者〟の慢心をしていた。

戦術とは〝弱者〟が〝強者〟に勝つために編み出されたものだ。ならばこそ、相手が弱者ならば甘い戦術であろうと倒せるだろう。だが、相手が〝怪物（強者）〟ならば――呆気無く戦術を打ち破り、蹂躙するだろう。

「――――」

僅かに細められた眼に宿った感情は何だったのか。失望、達観、或いは、虚無か。それを悟る前にバージルの背後に無数の魔力で製錬された蒼い剣が浮かび上がる。

幻影剣壱式――急襲幻影剣。

【魔力放出（ダークスレイヤー）】の応用で製錬された魔力の剣はバージルの十八番であり、それを見た直後アイズ達はやはりと歯を食いしばった。

幾らアイズ達が第一級冒険者とはいえ、零の加速から十五メイルを無拍子で詰める事は出来ずどうしても一拍子掛かってしまう。それに対しバージルは幻影剣を無拍子で製錬、半拍子で射出する事が可能だ。更にスキルの応用で編み出された幻影剣だがその威力は深層のモンスター相手でも充分に通用する破壊力を秘めており、速攻魔法と同じと言っても過言ではないだろう。

〝先ずは小手調べだ――――〟　そう眼で告げられたのを理解するのと同時に、幻影剣が同時連続投射される。閃光に匹敵する速度で放たれた幻影剣が空気の壁すら突破し迫り来る冒険者達に襲い掛かる。

怪物すらも貫く幻影剣。されどそれはバージルを知っている者ならば誰しもそれが来ると理解している事だった。息を吐くこともなくベートの蹴撃、アイズの斬撃がそれらを打ち落とす。打ち損ねた残りの幻影剣も中衛であるティオナとティオネが迎撃するが、それでも全てを打ち落とす事は不可能だった。漏れた一本の幻影剣、それが詠唱中のレフィーヤの肩に深々と突き刺さった。

「レフィーヤッ!!」

「だ、大丈夫――――ガッ!?」

です、と最後まで安否を告げる事が出来なかった。肩に突き刺さる激痛に耐えながら詠唱を続けようとして、気管を塞がれて詠唱を紡ぐどころか呼吸を強制停止させられる。突然の事態に混乱して何が起こったのか突き止めようとして、自分の身体が宙に浮いている事に気が付いた。何かに持ち上げられている、その起点はレフィーヤの喉であり――――持ち上げているのはバージルだった。

先ほどまでバージルは確かに十五メイル離れた場所に立っていたはずだ。詠唱中もずっと姿を確認しており、幻影剣が肩に突き刺さった時でさえ意識がそちらに向いたとはいえ視界から一瞬たりとも外してなどいなかった。

ならば、考えられる手段はただ一つ。レフィーヤの動体視力でも捉えられない速度で接近してきたという事に他ならない。先ほどの呼び声は安否を確認するためではなく、急襲を告げるものだったのだ。

【魔力放出（ダークスレイヤー）】の変化――――エアトリック。

魔導士にとって最も明確な弱点は何処か。それは敵に間合いを詰められ接近戦に持ち込まれるのが基本だろう。しかし魔法を詠唱しながら行動する『並行詠唱』を出来るリヴェリアの様に、絶対ではない。ならば何処を付くのが正解か。

バージルの至った答えは至って単純――――即ち、詠唱させなければ良い。気管を塞がれ呼吸困難に陥れば誰であろうと詠唱を続ける事は不可能である。

首を締め付けられ酸素が脳に回らず何とかその腕を外そうとレフィーヤの手がバージルの腕を掴む前に、バージルは持ち上げた身体を地面に叩きつけた。

衝撃と断線――――レフィーヤの脳は揺さぶられ、酸素が脳に至らず意識が暗転する。抵抗しようと伸ばされていた腕は力無く地に落ち、意識が途切れた事を明確に告げていた。

「先ず一人」

バージルの事務的な確認の言葉に、激昂と共に襲い掛かったのはアマゾネスの二人。

「レフィーヤッ!!」

「こぉんのぉっ!!」
仲間がやられた事への怒りを明確に表しながら、二刀の湾短刀(ククリナイフ)と大双牙(ウルガ)を叩きつけるようにバージルへ振るう。急旋回からの逆走で反転し、直ぐ様強襲を仕掛けられるのは流石は第一級冒険者と言うところだろう。
だが、
「怒りを武器に込めた所で無駄だ。動きが緩慢になるだけに過ぎん」
不自由な姿勢からの跳躍。それは万全とは程遠く、バージルにとってあまりに対処が容易だった。先に先行していたティオネが湾短刀を振るうが、まるで通り抜けたように無駄な動作なく最小限の動きで見切られ回避され、続くティオナが筋肉の筋が悲鳴を上げるのも無視してバージルの身体を叩き潰すが如く大双牙を上段から振り落とされる。
当たれば必殺の破壊力を誇る一撃。それを前にして、バージルは呆れるように呟いた。
「愚かな。己の得物に振り回されてどうする。技術ではなく【ステイタス】に頼って振るっているからこそ――――」
大双牙がバージルの顔面に振り下ろされる前に、バージルの身体が加速する。振り下ろすティオナの懐へ潜り込み、一瞬で視界から消えたバージルに驚愕する間に【魔力放出(ダークスレイヤー)】で強化された力値が大双牙の柄の箇所を握り締め、
「――――こうして【ステイタス(より強い力)】に容易に奪われる」
自身の持つ力よりも更なる力に己の大双牙(得物)を奪われ、ティオナの思考が今度こそ空白に染まった瞬間にバージルはまるで己の得物のように大双牙を前後のティオネとティオナに身体を捻らせながら横切りに振るう。
まるで小さな嵐だ、と自分の得物でありながら自分以上に振るうバージルに嫉妬の念を僅かに宿しながら、それでもティオナは咄嗟の反射で腕を盾代わりに身体への衝突は防ごうと身構える。見ればティオネも空中で在りながら身体を捻り湾短刀を盾代わりに受け止めようとしていた。

それはその場の判断において確かに正解だっただろう。
だが、
「――――温い」
大気を斬り裂いて唸る大双牙は、まるで蛇の如く瞬時に軌道を変化して二人の懐へ潜り込んでいた。
それは、まだティオナが至らぬ境地。手首のスナップを利かせる事で大双牙を変幻自在に操る技術。超重量である大双牙を完全に使い熟していなければ不可能な技だった。
悲鳴を上げる間もなく大双牙が二人の懐に深々とめり込み、筋肉と骨と内臓の形が変形し悲鳴を上げる。口から零れたのは悲鳴ではなく吐血で、薙ぎ払われた衝撃で互いに正反対の壁に陥没する勢いで叩き伏せられた。
――――直後。
「油断してんじゃねェェェェェェッ!!」
攻撃直後の硬直を狙うが如く、狼は牙を獲物へと駆り立てる。自身の咆哮すらも置き去りにしてベートは床が陥没するほどの力で大地を足指で掴み、空気の層を突破して拳を奮う。
紛れも無いベートが現状放てる最速最強の一撃。仲間の犠牲も利用した下劣で反吐の出る隙を付いたこれ以上ない好機。
「――――油断だと？　これは余裕と言うのだ」
だが、ベートの拳から伝わってきたのは肉質の感触ではなく、鋼のように硬い金属感だった。
希望が絶望に染め上げられるように、ベートの目前には憎き怨敵がその眼に何の感情も宿すこと無く見つめていた。ベートの殴った先に在ったのは、ティオナの大双牙。宙に浮かぶ超重量の獲物はベートの拳に殴られ、一瞬の間もなく反対方向へ吹き飛ぶだろう。だが、その間攻撃を実行しているベートは、目前のバージルに対し何一つ対処を行うことが出来ない。
それは奇しくも、ベートがバージルに付いた隙。攻撃直後の無防備な停滞を今度はバージルに狙われる事となった。そして、その隙をバージルが逃すはずがない。

魔拳技弐式――ライジングドラゴン。
まるで力を凝縮していたように縮められていた体躯が唸りを上げながら解放され、四肢に込められていた力がまるで天に昇る龍の如く叩き上げられる。上体捻りも加えられた突き上げられた拳は容赦無くベートの伸びきっていた肘に激突し、大地に留まらずそのまま空中まで跳び上がった。
利き腕の肘が容赦無く粉砕され、あらぬ方向へ螺子曲がった己の腕を抑えながらベートは腕に駆け巡る激痛を必死に奥歯を噛み砕きながら耐え、天井と平行摩擦を起こしながら壁と衝突し、地面に落下した。
ベートを殴ったバージルの腕。それに嵌め込まれた籠手は薄い光を放っている。その効力は彼が倒した特殊階層主『ベオウルフ』と同質、即ち光を内側に侵略させ細胞を一時的に死滅させる――言わば再生無効化と呼ぶに相応しい特殊武装だった。
レフィーヤ、ティオネ、ティオナ、ベートが敗れ、残るのはただ一人。そしてその一人が、空中に放り出されて無防備となっているこの機会を逃すはずがなかった。
「――【目覚めよ(テンペスト)】」
紡がれる詠唱は風への祈り。金色の髪を靡かせて、最後の一人となったアイズ・ヴァレンシュタインは自身の魔力を次の一撃に全て注ぐ覚悟で魔法を発動していた。
正真正銘、これが最後のチャンス。仲間を守れなかった自身に奥歯を噛み締めるが、今は皆が紡いでくれたこの機会を逃す訳にはいかない。これを逃せば勝機は万に一つとしてない。
「――【吹き荒れろ(テンペスト)】!!」
エアリエル(風)最大出力。自身に纏う風の魔力は制御できる限界まで引き上げられ、その矛先は一点に収束される。それはまさしく一点突破の神風。
「リル・ラファーガ!!」
アイズが放てる最大火力の突撃が宙に佇むバージルに向かって風の螺旋矢となりて放たれた。バージルならきっと反応し受け止める

だろう。だからこそ、それを突破する破壊力を込めなければならない。
それを確信し、この一撃ならばバージルとて防ぎきれまいとアイズは見えた勝利に僅かばかりの希望を浮かべ、
「図に乗るな」
【魔力放出(ダークスレイヤー)】の変化――――エアハイク。
その希望を塗り潰すが如く、バージルは空を蹴った。
「……え」
零れた声は、目の前の光景を否定するためか。
バージルの持つスキルの一つである【魔力放出(ダークスレイヤー)】は魔力を自在に操作する物だ。身体に魔力を帯びさせ瞬間的に放出することで能力を向上させることが出来る。そしてそれは彼が先ほど放った幻影剣の如く魔力を剣の形に練る事で敵を攻撃することも可能である。ならば必然的に、足元に魔力を固定させる事で足場を作り出すことなど造作も無い。
つまり、バージル・クラネルにとって――――地上であろうと空中であろうと、問題なく足場を創造し移動する事が可能だった。
だが逆に、アイズにはそれが出来ない。最大出力で放たれたという事は既に彼女の制御が手一杯という事であり、今更進路を変更する事など不可能。喩えそれが怪物の口の中だと解っていても、逃れられるはずがなかった。
魔拳技参式――――月輪脚。
アイズの剣は空を突き、その頭上ではバージルが半月を連想させる光の軌道を描きながら振り上げられた踵が彼女の利き肩に深々と突き刺さる。ベオウルフの細胞破壊と骨が砕ける音がやけにアイズの耳に残った。
地面へと落下する直前、バージルの瞳が見える。地面に堕ちるアイズを見るその瞳には何の感情も込められていない。それはつまり、端から敵として見ていたのではなく――――時間の無駄だと分かってい

たのではないか。
「――――ッ」
それを、言葉にする間もなく、アイズはバージルの蹴撃に吹き飛ばされ、地面が陥没する勢いで激突した。

番外編３：強者の壁　―３―

喉の焼けるような痛みと肺が酸素を求めるような息苦しさにレフィーヤは意識を目覚めさせた。

「かはっ、けほっっ、ぁ……!?」

喉を押さえながら必死に息を吸い込もうとして気管が驚き呼吸困難に陥り、何度も咳き込みながら喉に詰まった異物を吐き出して気管の軌道を確保する。全ての異物を石畳にぶち撒けると混乱する思考を鎮める為に深く呼吸を繰り返し何が起こったのか物事を整理する。

レフィーヤ（自分）は確か、フィンの図らいで親睦会という名の決闘を行っていたはずだ。そこで先ず魔法を発動させる為に詠唱を唱えていて、そこへ――

「ッそうじゃない、他の皆さんは!?」

思い出した瞬間、レフィーヤは慌てて周囲の様子を見渡した。記憶が正しいのならば彼女は決闘の最中に気を失ったことになる。どれほど気を失っていたかは定かではないが、もしかすればまだ戦いは続いているかもしれず、こんなところで悩んでいる暇などない。

現在状況はどうなっているのか、それを確かめるべく顔を上げたその先には、

「――意識を取り戻したか。そのまま虚の中を彷徨っていれば苦しまずにすんだものを」

絶望が、感情を宿さない冷酷な瞳で見下ろしていた。

「……ァ、あぁッ」

その視線に射抜かれた途端、レフィーヤの身体は主の意志に逆らうように硬直した。

蒼い外套を翻し白髪の髪を掻き上げ、何もかも射抜くような眼に僅かに発光する籠手と具足。その姿を見間違えるはずがない。

この決闘での敵――バージル・クラネルが悠然と彼女の眼前に佇んでいた。

彼がこの場に居り、そして他の皆がいない事が明確な真実を告げていた。それは即ち、既に彼女以外の全ての仲間が倒されたという事実

に他ならない。
　自分など足手纏いにしかならないアイズ達（彼ら）が呆気無く敗れた。バージルの様子を見れば一撃足りとも食らっていない無傷な事が伺え、その絶対的な差にレフィーヤの臓腑に恐怖が蝕んでしまった。
「……」
「ヒ……ッ!?」
　一歩バージルが踏み込む。その姿にレフィーヤは無意識の内に小さな悲鳴を洩らし後退る。抑えの利かない身体の震えが彼女の心理を明確に告げていた。
　怖い、勝てるはずがない。アイズさん達でも歯が立たなかった相手に私なんかが敵うワケがない。まるで湧き水の如く溢れ出てくる弱音が握りしめる杖すらも揺らす。
　その姿は、まさに捕食者に食われんとする被食者そのものだった。
「――この戦いは終わりだ、フィン。この女にはもう戦う意志が見えん」
「……あっ」
　バージルが外套を翻し振り返る。その射抜くような視線から外された事でレフィーヤは腰が抜けたようにへたり込んだ。
　汗が止まらない、身体の震えが言うことを聞かない。鼓動が耳障りなほど高鳴り、吐く息が燃焼しているのではないかと錯覚するほど熱い。
　何よりも、助かったという安堵だけがその空虚な胸を埋め尽くしていた。
　だからこそ、
「相手を選ぶならばせめて冒険者から選べ。戦う覚悟の無い者をこの場に呼ぶな」
「――――」
　続くバージルの言葉。その正論が容赦なく彼女の臓腑を言葉の刃と為りて貫いた。
　レフィーヤ・ウィリディスは冒険者ですらない、その宣告に彼女は何も言えなかった。何故なら彼女自身が一番それを理解していたの

だから。
だって、仕方が無いじゃないか。私なんかじゃあの人達が束になっても敵わなかった相手に勝てるはずがない。
〝――本当に？〟
これが最善の選択なはずだ。私なんかが、足手纏いでしかない私じゃ到底敵わない。だから、仕方が無い。
〝――本当に、私（あなた）はそれでいいの？〟
仕方が無い。諦めるしかない。今回は運が悪かった。次は頑張ろう――なんて言葉で自身の心を誤魔化すしか術はなかった。
本当は分かっている。レフィーヤ（私）自身が誰よりも理解している。自分が弱い事など、守られてばかりだと、足枷にすぎないのだと。そんなこと、誰かに言われなくとも承知している。
だから、だから、だから――私は、どうなりたかった？
「――あ」
無意識に上げた顔。石畳ばかり見ていた視界に広がったのは蒼い外套の背中。その後ろ姿に、金色の剣姫の姿が重なった。
（そう、だ――）
追いつきたい。
助けたい
力になりたい。
できることなら――一緒にいたい。
余りに遠く、憧憬を抱いてしまうその背中達に、胸を張れる自分になりたいと思ったのではないか。
ならば、こんなところで何を蹲っている。こんな様で何があの人達の仲間だ。この背中に刻まれた証は何だ。この胸で刻む魂は何を表している。
恐怖を捨てろ。
前を見ろ。
歩くような速さでいい、進み続けろ。
決して立ち止まらず、その憧憬（背中）を目指せ。
私は、私の名は――！

「あああああああああああああああああああああああああああああッッ!!」
突如、レフィーヤは獣の如く咆哮を喉から放ち、一瞬も迷うこと無く額を石畳に叩き込んだ。
鈍い音が響き渡り、額が裂け血が溢れ出る。誰しもがレフィーヤの突然の奇行に息を飲む中、バージルは悠然とレフィーヤへ向き直る。
そこに立っているのは先程までのただ怯えるだけの被食者ではない。額から血を流し、杖を構えるその瞳は、紛れも無い冒険者のものだった。
「私はっ！　私はレフィーヤ・ウィリディス！　ウィーシュの森のエルフッ！」
それは宣誓。誰かに告げたものではなく自分自身への魂の誓い。言葉を力に、勇気に変えて彼女は折れた信念を取り戻す為の証。
「神ロキと契りを交わした、このオラリオで最も強く、誇り高い、偉大な眷属（ファミリア）の一員！　逃げ出すわけにはいかない！」
「その震える足でか？」
「……ッ！」
バージルの指摘した通り、レフィーヤの身体は今もなお恐怖で震えていた。
怖くないはずがない。目の前の相手はオラリオ内においても数少ないＬｖ．６の一人。それを最年少で到達した紛れも無い怪物だ。彼女のようなＬｖ．３程度が話になる相手などではない事は、彼女自身が誰よりも理解している。
「それでも……！　ここで逃げたら、私は二度とあの背中を追いかけられなくなる！　他の誰でもない、私自身がそれを許せなくなる！　だから――私は逃げない！　この背中に背負った証と共に、最後まで抗ってみせるッ！」
誰一人、逃げようとはしなかったはずだ。
皆最後まで抗い、全力を尽くしてから敗れたはずだ。
ならば自分も抗おう、最後まで。みっともなくて無様だとしても、己はロキ・ファミリアの一員なのだから。

「いいだろう、手負いをいたぶる趣味はない。一撃で終わらせてやる」
レフィーヤの決死の覚悟を感じ取ったのか、バージルは荘厳と拳を輝かせながら一歩踏み出す。その距離およそ十メイル。とても魔法を発動しても詠唱が終わる前に間合いを詰められ敗北するだろう。
それでもレフィーヤの目に敗北の色はない。最後まで戦う覚悟を決め、それを示すために脚を踏み出そうとして、

「――ちょっと、一人で戦うつもり？　それは水臭いんじゃない？」
「そうだよ、あたし達は仲間でしょ？」
「レフィーヤ……大丈夫？」
「ケッ……まあ、雑魚にしちゃあいい啖呵だったんじゃねえの」

優しい温もりと共に背後からそっと抱き締められる。その温もりに驚いて背後へ振り返ると、そこには傷つきながらも笑う仲間の姿があった。
ボロボロに傷つきながらもいつもの様に笑う彼らの姿を見て、レフィーヤの胸の奥が温かくなる。震えていた脚は止まり、芯の奥から力が湧き上がって来る気さえした。
「さあ、もう1ゲームといこうぜ――バージル」
彼らの目には達観も諦めも無い、あるのは勝つという強い意志のみ。油断も慢心もなく、身体は初めより傷ついているがその闘気は比べるのが億劫なほどかけ離れていた。
初めての武器だから？　【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】を使わないから？　自分達を舐めている？　――舐めていたのはどっちだ。
相手は誰だ。相手はあのバージル・クラネルだろうが。ロキ・ファミリア最強の一角であり、まだ自分達が到達できていないＬｖ．６。自分達はまだ対等に戦える土俵にすら上がっていないというのに、思い上がるのも大概にしろ。
故に、あの頂に挑もう。まだ我々は挑む立場なのだから。足掻いて藻掻いて喰らいついて――証明してみせよう。
冒険を――始めよう。

「……手間を取らせる」
バージルはそう呟いて、冷然と拳を構えた。
そう、此処に来てバージルは初めて構えの姿勢を見せた。それは即ち彼らがそれに値すると判断したが故に。取るに足らない『無駄』な存在から、手間が掛かる『障害』へと。
「――――くくっ」
「――――ハハッ」
それが嬉しくて無意識に笑みが溢れ、それを飲み込むように獰猛な狂笑を浮かべ己の得物を構える。彼らの眼に迷いは無い、在るのはただ〝勝利〟という欲望のみ。それだけがまるで分かち合うように彼らの目に輝いていた。
「たまにはお前らの遊びに付き合ってやる」
「上等ォ、そのままついでに敗北もくれてやらァッ！」
「とりあえず、さっきのお返ししなきゃね！」
「あんまり突っ走らないでよね」
「みんなとなら、きっと勝てる」
「はい、行きましょう皆さん!!」
第二ラウンド――――試合開始。

◇◇◇

「あははは、流石はバージル。仲間相手でも一切容赦しないね」
「……それを分かってやったのだろう、お前は」
訓練所の壁端。目前で激戦区と化しているのにも関わらず和気藹々とフィンとリヴェリアは彼らの戦闘を眺めていた。
「問答無益で容赦なく戦ってくれるのはバージルくらいだからね。僕やリヴェリア、ガレスじゃどうしても手加減して〝稽古〟になるから。それとも、〝母親〟としてみれば不満かい？」
「……誰が〝母親〟だ。それにお前が云いたいことは分かっている。最近アイズ達はステイタス頼みの戦闘となって基礎が疎かになっていたしな。我々が言っても注意でしかならんだろう。それを身体で

理解させられるのはバージルくらいしか居まい」
　ステイタスが上昇するという事は身体能力が上昇し、やれる範囲が広がる事を示す。それは単独の戦闘能力が上昇することを示すが、逆に言えば自らが出来る範囲が広すぎるため連携が疎かになる恐れがあった。
　昔ならば作業を分担して行っていた作戦も、ほとんどを一人でこなせるようになってしまう。それは確かに成長だが、連携が疎かになれば強者との戦いで待っているのは死だ。
　本来ならばそれはフィンやリヴェリア達先達者が伝えねばならない事だが、アイズ達にとって彼らの言葉は親の説教染みた聞き慣れた言葉でしかない。だからこそフィンはバージルを選んだのだ。
　フィン達と同じＬｖ．６でありながら、それを実践させるために容赦のない人物を。
「正直に言えばアイズ達がやられた時にリヴェリアが飛び出さないかヒヤヒヤしたんだけどね」
「お前は私を何だと思っているんだ、フィン。それにしても親睦会などと嘯いてバージルを連れて来なくとも、正直に事情を話せば良かっただろう、こんな騙すような言い方をしなくとも」
「……騙したつもりはないんだけどね」
　小さく呟いて、フィンはそっと手で握り締める刀を見た。触れている箇所から燃え上がりそうなほど熱を発する剣。主は貴様ではないと告げるようなその熱は、まるでこの剣の主のように触れるものを拒絶する。
　その熱に魘されるように、フィンはある日の夜に語ったバージルの言葉を思い出す。

『フィン。俺は貴様らに敬意を持っている』
『誰かの為に、愛する心こそが人を最も強くさせる』
『俺にはそれがない。理解は出来ても共感することが出来ない』
『――――ならば捨てよう。それに勝るまで全てを切り捨てよう』
『強者には二種類しか存在しない。何かを背負い強くなる冒険者と、

何かを捨てて強くなる兵器(物)だ』
『無論、この地獄(みちち)を進むと決めた時から修羅(一人)になる覚悟はとうに出来ている』

「……バージル、君は一人なんかじゃない。君はただ先に進み過ぎて周りに誰も居なくなったからそう勘違いしているだけだ。だから気づいて欲しい――君の後ろで追いかけている彼らの事を。その虚空を映した目を見開いてしかと確かめてくれ」
「……フィン？」
独り言染みたフィンの言葉にリヴェリアが訝しげるが、フィンの視線は戦場を捉えて離さない。
予感がしたからだ。この決闘、リヴェリアはアイズ達の為に開いたと思っているようだが、それは違う。この決闘の本来の目的は、他の誰でもないバージルの為だった。
もしも、この決闘でアイズ達が何も証明できず、バージルの瞳が虚空(幻想)を写したままならば――

バージル・クラネルは、ロキ・ファミリア(自分達)から離れていくだろう。

そんな予感が、フィンの脳裏を横切っていた。

番外編３：強者の壁　―４―

まず動きを見せたのはバージルの方だった。

先とは何が違うのか確かめるように初めの行動を模倣する。背後に錬成されるはバージルの魔力によって錬られた幻影剣。蒼き剣群は大気を唸らせながらアイズ達に襲いかかる。

幻影剣壱式――急襲幻影剣。

音の壁を貫き螺旋を描きながら強襲する幻影剣の軌道の先にいるのはまだ未熟な魔導師。戦いにおいて弱者から蹴落とすのは当然のセオリーと言ったところだろう。ゆえに、それを予測するのもまた簡単だった。

迫り来る蒼き剣が全て空中で叩き落とされる。変幻自在に空を斬り裂いたのは二刀の湾短刀（ククリナイフ）。詠唱を唱える姫を守るように眼前で仁王立ちして守護する騎士の如き少女は笑いながら剣を構えた。

「今度は使わないのね、あの瞬間移動染みた移動は」

「……」

ティオネの問いにバージルは答えない。否、そもそもこの男は戦闘中に口を簡単に開くほど容易に隙を作る男ではないことぐらい百も承知の上だ。だがそれでもある程度予測は立てる事ができる。

「もしかして、使わないんじゃなくて……使えないんじゃない？」

バージルの瞬間移動染みた超加速は確かに厄介だ。だが同時に一つの疑問が湧く。それほどの速度が出せるならとうに決着が付いているはずだ。Ｌｖ．５であるアイズ達が知覚できない速度、Ｌｖ．６であるフィンやリヴェリア達でさえその速度を出すのは困難だろう。

ならば逆説的に、それを実行しているバージルはどうだろうか。客観的に見れば遅く見えるものも、主観的に見ればその何倍も速く感じるものだ。Ｌｖ．５であるアイズ達が知覚できない速度で、Ｌｖ．６であるバージルが果たして周囲の情報を知覚できるのだろうか。

バージルのスキル【魔力放出（ダークスレイヤー）】はアイズの【風（エアリエル）】と同じ付与系の類に属する。だからこそＬｖ．６以上の身体能力で先ほどの瞬間移動染みた超加速さえも実現できるのだろう。だがそれはいわば暗闇を

走るのと同一の事だ。
過ぎた力は身を滅ぼす。幾らバージルがＬｖ．６とはいえそれほどの速度で移動すれば自身が何処に居るのか空間把握すら難しい。だからこそ、幻影剣の存在が必要不可欠だった。
自身の分身とも言える魔力で造られた剣。それは例え目を閉じていたとしてもその存在を知覚することが出来る。つまり幻影剣を敵に接触させそれをマーキング代わりにする事で敵の位置を把握し、あの瞬間移動染みた超加速を可能としていた。
「バージル、貴方のあの移動法は幻影剣が相手に刺さっていないと使えないんじゃない？　あれだけの速度、なんの制約も無く使えるとは思えない。違う？」
ティオネの問答にバージルは否定しない。だが静かに目を閉じ、呆れるように嘆息すると、
「言いたい事はそれだけか？」
避けられるならば、避けられない攻撃をすればいい――
そう告げるように、詠唱を続けるレフィーヤの周囲に円陣を囲うが如く幻影剣が取り囲んで出現する。
幻影剣弐式応用――烈風幻影剣。
相手を拘束する様に出現した幻影剣の切先は全てレフィーヤに向けられており、その隙間は一メイルも存在しない。
ちょうどティオネの背後に出現した蒼き剣群は、とても彼女が振り返ってからでは間に合わない。だというのにティオネは何も慌てててなどいなかった。
それを決定付けるように、獣の咆哮が轟く。
「だからてめぇは……いつも人様を無視してんじゃねぇぇぇぇぇッ!!」
無防備に詠唱を続けるレフィーヤに強襲をしかけた幻影剣が全てベートの白銀のメタルブーツに掻き消される。ティオネが振るった湾短刀の時とは違い、まるで存在を消滅させられたように音もなく姿を消した。
否――溶けた。

「俺を忘れてんじゃねえぞ、バージル」
ティオネの隣に降り立ったのは白銀の狼人。僅かに発光するメタルブーツで石畳を踏み砕きながら、ベートは獰猛に笑った。
ベートの持つ特殊武装（スペリオルズ）【フロスヴィルト】は精製金属（ミスリル）製のオラリオ唯一の魔力吸収（マジックドレイン）の属性を持つメタルブーツであり、バージルの幻影剣とは最も相性の良い武器だった。
バージルが生み出す幻影剣は彼の魔力によって生み出された物に過ぎない。だからこそ魔力を吸収する属性を持つベートの特殊武装はバージルの幻影剣の天敵とも呼べる存在だった。
まるで姫を守る騎士のようにティオネとベートがレフィーヤの前に陣取る。この二人がいる限り、幻影剣が通用することは先ずあり得ないだろう。
ならば――――直接この手で仕留めればいいだけの話。
一歩踏み出したバージルを見てアイズ達に緊張が奔る。ロキ・ファミリア最強の一角、その技量の差は先程交えただけでも隔絶とした間が在ることは承知の上だ。だからと云って集団戦を挑もうものならば容易に隙を突かれ前線は一気に崩壊し勝機を失うだろう。
ティオナでは技術が足りない。
ティオネでは戦闘スタイルが似ているが為にスペックが足りない。
ベートでは耐久度が足りない。
レフィーヤでは接近戦が話しにならない。
ならばこの場において誰が最も戦うに適しているか。ベートのような敏捷があり、ティオナのような耐久度があり、ティオネのようなスペックでもバージルに抗え、接近技術に長けた者。
それが適する者など、一人しか存在しない。
「任せたわよ、アイズ」
「――――【目覚め（テンペスト）よ】」
その想いに応えるように、旋風が吹き荒れる。
嵐のような風を身に纏いし金色の剣姫、アイズは静かに剣を構える。【エアリエル】を最大限に展開し衝撃を吸収する鎧として、身体能力を上昇させる魔法として。

この場において、バージルを止められる者など【魔力放出】と同じ付与効果を持つ【エアリエル】を扱えるアイズ以外にあり得ない。
ならばこれは当然の事。
故に、言葉は不要。
「行くよ、バージル――――ッ!!」
「御託はいい、来い」
先の様な一撃必殺ではない。嵐のような風が吹き荒れる中、アイズは変幻自在に空中を闊歩し全方位から斬撃を繰り出す。それは遠見していたレフィーヤ達でさえ捉えきれない動き。まさに風に愛されたアイズだからこそ出来る技。
だがそれは、
「――――無駄だらけだな」
避ける、躱す、受け流される。既に百を超える斬撃を繰り出しているのにも関わらず掠りさえしない。少しでも安易な技を出そうものならば容赦なく反撃がアイズの肉体を壊しに掛かる。
風の鎧が無意味と化すほどの、一点集中。風の壁を貫いて拳が身体に突き刺さり、そこから破滅の光が体内を侵食する。触れられた箇所には絶えず激痛が奔り、痛みは決して引くことなく体内に木霊する。
だがそれでもまだ増しな方だ。もしも風の鎧が無ければその拳はなおも深く突き刺さり更なる損傷を与えていただろう。
その痛みに歯を食い縛って耐え、空中で反転し突きの構えで風の足場を蹴る。死角からの刺撃。側頭部に放たれたその一撃は見事なものだった。
「全体を守る必要などない。それほどの魔力を消費するぐらいならば一点に収束しろ。己の細胞を一つ残さず掌握し、その箇所にのみ魔力を注ぎ込め」
だが、その刺撃はバージルが振り向き瞳に突き刺さる寸前、空中に現れた幻影剣の刀身によって受け流された。滑る刀身に釣られアイズの身体が無防備に逸れ、その腹部に振り返った遠心力をも上乗せされた裏拳が容赦なく貫く。
衝撃と激痛で肺から空気を無理矢理吐き出されたアイズはそれで

も歯を食い縛り自身の身体を【エアリエル】で吹き飛ばして追撃の蹴撃を強引に躱す。もしここで安易な蹴りでも繰りだそうものならばその脚をへし折られていた事だろう。
細胞が破壊され筋肉が弛緩して力の入らない腹筋を無理矢理風で人形の如く強引に動かす。その度に激痛が身体を蝕み倒れそうになるが、それでも彼女は立ち上がった。
剣を握り締めボロボロに傷ついてもなお立ち上がる剣姫に対し、剣鬼はここにきて初めて問いを投げた。
「……何がおかしい」
「……？」
バージルの投げ掛けた問いの意味が解らずアイズは首を傾げて、ふと気付いた。
彼女の口元が少しだけ釣り上がっている事に。痛みに耐えながらもその頬は微笑の形を作っていた。
自分でも何故笑っているのか解らず首を傾げて、ある答えがふと胸に収まった。
思い出したのは、前の【遠征】の時。
アイズが三十七階層主【ウダイオス】との集団戦で精神疲弊（マインドダウン）を起こして倒れた後、突如出現した特殊階層主（イレギュラー）【ベオウルフ】とバージルとの戦い。
再生無効化という前衛（タンク）殺しに並外れた機動力を誇り、且つ白い翼の羽を散弾のように周囲に撒き散らす怪物。先の階層主との戦いで既に全霊を駆使していたロキ・ファミリアにとってその出現はまさしく最悪と呼ぶに相応しい存在だった。
そして、それの相手を務めたのがまだ軽傷だったバージルだった。殿を務めるように誰に言うまでもなく一人で戦いを挑み、ボロボロに傷つきながらも何度でも立ち上がり、精神疲弊（マインドダウン）を起こしながらも勝ったその姿は、今も目蓋の裏に焼き付いている。
痛かったはずだ、苦しかったはずだ。
それでもバージルは泣き言一つ漏らさず、精神疲労で倒れかけながらもそれでも自分の信念を決して曲げる事無く最後まで戦い抜いた。

その強さに憧れた。
しかし同時に、どうしてそれほどまでに強く在れるのか理解できなかった。
だから、きっと笑っているのはそういう事。アイズは痛みに耐えながらも笑みを浮かべて怪訝な表情を浮かべるバージルに本音を告げた。
「――バージルに、近づけた気がするから」
この痛みが、少しでも貴方の事を理解できた気がするから。
「――――」
その返答にバージルの表情が怪訝なものから無に変わる。それは即ち驚愕の表情。こんな表情もするんだとまた一つバージルの事を知れた事にアイズの頬が緩んだ。
「そうか」
ならばこれ以上は要らぬ問答だと告げるようにバージルの身体が加速する。ここに来て初めて攻勢に出た彼は、これ以上の無駄な戦いを終わらせるように拳を握り締めてアイズとの距離を一瞬で無に帰す。必殺の間合いに踏み込み――
「そうは――させないよっ!!」
しかしその絶技を放つ前に巨大な大双牙（ウルガ）によって遮られた。
まるでバージルとアイズを引き裂くように中間に振るわれた一撃を前にバージルはバックステップで距離を取り空中に回避する。その視線の先には崩れ落ちかける身体を必死に押さえるアイズの前に立ち守護するように佇むティオナの姿があった。
「アイズ、大丈夫？」
「ティオナ……うん、大丈夫」
「そっか、ならもうひと踏ん張りだよ」
ティオナとアイズは己の武器を構えてバージルを見る。それに対し、バージルは少しだけ目を細めた。
アイズを攻撃しようものならばティオナがフォローし、逆もまた然りだろう。そして二人の構えが受けの姿勢なところから容易に攻めては来まい。先まで攻めて来なかったのはおそらくバージルとアイ

ズとの間合いが余りに近すぎた為、だがバージルが攻勢に切り替えた隙を狙ってティオナも参戦したといったところか。
二人に増えて厄介となった。ならば一人減らせばいいだけの話。
「先ずは貴様から仕留めるとしよう」
空中で魔力の足場を生み出し脚を付き、下場を見下ろしながらバージルは冷然と呟いた。
それを証明するかのように、突如アイズ達の頭上に雨の如く幻影剣が生み出され、無拍子で容赦なくアイズ達に降り注いだ。
幻影剣参式――五月雨幻影剣。
「ガァ……ッ!?」
「ぐぅウッ!?」
突如降り注いだ剣群にアイズ達は反応できず、幻影剣は容赦なく身体に深々と突き刺さる。地面と縫い合わせるように突き刺さった幻影剣に身動きが封じられる中、苦悶に歪むティオナの目がバージルの姿を捉えた。
視線の先には魔力の足場を蹴り上げ加速するバージルの姿が。右脚を前方に伸ばしながら墜落する様はまさしく流星に如く。その技は何度も見てきたバージルの十八番。
魔拳技壱式――流星脚。
軌道を描くほどの見事な飛び蹴りの矛先はティオナに向けられていた。脚が縫い付けられているため回避行動不可、大双牙を盾代わりにしようとするが全身を幻影剣で貫かれている為うまく動けず間に合わない。
直撃は避けられない。それを理解したからこそ――ティオナは逆に脚が地面に陥没するほど踏み込んだ。
直後、バージルの蹴撃がティオナの腹部に容赦なく突き刺さった。
「ガァ……あああああああァァァッ!?」
瞬間、噛み締めていたはずの口が開き絶叫が迸る。
耐久値が高いティオナでさえ味わった事のない激痛。まるで焼けた鉄インゴットを直接内臓に埋め込んだような痛みが突き刺さった箇所から全身に広がっていく。

それは破滅の光。細胞さえも殺すベオウルフの光と衝撃がティオナの脳天からつま先まで蝕み意識が白濁に染まる。下手をすれば失禁したかもしれない。

「……なに？」

だからこそ、この状況が予測できたのはティオナの方であって、バージルには予想外の展開だった。

本来ならば流星脚が直撃した後、その衝撃でティオナの身体が後方へ吹き飛ぶはずだった。しかし現状ティオナの身体は固定され、バージルの脚も突き刺さったままだ。触れているだけで細胞を破壊するベオウルフの具足はティオナの肉体を破壊するが、バージルはティオナの間合いに留まってしまっている。

何故なのか、その理由は直ぐに解った。本来ならば吹き飛ぶはずの肉体が地面と結合している。否、地面にめり込まされた両足によって無理矢理固定されてしまっている……！

肉体が吹き飛ぶほどの衝撃を脚のみで受けた影響か、ティオナの脚は在らぬ方向へねじ曲がってしまっていた。だがそれでも、ティオナはバージルの攻撃に耐える事に成功していた。

「チィ……ッ！」

直ぐ様離脱しようとバージルは反対の脚で足場を作り彼女の腹部に突き刺さった脚を引き抜こうとする。

だが、抜けない。

「捕まえた……!!」

口端から血を流しながら、それでもティオナは笑った。

今も絶えず腹部から激痛が溢れだし複雑骨折した脚が灼熱の如く熱を発しているが、それでもティオナは笑みを浮かべた。

だって、そうだろう。

アイズ（同僚）はこんな激痛を何度も味わっても立ち上がっているのに。

レフィーヤ（後輩）があんな痛快な啖呵を言ったのに。

同じロキ・ファミリアであるティオナ（あ）・ヒリュテ（し）が、情けない様を晒していいはずがない――――！

「確かに、バージルの言うとおりだよ……あたしにはまだ大双牙（こいつ）を上

手に扱えてない。だから――この一振りに、全てを込めるッ!!」
技術が足りないなら、避けられない状況を作り出せばいい。
生半可な力で届かないなら、後の事を考えない全力を注ぎ込めばいい。
幻影剣で拘束された腕の細胞繊維がブチブチと切れる悲鳴を聞きながら、ティオナは両腕で大双牙を振り上げる。バージルが咄嗟に脱出しようと腹部に突き刺さる脚を引き抜こうとするが――逃がさない。
歯を食い縛り、気合いと根性で無理矢理腹部の筋肉を締め付け脚を捉える。同時に細胞破壊の光がなおも激しく体躯に襲い掛かるが、痛くない。目や鼻、身体の至る箇所から血が噴出するが、痛くない。
こんな痛み――
『それでも……！　ここで逃げたら、私は二度とあの背中を追いかけられなくなる！　他の誰でもない、私自身がそれを許せなくなる！　だから――私は逃げない！　この背中に背負った証と共に、最後まで抗ってみせるッ！』
あの痛みに比べたら――これっぽっちも痛くない!!
「いっけエエえええええええええええええええええええええええええええええっっっ!!」
「チィ――!」
想いの全てを開放するかのように、絶叫染みた咆哮と共に大気を引き裂いて大双牙が振り下ろされる。それを目前にして回避は既に不可能と判断したバージルは咄嗟に軌道を逸らそうとするが――止める。この一撃は横から衝撃を加えた程度でズレるものではない。文字通りティオナの全身全霊、小細工で回避できるものではない。
ならば迎え撃つ覚悟で一瞬だけ拳に全魔力を注ぎ込む。身体を捻り打ち上げ気味のアッパーを大双牙に叩き込む。
瞬間――衝撃。
勝ったのは、少女の意地だった。
「あああああああああああああああああああああああああああああああああああアァアァッ!!」

「――――ッ」
バージルの体躯が地面に激突する。それだけに収まらず、彼らを中心に衝撃で地面が陥没し粉塵が舞い、アイズ達を拘束していた幻影剣が跡形もなく砕け散った。地面が陥没したことによりティオナの脚は拘束から開放され、彼女自身の力に耐え切れずアイズを巻き込んで後方に吹き飛んだ。
無様に地を転がり込み訓練所を血に染める。今のティオナは意識を保つ事で精一杯で、指一つ動かすことも困難だった。
だから、
「……後は、頼んだよ、馬鹿姉貴」
「――――ええ、信じていたわよ、愚妹」
ティオナなら絶対に成し遂げると、彼女は信じていた。
何故なら――――彼女はお姉ちゃんなのだから。妹を信じるのは当たり前の事だろう。
【リスト・イオルム】
粉塵が舞い視界が覆われる中、地に脚を付くバージルの四肢に突如縄のような魔力で紡がれた紐が縛り上げ彼の動きを拘束する。
これはティオネの魔法。アイズ達を信じ隙が出来るその時まで練り込んだ拘束魔法。こんな機会はもう二度と訪れまい。
故に、
「さあ、思いっきしぶちかましなさい、レフィーヤ！」
ティオネの言葉に応えるように粉塵が膨大な魔力によって吹き飛ばされる。視界の開けた先にいたのは、巨大な魔法陣の上に立ち悠然と最後の詠唱を唱える魔導師。
彼女こそ千の妖精（サウザンド・エルフ）。
オラリオ最強の魔導師が扱える魔法さえも掌握するロキ・ファミリア魔導師の新鋭。
【吹雪け、三度の厳冬――――我が名はアールヴ】！」
レフィーヤ・ウィリディスに他ならない――――！
「――――ッ！」
魔法を放つ寸前、突如レフィーヤの全身に悪寒が奔る。その原因な

ど言わずとも知れている。
バージルの視線、ただ睨まれただけで息が止まるほどの威圧が彼女に襲いかかっている。これがバージル・クラネル。恐ろしさに杖を持つ腕が震え、喉が一気に乾く。出来ることならば逃げ出したくなる。
その恐怖を飲み込むように、レフィーヤは情けない己自身に問いかける。
何を悩んでいる。そんな事を考えている暇があるなら進め。憧憬するあの人達に胸を張れるように、ただ前へ、恐怖も迷いも置き去りにして――先へ！
震えていたのは一瞬だけだった。再度開いた瞳には迷いはなく強い意志が込められていた。
そして、魔法は完成する。
極寒の吹雪を呼び起こし、時さえも凍てつかせる無慈悲な雪波。
その魔法名は――
「【ウィン・フィンブルヴェトル】!!」
三条の吹雪が、空間さえも凍りつかせる氷結が一直線にバージルへ襲い掛かる。動きを封じられ回避は不可能。まさしく絶体絶命の危機。
「調子に乗るな……！」
されど、それを凌駕してこそ最強の一角（Lv.6）――！
レフィーヤが一瞬怯んだ隙。それはＬｖ．６にとって充分すぎる時間だった。
魔力を全開放で周囲に放出することでティオネの【リスト・イオルム】を力技で粉砕し、足裏に魔力を乗せて最大速度でその場から離脱する。紙一重となったが、それでもバージルはレフィーヤの魔法に対し回避を成功させていた。
ここまでしても、バージルを捉える事が出来ない。その事実を前に、彼らの表情に浮かび上がったのは絶望――ではない。
「ええ、知ってたわ。バージルなら躱すだろうって」
油断も慢心もない。あの男なら恐らくこちらの策の更に上を行くだろうと信じていた。

だからこそ、アイズ達がバージルに勝つ為にはその予測の更に限界を超えなければ不可能である。
そして、その最後のピースが此処にいた。
「最後のシメを譲るんだから決めなさいよ、駄犬」
「ハッ――誰にものを言ってやがる、ケツでか女」
餓狼の牙が、歓喜の咆哮を上げた。
限界にまで膨れ上がった筋肉が唸りを上げる。地面に這うように四肢で地面に罅を入れる様子はまさに飛びかからんとする狼だった。
今まで溜め込んできた力を解放するのを歓喜するように、嘗て無い速度でベートは疾走を開始する。軸となった地面が抉れるほどの力を込めて、ベートが刹那の死場へ跳躍した。
「【吹き荒れろ（テンペスト）】……！」
その疾走に合わせて、アイズの一点に収束されていた【エアリエル】がベートのメタルブーツに注ぎ込まれる。魔力を喰らう特殊武装である【フロスヴィルト】は風を吸収する事でなお加速し、風の壁を蹴り上げることでベートの速度はまさしく神速の領域に到達する。
ベートの加速は止まらず、右方から迫り来る三条の雪波に怯えを見せる事もなくバージルに接近する。バージルは紙一重で【ウィン・フィンブルヴェトル】の回避に全霊を注いでおり、迫り来るベートに対し何の対処もできずにいた。
それこそが、彼らの最後の策。
直撃と紙一重の間に潜り込み最強の攻撃を叩き込むことこそが一か八かの賭けだった。
身体を捻ったベートの右脚が雪波に飲まれる。本来ならばその魔力すらも変換することが可能だっただろう。
だが、
「ガァアアアッッッ!?」
灼熱のような冷気が右脚から体躯に侵食する。時さえも凍てつかせる雪波は、ベートのメタルブーツに罅が奔るほどの魔力を注ぎ込んでしまっていた。

即ち、容量限界（スペックオーバー）。まだ試作段階だった特殊武装では魔法攻撃を全て変換するまでの技術には至っていなかった。

冷気の侵食にベートの視界が白濁に染まる。全身の感覚さえも凍り付いてしまった刹那の間に、ベートの意識は走馬灯のように別の記憶を思い出させる。

思い出したのは、四年前の記憶。

バージルがベートと同じＬｖ．３となり、戦いを挑んだ時の記憶。

フィンやガレスが興味深そうに見ている中、地べたを無様に這いつくばるベートをバージルは見下ろしていた。その時、バージルが憐憫や嘲笑の表情を浮かべていたならばベートは赫怒に狂い吠え叫んでいただろう。

だが、その時のバージルには何も浮かんでいなかった。憐憫も嘲笑も、ただ無表情で何も映さぬ眼でベートを見下ろしていた。まるで景色を映し返す鏡のように、バージルの目はベートを捉えずただの有象無象と何ら変わらないモノを見るように見下ろしていた。

再度思い出したのは、先日の遠征での記憶。

階層主【ウダイオス】を討伐した後に現れた特殊階層主（イレギュラー）【ベオウルフ】。バージルとその階層主との戦いに誰しもがバージルの動きに見とれている否、ベートだけは気付いていた。

――バージルの口端が僅かに釣り上がっていた事に。

無意識に笑みを浮かべて、その瞳は然りと敵の姿を目に焼き付けている。そんな彼の様子など見たことがない――否、一度だけあった。初めて逢った時、入団試験の時の彼は、確かにあんな表情を浮かべていたではないか……？

それはつまり、もうバージルはベートの事を敵としても見ていないという事。取るに足らない有象無象の一人としか認識していないという真実。

ああ、そんなこと――認められる訳がねえだろうがァ……！

「バァァァァァァァジィィィィィィィィィル――ッ!!」

赫怒が体躯に熱を与え、意識が現実へと帰還する。戻った視界の目前には、今もなお鏡のように誰も見ない瞳でこちらを見るバージルの

姿が。
　それが許せなくて、腹立たしくて、凍り付く右脚に力を込め罅が奔る。
「なァ、てめぇはいったい何処の誰を見てやがる。いつまで虚空を映していやがる。目ん玉綺麗さっぱり洗って良く見やがれ。てめぇの敵は今ここにいんだろうが。余所見なんかせず、あの日のように――初めて出会ったあの時のように、他のもん見ずにただ俺だけを見やがれ……！
「お前の相手は――この俺だろうがァああああああああああああああああああッッッ!!」
　咆哮が轟き、その想いに応えるようにメタルブーツの輝きが増して周りの魔力を吸収する。ついに氷結した脚が自由を取り戻し、その牙がバージルに向かって解き放たれた。
「カッコ付けなさいよ、男の子」
　ティオネが呟く。
「届いて……！」
　ティオナが祈る。
「当たって……！」
　レフィーヤが告げる。
「ベートさん……！」
　アイズが見る。
　そして、
「ぶっ飛びやがれェェえええええええええええええええええええええええええええええ!!」
　ベートの蹴撃にアイズの【エアリエル】、そしてレフィーヤの【フィンブルヴェトル】の全てが組み合わさった彼らが放てる最大威力。
　その一撃が直撃する瞬間、時さえも凍り付く刹那――
　確かに、バージルの頬が釣り上がりその瞳がベートの姿を捉えたのを見た気がした。

「――【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】」

そして、時を動かす詠唱が木霊した。

番外編３：強者の壁　―５―

冷気の突風が訓練所に吹き荒れ、肌を突き刺すような衝撃が顔面に襲い掛かり反射的に目蓋を閉じる。やがて冷風は止み、顔を守っていた両腕を降ろして再び開いた視界には巨大な氷塊が鎮座していた。

バージルが佇んでいた場所には巨大な氷塊が存在するだけで、他に動く気配はない。それは即ち――

「……終わった、んですか？」

皆の代弁をするようにレフィーヤは呟き膝から崩れ落ちる。今までの緊張がどっと押し寄せてきたのか腰が抜けて力が入らない。正直ここまで戦略で追い込んでおきながら勝てたのが不思議な相手だった。

「イタタタ……もう無理、限界。これ以上一歩も動けないよ～」

「ティオナ、大丈夫？」

「……ていうか、あれ直撃して生きてるのかしら、バージル」

「ハッ！　そ、そうでした!?　つい無我夢中で、どどどどうしましょうッ!?」

先ほどまでの死闘を区切るように穏やかな雰囲気が訓練所に流れていく。ボロボロに傷ついた彼らだが、その表情には笑みが浮かんでいる。場の雰囲気はすっかり試合終了を示している中、ベートだけは警戒を解かずただじっと氷塊を睨みつけていた。

「ベートさん？」

その反応に訝しげにアイズが見つめるがベートは気付かない。彼はレフィーヤの魔法が直撃して砕けた具足から覗かせる凍傷した素足を庇いながら、忌々しげにポツリと溢した。

「クソッ、防ぎやがったあの野郎……！」

どういう意味、とアイズは尋ねる事が出来なかった。

ビキッ――――という亀裂音と共に、氷塊の内側から外側に亀裂が駆け抜ける。それは、本来ならばあり得ない光景だった。

「――ッ！　レフィーヤ！」

「ち、違います！　私は何もしてません！」

本来、発動した魔法が効力を失うには二つの種類が存在する。
一つは魔力切れ。込められた魔力が底を尽いた事によって存在することが出来なくなり消滅するパターン。
もう一つは発動した魔法使いが自身に意思で魔法を解く場合。変身魔法などがこれに当たる。
しかし、今回の場合はそのどちらでもない。『九魔姫(ナイン・ヘル)』リヴェリアの魔法がこんな短期間で魔力の効果が尽きるはずがなく、放ったレフィーヤもまだ魔法を解いてはいなかった。
ならば何故氷塊は砕けようとしているのか。その理由など一つしか存在しない。
魔法を解く一つの例外(イレギュラー)。即ち、
「なにボサッとしてやがる、とっとと構えやがれ！」
――より強い力で破壊される場合である。
氷塊が悲鳴を上げるようにひび割れが加速し、それに呼応するかのように空気が重く張り詰めていく。まるで迷宮の孤王(モンスターレックス)と対面するような、否、それ以上の威圧感が気の抜けた身体を締め付けるように全身を力ませる。
それが示す真実はただ一つ。
「嘘、でしょ……」
折れた脚や穴の開いた腹部の激痛さえも忘れ、ティオナはうつ伏せに倒れた身体を右腕を杖代わりに起き上がった状態で呆然と見る。
「……ッ！　レフィーヤ下がりなさい！」
比較的軽傷なティオネは冷静に対処しようと声を張り上げるが、その声音は震えていた。肌で感じ取った力に冷や汗を隠せない。
「そんな……」
自身が知る限り最強の一撃、憧憬するリヴェリアの魔法だというのにそれを目前で打ち破られる光景にレフィーヤは傍で叫ぶティオネの声さえ聞こえずただ眺めるしかない。
「……ッ！」
これから何が起こるのか、それを理解したからこそアイズは全身を駆け巡る激痛を喉で押し殺して再び剣を握り締めた。しかし立って

いるのも精一杯で、一歩でも踏み出せばそのまま倒れてしまうほど彼女の身体は限界だった。
「来るぞ……ッ！」
感覚の無い凍傷した素足を引き摺りながらベートは氷塊に向けて声を張り上げる。
それが合図だったのか、氷塊の亀裂は限界にまで広がり、跡形も無く砕け散った。
刹那――――絶望が、顕現した。
「――この程度で倒せたつもりだったのか？　愚かな」
そこにいたのは、蒼き悪魔だった。
まるでその空間だけ歪んでしまったようにゆっくりと地面に着地する。視線を向けられる、ただそれだけで視線が刃と化して全身を硬直させる。異形の頭に、鱗のような全身を覆う皮膚。そして何より目を引いたのは右腕だった。
「無傷だと……!?　ふざけやがって……ッ！」
ベートはただ一人、彼の傍で攻撃を受ける瞬間を目撃していたからこそ、目前の現実に奥歯を噛み締める。ベートの放った渾身の一撃、それは直前でバージルの右腕で防がれた。
ベート達が現状出せる最大威力を右腕一つで受け止めたのにも関わらず、その腕は僅かに氷結が張り付いているが、それだけだった。即ち、バージルにダメージを与える事は出来ていなかった。
その事実が彼らの覚悟を揺さぶる。そしてその決定的な隙を悪魔が逃すはずがない。
掌を上に向けたままバージルは右腕を突き出す。まるで掌の何かを握り潰すような行動にアイズ達は一瞬訝しげるが、気付いた時には既に手遅れだった。
視界を覆い尽くすは、蒼き幻影の剣。先ほどまでとは込められた魔力の密量が桁外れな幻影剣がまるで夜空を照らす星々のようにアイズ達を中心に半円の球体を形作るように隙間なく覆い囲まれている。

その数、視認できるだけでも数十以上。
幻影剣奥義――――絶界。
回避不可な幻影の剣群が、捉えた贄に牙を向く。
「安らかに眠れ――――」
主の命に従うように、アイズ達を握り潰すようにバージルの右手の掌が握られ、それに呼応する形で幻影剣が唸りを上げて空を切り裂き彼女等を貫かんと迫る。
回避不可能。迫り来る死の幻影に彼女達は為す術もなく――――

「そこまでだ、バージル」

ピタッと、掛けられたフィンの言葉に幻影剣はアイズ達の喉元で静止した。
バージルを咎めるように、いつの間に寄り立ったのかフィンが彼の突き出した右腕を掴んでいた。
「何の真似だ、フィン」
ギリッ、と空間が悲鳴を上げる。余計な仲介、もしくだらない理由ならばその剣群は容赦無くフィンに向けられていただろう。
極限の殺意を向けられながらもフィンは顔色一つ変える事無く告げる。
「僕は言ったはずだよ、【悪魔の引鉄(デビルトリガー)】を使ったら敗北だって。それとも前言を撤回するつもりかい？」
「……」
バージルとフィンの視線が交差する。向けられていた殺気は、もはや効力を失っていた。
「この試合、君に引鉄を引かせた彼等の勝ちだ」
「……いいだろう、条件ならば確かに俺の敗北だ」
バージルは【悪魔の引鉄(デビルトリガー)】を解き、それと同時にアイズ達を囲んでいた幻影剣も影も形もなく消失する。少しの間だとはいえ喉元の死から解放された安堵感でアイズ達は喉に溜まった唾を飲み込みながら緊張が解れた勢いで膝が崩れ落ちた。

冷や汗が大量に流れ荒々しく呼吸を繰り返すアイズ達を無視してバージルは訓練所の出入り口に向かう。
「貴様の言う親睦会とやらはこれで終わりだ。ならもはや俺がここにいる必要もあるまい」
「うん、付き合わせて悪かったねバージル。怪我の治療は……必要なさそうだね」
「無論だ。このような戯れ、二度と付き合わせるな。次は無いと思え」
「君には迷惑掛けたと思っている。なんなら今度奢ろうか？」
「いらん世話だ」
苦笑するフィンを無視しバージルは己の得物である闇魔刀を受け取ると今度こそ話は終わりだと背中で告げるように荘厳な雰囲気を発しながら訓練所から去ろうとする。
しかし、その後ろ姿を止めるように一人の狼の咆哮が轟いた。
「ふざけんな、ふざけんじゃねんぞバージルッッ!!」
バージルの歩みが止まる。しかし振り返る事はない。その後ろ姿に満身創痍なベートは緊張が解ければ途切れてしまう意識をかき集め、射殺すような睥睨で睨み付ける。
「これが勝ちだと？　こんなものが勝利だと？　こんな無様な真似晒しておいて何を誇れってんだふざけんな！」
分かっている。もしフィンの出した条件が無ければ今頃死んでいたのは自分達だということぐらい。
分かっている。自分達とバージルではそれほどまでの差が存在していることぐらい。
分かっている。全部謂われなくとも理解している。
分かっている。分かっている、分かっている！
――だけど、
「俺はこんな、恵んで貰ったような勝利で喜ぶような腰抜けじゃねえ！　試合に勝って勝負に負けてそれで満足するようなクソッタレなんかじゃ断じてねえんだよ！」
叫ぶ内容は疲労のせいか滅茶苦茶で、だけどその分彼の想いを偽り無く告げていた。

「だから、俺は――――」
自分の弱さに殺意が湧く。目前の男を振り替えさせられる力もない無様さに憤怒が込み上げてくる。
その弱さをベート・ローガは受け入れる。強くなるために、バージルに真の意味で勝利するために。
己が弱者であるとベートは屈辱に身を震わせながらも認めたのだった。
「俺、が――――！」
それは誓約。
他の誰でもない、己の魂に誓う約束。いずれ果たすと決めた祈り。
「俺が、テメェの全てを超えてやる！　今度は俺がテメェを追い抜いてやる！　テメェを倒すのはこの俺だ！　だから、次は俺が必ず勝つ！　首洗って待っていやがれ――――ッッッ!!」
男の意地と見栄の篭った魂の咆哮。その宣誓に、熱が浸透していく。
「そう……だよね」
「全く、まさか駄犬に教わるハメになるとはね」
両足が折れまともに立てないティオナに肩を貸すティオネ。二人の目にはもはや先ほどまでの死に怯えた恐怖の色は残ってなどいない。在るのはベートの熱がうつったように爛々と燃え上がる強い意志のみ。
「バージル、あたしもっと大双牙（ウルガ）を上手く使いこなしてみせるよ。もうステイタス任せになんてしない、完っ璧にバージルみたいに操ってみせる。もう、苦手なんて言い訳なんてしない。だから、」
「だから、次は私達が勝ってみせるわよ」
アマゾネス姉妹に釣られるように、未熟な魔導士もまた擦り切れた精神を奮い立たせ起き上がる。未だ膝は震え、支え代わりとしている杖も震えているが、その瞳には最初の頃に宿っていた恐怖は微塵も感じなかった。
「私も、もう逃げません。未熟かもしれません、臆病者なのかもしれません。それでも、私はロキ・ファミリアの一員として、冒険者として

！　私一人じゃ敵わない、でも次は皆さんと一緒に貴方に勝ちます!!」
「……私、は」
　レフィーヤの啖呵を訊いてアイズは佇む背中を見据える。たった数メイルの距離が、あまりにも遠く感じる。それが彼等の差なのだ。もしも今アイズがバージルの傍に駆け寄ったとしても何の意味もない。否、それをアイズは決して認めない。
　その背中に並び立つのは、彼の隣に相応しい強さを手にしてからと決めているが故に。
「もっと強くなる。だから次は……勝つよ、バージル」
　もう二度と、こんな無様な様子は見せない。
　次は必ず、真の意味で勝利してみせる。
「……そうか。ならば――――」
　訓練所にいる全員から向けられた熱い視線を背中で感じ取り、今まで一度も振り向く事の無かったバージルが顔のみ振り返り初めて視線が交わる。
　僅かに振り返った横顔から見える眼光、そのサファイアに似た紺色の瞳から放たれたのは、今までの殺気が遊戯としか感じ取れぬほどの極限の殺気だった。
「次は、敵として貴様らを始末してやろう」
　――――時間が死んだ。
　そう錯覚するほどの死の気配。先程までは全力などかけ離れていた事を有無を言わさず本能に刻み込ませる殺意。もしこの殺気を試合中に浴びていればとてもではないがまともに戦うことは不可能だっただろう。
　第一級冒険者であるフィンやリヴェリアですらそう感じるほどの殺気を真正面から浴びせられ、正気でなど居られるはずがない。
「く、はは……！」
「へへへ……！」
　しかし、予想とは裏腹に彼等は笑みを浮かべていた。
　極限の殺意を浴びて気が狂った訳ではない。バージルの先の発言、

それはつまり認めたという事なのだから。
即ち、有象無象の石ころではなく。
道を阻むただの障害でもなく。
彼等はバージルにとって、〝敵〟として認められたという事なのだから。
彼等の目に、もはや恐怖など何処にも存在しなかった。
「フン……」
それを見届けて、今度こそバージルは訓練所の扉を開けて退出した。コツコツと離れていく足音が聞こえなくなるまで遠ざかるのを待ち、
「ガァッ……！」
「ぐゥッ……！」
瞬間、アイズ達はほぼ同時に地面に受け身も取れず屈伏した。
「あ～、死ぬかと思った～～」
「ったく、化物かよあいつ……」
もう指一本動かせないと訴えるように大の字で寝転がって彼等は疲れた笑みを浮かべる。
そもそも、アイズ達は既に限界を超えていた。迷宮の孤王（モンスターレックス）に挑むような緊張感と集中力、己が全てを駆使し力の限りを振り絞り、更にそこから限界を超えた技の数々。正直ランクアップしていたとしてもおかしくないほどの激戦だったのだ。
それでもバージルの前で倒れなかったのは、彼等の意地だろう。次は勝つと決めた相手にこれ以上無様な様子を見せたくなかったからか。
「お疲れ様、素晴らしい試合だったよ」
「無茶させた者の発言とは思えんな」
荒々しく呼吸を繰り返すアイズ達の元に、労いの言葉を掛けながらフィンが近づき、その隣では溜息を吐きながら救急箱を手にしたリヴェリアの姿が。
バージルとの試合で必ず大惨事になると予測していたリヴェリアは案の定必要となった救急箱を倒れる彼等の傍に置き、適切な処置を

行う。
「ティオナ、バージルの【ベオウルフ】は再生を無効化する。すまないがベオウルフの魔力が抜ききるまで魔法やポーションは無意味だ、痛むと思うが耐えてくれ」
「了―解っと。うぅー、穴の開いたお腹が痛むよ～～」
「ちょうどいいじゃねえか。腹が引っ込めばその分てめぇの絶壁にも膨らみが出来るだろうよ」
「誰が無乳だぁああああああああああッ!!」
「あ、相変わらずですね……」
「団長～、私の活躍見てくれましたか!?」
「ハハハ、ちゃんと見ていたよ。見事な指揮だった、ティオネ」
いつも通りの光景。胸が温かくなる日常を見てアイズはほっと安心するように息を吐いた。疲労感と集中の途切れで心地良い睡魔が押し寄せ彼女の意識を眠りの闇へと誘っていく。
「……？」
その直前、朦朧とした意識の中でふと気になるモノを見つけた。
点々と続く血痕。それ事態は珍しくはない。あれ程の激戦を繰り広げれば大量の血が流れるのは自然な事だ。しかし、彼女の意識が向いたのは別の訳。
真新しい血痕は連続してある方向へと続いていた。血痕が続く先にあるのは訓練所の扉。そこを出入りしたのは試合が終了してからはただ一人のみ。
「……バージル？」

◇◇◇

早朝という事もあってか、明かりの灯っていない廊下をバージルは一人淡々と歩いていた。その歩みはつい先程激戦を繰り広げてきたのにも関わらず揺るぎなく、彼の意志を示すかのように重い。
やがて廊下は終わり、反対側から光が差し込んでくる。その廊下の境目に一人佇む影が存在した。

「おっ、なんやもう終わったんか？　お疲れやな、バージル」
　ニヤニヤと目を細めて笑うのは、道化師（トリックスター）の称号を与えられしロキ・ファミリアの主神。笑う目に隠された真意を明らかにしない神がそこにいた。
「何の用だ、ロキ」
「ん？　いやフィンが親睦会という名の試合をするって言うやん？　これはうちの好感度を上げる絶好のチャンスやん。だから怪我しとる眷属（こども）の面倒を見ようと思ってなー」
「ついでに今ならアイズたんのあんな所やそんな所までグヘヘヘ……！」とニヤけながら危ない手付きをするロキの手には救急箱が。その様子に対しバージルは呆れるように目蓋を閉じる。
「なら疾く行け。リヴェリアが治療しているが、今なら間に合うだろう」
　端的に告げると話を切り上げるようにバージルはロキの隣を通りすぎようとして、
「待ちや」
　ふと、ロキに通り過ぎる刹那に左腕を掴まれ阻止された。
「……何の真似だ」
「言ったやろ？　うちは怪我しとる眷属の面倒を見るって。とぼけても無駄やで。神に嘘は通じん」
　なぁ？　とロキは飄々と笑みを浮かべ、
「バージル、いい加減右腕の【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】を解いたらどうや？」
「――――」
　ロキの言葉に、一瞬バージルが沈黙する。その沈黙こそが何よりの証拠だった。
　振り返った仏頂面のバージルとニヤけ面のロキの視線が交差する。
　十秒、或いは十分か。とても長く感じもしたし、或いはすぐだったのかもしれない。どちらにせよ、先に折れたのはバージルの方だった。
　やれやれと、辟易するかのように嘆息を吐き、

瞬間――――廊下が鮮血で染まった。

ガシャッ、と金属が床に落ちる音が響く。それは粉々に砕け散った【ベオウルフ】の残骸だった。

ロキに促されるがままにバージルは廊下の壁にもたれかかり、ロキはその悲惨となった右腕を見て珍しく顔を歪めた。

バージルの右腕、それは見るも無残な姿へと変わっていた。骨は突き出し肉は潰れ、更に一部は凍結し間接はあらぬ方向へ歪んでしまっている。何より悲惨なのは、【ベオウルフ】の残骸が内部に潜り込み再生を不可能にさせてしまっていることだった。

そもそも、迷宮の孤王（モンスターレックス）さえも打ち倒すＬｖ．６級の攻撃魔法をまともに受けて無傷で済むなどあり得はしない。いくらバージルがＬｖ．６の冒険者とはいえ、人間なのだ。

今まで無事に見えたのはバージルの魔法である【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】のおかげ。自身の望む姿に変身したお陰である程度受け止める事が可能だったが、それでも　ベートの蹴撃にアイズの【エアリエル】、そしてレフィーヤの【フィンブルヴェトル】の全ての込められた一撃をまともに受けて耐え切れるはずがなかった。

右腕のみ限定して普段通りの姿を【悪魔の引鉄（デビルトリガー）】で模倣して誤魔化していたが、それが解かれた事によって真実が顕となった。

ロキは救急箱からピンセットを取り出し体内の【ベオウルフ】を慎重に抜き取ると一度水で未だ残っている残骸を洗い流し、そこにポーションをぶっかける。完全に回復することは出来ないが、それでも表面はある程度再生していた。

血だらけとなったバージルの腕に包帯を巻きながら、ロキは悲痛な顔を歪める。治療中、本来ならば泣き叫ぶほどの激痛が絶え間なく襲っているはずなのだ。否、それをいうならば現在進行形で痛みは持続している。膨大な魔力を受け止めた事でバージルの右腕では【ベオウルフ】以外にはアイズやレフィーヤの魔力が混ざり合い、異物が破裂寸前のように蠢いているのだ。

それでもなお、バージルは決して顔を歪めることはなかった。まる

でそんな痛みなど無いかのように。
何も、感じていないように。
「……なぁバージル。痛みってのはな、我慢するもんじゃないんやで？　痛みは、訴えるもんなや」
包帯を巻きながら、知らず声が溢れていた。
痛覚、感覚は人間が生きていく中で重要な感覚器官の一つだ。地面の反動を感じ、身体を動かす感覚を感じ取る。即ち現実を生きるにおいて最も必要なものだろう。
それがなければ、夢となんら変わらない。痛みに慣れるとはそういうこと。我慢して我慢して我慢し続ければ、いつか痛みに慣れるかもしれない。
だが、その成れの果ては怪物だ。何も感じないという事は、何も理解できないということ。ただ目的の為に部品をばら撒きながら動くゼンマイとなんら変わらない。
「――だからな、バージル。いい加減認めんか？　アイズたん達のこと。アイズたん達は、バージルが思っとるほど弱くなんかないで」
そうならない為に、人は誰かに頼るのだ。耐えるのではなく、託すのだ。
ロキは珍しく開いた目でバージルの瞳をはっきりと見て告げる。何もかも一人で抱え込んで何も言わない不器用でムッツリスケベなこの男の芯に届かせるために。
「……貴様は何を勘違いしている」
だがその覚悟は、別の意味で裏切られた。
「奴等は強くなる。いずれＬｖ．６にもたどり着くだろう。その覚悟と意志を、力を求める渇望もある。俺は奴等が弱者などと侮った事は一度もない」
「え？」
驚愕するロキを差し置いてバージルは強引に包帯を奪い取ると巻き締め、地面に散らばった【ベオウルフ】の残骸をかき集めて廊下から出ようとする。
バージルの予想外な返答に思わず呆然としていたロキはふと尋ね

た。
「……なら、アイズたん達に負けるかもしれへんと思っとるんか？」
その問に、僅かに振り返ったバージルの横顔にある瞳に宿るのは、強い決意。
「――勝つのは俺だ……！」
もう二度と、敗北など許さない。
強い覚悟と共に向けられた意志にロキは今度こそ何も言えなくなり、ただジッと立ち去るその背中を見送るしかなかった。
しばらくして、ポツリと。
「ホント、うちの眷属（こども）達はどいつもこいつも負けず嫌いなんやからなぁ」
背後を見送るロキの表情。それは誰が見ても出来の悪い息子を見送る母親の微笑みを浮かべていたのだった。

◇◇◇

――慢心していた。
正直な話、心のどこかで満足していたのだろう。もう充分だと、本家より強くなったのではないかという傲りが確かに俺の中には存在していた。
その結果があの様だ。情けなくて自分に殺意が湧く。こんなもので満足していたのか俺は？　いったい何様だというのだ。本家ならきっと一撃も喰らうことなく一撃で倒していたのに違いない。
未熟、情けない、腹ただしい。俺はいったいどうしていたというのだ。こんなもので満足するなど、バージルロールプレイヤーの風上にも置けない……！
ああ、今なら分かる。きっとフィンは俺にこう言いたかったに違いない。
〝最近さー、調子乗ってねぇ？　そんなんでバージル名乗れると思ってんの？〟
ああ、その通りだ……！　俺のせいでバージルの名を穢してしまっ

た……！　もっと強くならなければ！　アイニードモアパワー!!
　そのためにもまず、ダンジョンでジャストガードの練習だ！　右腕が動かない？　身体が凍結して感覚がない？　それがなんだ、それがどうした！　本家ならば例え魔力が底を付いて出血多量で満身創痍でもラスボスに挑むんだ。それに比べたら屁の河童だろうが！
　うおおおおお！　とりあえずウダイオスで練習だ！　俺の冒険はまだまだこれからだァッッッ!!